国際協働学習

iEARNレポート

2020年度

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構（JEARN）

2021年6月1日発行　ISSN ２４３４−００４９（オンライン）

国際協働学習iEARNレポート（2020）　目次

番	題　　名	所　　属	報告者代表氏名	頁
	論文編			1
1	ジェイアーンの国際協働学習の成果と課題の考察 グローバル・プロジェクトについての実践状況調査から	実践女子大学短期大学部 東洋学園大学	栗田　智子 滝沢　麻由美	2
2	ジェイアーン国際協働学習研究ワークショップ 第一回開催報告 デジタル・シティズンシップ メディアリテラシーとの関係から学ぶ	NDYS創設者 実践女子大学短期大学部 法政大学	岡本　和子 栗田　智子 坂本　旬	9
	プロジェクト実践編			18
3	Machinto - Hiroshima for Peace ～戦後 75 年を迎え、広島・長崎は次世代へどう伝えられているか～	iEARN & JEARN	高木　洋子	19
4	GOMI on EARTH ～ごみの長い旅～	iEARN & JEARN	高木　洋子	21
5	ANNE FRANK Meet &Learn -ANNEパネル展　2020ー	iEARN & JEARN	高木　洋子	23
6	オンラインが可能にした防災世界子ども会議2020成果発表会 パンデミック時代の国際協働学習	防災世界こども会 議実行委員会	納谷 淑恵 岡本 和子	24
7	TOPA（The Olympics & Paralympics in Action）Project Well-being & Solidarity in Response to Covid-19	東洋学園大学	滝沢　麻由美	27
8	THE TEDDY BEAR　PROJECT REPORT-2020	Teddy Bear Project	Puppala Rasagnya	29
9	地域と世界をつなぐSDG s 大正琴プロジェクトは防災＆大正琴プロジェクトとして再スタート！	大正琴プロジェクト 琴リンピック	廣田　元子 琴　源 （金子　英樹）	31
10	青少年ペンフレンドクラブ（PFC） ー海外文通の取組ー	日本郵便株式会社	郵便・物流事業企画部 切手・葉書室 青少年ペンフレンドクラブ	35
	小学校実践編			37
11	福島県白方小学校からビデオレターで世界へ発信 コロナに負けない元気な姿をTOPAの世界大会で紹介	白方小学校 東洋学園大学	鹿又 悟 坂本　ひとみ	38
12	こんな時だからこそ原点に戻って ー継続し続けることの意義ー	金沢市立大野町小学校	角納　裕信	41
13	国際交流とプログラミング学習の融合 マインドストームEV3を活用したテディベアプロジェクトを通して	金沢市立四十万小学校 金沢星稜大学	齋藤　亜蘭 清水　和久	42
14	Holiday Card Exchange Project ー公立小学校におけるiEARN参加プロジェクト2年目の実践報告－	世田谷区立千歳小学校 世田谷区英語活動支援員	島崎　はるか 長谷川　早百合	45

	中学校・高校実践編			47
15	コミュニケーション能力・異文化理解能力を育成する ー中学校版テディベアプロジェクトー	星稜中学校	森　直樹	48
16	Girl Rising Project”の実践― 高3年生選択授業・「国際理解」―	啓明学園中学校高等学校	関根　真理	50
	大学実践編（含Youth　Project）			52
17	FOLK COSTUMES AROUNG THE GLOBE PROJECT ―ルーマニアの高校生との国際協働学習―	青山学院大学	勝又　恵理子	53
18	iEARN Project for Future Teachers 未来の教員たちの国際協働学習“Dream School of the Future”	明治学院大学	長谷川　早百合	55
19	異年齢グループの協働によるHoliday Card Exchange Project	実践女子大学	津田　ひろみ	57
20	大学を拠点としたHoliday Card Exchange プロジェクト COVID－１９パンデミックの中のオンライン・ワークショップの試み	実践女子大学 短期大学部	栗田　智子	59
21	GOMI on EARTH projectからの学び ―Youth projectを通して―	青山学院大学	岡田　麻唯	61
22	Peace Talk from Nagasakiの活動報告 ―活水女子大学「語学ボランティア演習」での被爆講話の配信―	活水女子大学	吉牟田　聡美	63
23	小中学校の国際協働学習を進めるうえでの大学の支援の実際 ―テディベアプロジェクトの支援を通して―	金沢星稜大学	清水　和久	65

https://jearn.jp/iearn-report/index.html

ISSN 2434-0049

論文編

ジェイアーンの国際協働学習の成果と課題の考察

グローバル・プロジェクトについての実践状況調査から

栗田智子　　（実践女子大学短期大学部）
滝沢麻由美　（東洋学園大学）

ICT を使い海外の学校とともにプロジェクト型学習を行う国際協働学習は、ニューノーマルにおける新たな学びの形の一つとなる可能性がある。日本における国際協働学習（NGO アイアーンのグローバル・プロジェクト）の参加実態はこれまで調査されていなかった。国際協働学習が、日本でどのようにおこなわれどのような成果と課題があったのか、その実態を掴み、今後の課題解決につなげるために、2020 年度グローバル・プロジェクトを実践したジェイアーン会員に任意でアンケートを実施した。回答者は 41 名で、プロジェクトの参加学年は「小学校高学年」が最も多く、プロジェクトに参加した関連教科は、「外国語」が最も多かった。会員自身および生徒について感じた一番の成果は「グローバルなコミュニティとつながり、その一員となった」ことであり、最大の課題は「授業内容への組み込みや時間数でのやりくり」であった。

国際協働学習　　ジェイアーン　　アイアーン　　グローバル・プロジェクト　　小学校外国語

1. はじめに

2020 年は、新型コロナウィルスのパンデミックをきっかけに、GIGA スクール構想が前倒しとなり、日本では、全く新しい、いわゆるニューノーマルな学校教育へ移行する節目となった特別な１年であった。

文部科学省初等中等教育局が発行した「ニューノーマルにおける新たな学びと必要な環境整備等について」(2020)の資料によると、GIGA スクール構想で目指すべき次世代の学校・教育現場は、以下の５つを挙げている。

1. 学びにおける時間展距離などの制約を取り払う～遠隔・オンライン教育の実施～
2. 個別に最適で効果的な学びや支援、～個々の子供の状況を客観的・継続的に把握・共有～
3. プロジェクト型学習を通じて創造性を育む～文理分断の脱却と PBL による STEAM 教育の実現～、
4. 校務の効率化～学校における事務を迅速かつ便利、効率的に～、
5. 学びの知見の共有や生成～教師の経験知と科学的視点のベストミックス（EBPM の促進）～

同資料には、１に関連して、対面指導と遠隔・オンライン教育のハイブリッド化の実践案として、海外の学校との交流学習を挙げており、３のプロジェクト型学習の実現と合わせて考えると、ICT を使い海外の学校とともにプロジェクト型学習を行う国際協働学習は、ニューノーマルにおける新たな学びの形の一つとなる可能性がある。

一方、世界の教育に目を向けると、新型コロナウィルスの世界的感染爆発が起こる以前の 2020 年 1 月 14 日に、世界経済フォーラムが、“Schools of the Future Defining New Models of Education for the Fourth Industrial Revolution”(2020) という第４次産業革命のための教育（Education4.0）についての報告書を出版した。

その中で、未来の教育モデルとしてインスピレーションを与える教育実践を挙げた。その１つとして、挙げられた教育団体が、国際協働学習を推進するアイアーン(iEARN)である。アイアーンは、「バーチャルな異文化交流を通じた学習者のグローバルコミュニティ」（世界経済フォーラム、2020 p.19 筆者訳）で、以下のように紹介されている。「アイアーンは、1988 年に設立された非営利組織で、140 か国以上の 30,000 を超える学校や若者組織と提携している。異文化間の交流に従事し、オンラインネットワークを介してプロジェクトで協働する学習者のグローバルコミュニティを創出している。現在、200 万人を超える生徒が世界中のアイアーンの協働プロジェクトに参加している。」（世界経済フォーラム、2020 p19 筆者訳 ）

このように、日本の文科省も、世界経済フォーラムも、ICT を使い海外の学校とともにプロジェクト型学習をおこなう国際協働学習を未来型の学習であると捉えていることがわかる。

アイアーンの日本センターであるジェイアー

ン(JEARN)は、１０６名（2021 年５月９日現在）の会員を有する非営利団体である。学習指導要領の改訂で、「主体的・対話的で深い学び」が重視されることや、2020 年に小学校外国語が教科化となったこともあり、ジェイアーン の国際協働学習の実践に関心を持つ教員が増えてきたように思われる。

しかし、これまでジェイアーン全体として、どのくらいの会員が、このグローバルなデジタル・ネットワークを使って、国際協働学習をおこなっているかという調査はしてこなかった。小学校外国語の教科化と、コロナ禍による ICT の普及という変化のあった 2020 年度に、日本の教育現場で、どのような実践がおこなわれたのか、そして、実践した会員はどのような成果と課題を感じたのかをまず把握することが必要と思われる。

本研究は、2020 年度、日本で、ジェイアーンの国際協働学習に参加した会員対象に任意でアンケートを行い、国際協働学習への参加実態と、成果と課題を考察するものである。

２．先行研究

アイアーンの創設者、ピーター・コーペンは、1988 年、アメリカとロシアの生徒たちが協働学習をおこなうことにより相互理解と相互受容の精神を持ち、グローバル・シチズンとして地球規模の問題を平和的に解決できると確信し、国際協働学習のプロジェクトをおこなった。その“The New York State-Moscow Schools Telecommunication Project (NYS-MSTP)”がきっかけとなり、アイアーンが設立された。

この 1988 年から 1993 年まで行われた NYS-MSTP のプロジェクトについて、アメリカ、ロシア、中国の参加校を対象に、教師、生徒、行政に及ぼした影響をニューヨーク大学のチーム（Bush, Chung, Holton & Kokozos,2007）が調査した。その結果、最新のテクノロジーを使いこなす事などの困難はあったものの、そのプロジェクトが教員の teaching opportunities を広げ professional development に貢献したことが明らかとなった。教師の間では、このプロジェクトが自分の専門性を高める上で大きな役割を果たし、生徒との関わり方について教師としてより創造的に考えることができるようになったという意見が一般的であった（Bush, Chung, Holton & Kokozos,2007）。報告書によると、通信によるこのような交流は、生徒が社会問題に積極的に参加することを促し、プログラムは生徒の意識にグローバルな問題意識をもたらし、自分の家での生活以上のものがあることを理解させた。また、他者への共感を深めることで、目的意識や理解力が高まり、より人間らしい社会の実現に貢献することができたと報告されている。現在、設立から 30 年以上が経つアイアーンは、グローバル・シティズンシップとデジタル・シティズンシップの形成を目指し、SDGs に関係するプロジェクトをベースとした国際協働学習を世界で推進している。

日本においては、「総合的な学習の時間」の導入後、国際的な学校間交流の実践が一時活発となったが定着しなかった。清水（2009）は、社団法人金沢青年会議所が 2003 年に金沢市内の小学校 58 校を対象に行った「教員の国際交流に対する意識調査」をもとに次のように分析している。多くの学校は、「機会があったら交流したい」（29.3%）、「交流に関心がある」（36.2%）を合わせると 65.5%と、国際交流を生徒たちに体験させたいという思いは高い。また、「異文化に興味を持ってほしい」(63.8%)、「自己表現できる力を身につけてほしい」(58.6%)、「視野を広げてほしい」（50%）、「他人と関わる力を身につけてほしい」(50%)、「英会話に興味を持ってほしい」(25.9%)と、国際交流の教育的期待は高いと思われる。しかし、実際に国際協働学習を行う上での障害は、という問いには、「時間が十分とれない」（34.5%）、「ノウハウがない」(19.5%)、「交流先の見つけ方がわからない」(15.5%)、「英語での意思疎通が難しい」(13.8%)と、忙しい現場で、時間と労力が取られるリスクから、躊躇されている状況が垣間見られる。

福井（2009）は、国際協働学習をおこなうには、プロジェクト学習の指導力とファシリテート能力、そして語学力とコンピューター・スキルが求められると指摘し、日本に国際協働学習を普及させるためには、ジェイアーンの役割として、国際協働学習講師養成と産官学民の連携の必要性を指摘している。

栗田(2019)は、アイアーンの国際協働学習を「海外の多様な他者との対話・協働を通し、グローバルとローカルの両面で課題を考察し、成果物を作成する」と定義した。日本ではまだ新しい教育アプローチであるため、新しい仕組みが必要だと述べている。

以上のように、国際協働学習への取り組みが、日本の教育現場では、様々な理由で難しいということが先行研究では論じられている。しかし、具体的なジェイアーンの国際協働学習の実践実態を調査研究したものはなかった。

３．調査の目的

ジェイアーンで 2020 年度、国際協働学習（アイアーンのグローバル・プロジェクト）が、学校や教育機関で、実際にどのようにおこなわれ、どのような成果とどのような問題を実践した会員が認識したのか。その実態を掴むことにより、

今後の課題解決につなげる。

４．参加者

2020 年度グローバル・プロジェクトに参加した 41 名のジェイアーン会員。
所属の内訳は、小学校教員　10 名、中学校教員 2 名、高等学校教員 3 名、大学教員 14 名、民間・その他 12 名

５．方法

年度末アンケート調査　「2020 年度 iEARN プロジェクト参加についてのアンケート」
5-1 回答方法：会員メーリングリストを使い、オンラインで、マイクロソフトのアンケートフォームを送付し、2020 年度にアイアーンのプロジェクトに参加した方のみ、回答を記入して送信してもらった（任意回答）。
5-2 調査期間：アンケート調査期間　2021年3月1日～3月 28 日

さらに、考察用の資料として、アイアーン学習会（第 1 回～第５回）の報告書に掲載された会員からの質問やコメントを使用した。アイアーン学習会とは、ジェイアーン会員を対象とした、より実践的なワークショップで、国際協働学習をおこなう上での会員の持つ課題を解決することが、目的の一つである。

アイアーン学習会　第１回　2020 年 8 月 9 日
第２回　2020 年 11 月 1 日
第３回　2020 年 12 月 6 日
第４回　2021 年 2 月 6 日
第５回　2021 年 4 月 10 日

６．結果

ここでは主な項目の結果（人数）を述べていく。以下の番号は、アンケートの質問番号と同じとする。
５．参加したプロジェクト名（複数回答可）
・Teddy Bear Project (10)
・Holiday Card Exchange Project (17)
・Girl Rising (5)
・TOPA (The Olympics & Paralympics in Action) Project (11)
・NDYS (Natural Disaster Youth Summit)(3)
・Hiroshima for Peace (3)
・Pen Friends - Pen Pal (1)
・GOMI on Earth (4)
・Taisho Koto (3)
その他：
・Folk Costumes Around the World (3)
・KOSKO Future Teachers (1)
・One Day in the Life (1)
・Teacher's Forum での交流(1)
６．参加学年（複数回答可）
幼/保(2)　小低学年(8)　小中学年(9)　小高学年(21)　中１(10)　中２(8)　中３(9)　高１(5)　高２(5)　高３(4)　大学生(16)
７．会員１人あたりの児童/生徒総数
1-15 人（12)　16-30 人(9)　31-45 人(5)　46-100 人(13)　その他(3)
８．パートナー校があった場合のエリア（複数回答可）
アジア(30)　ヨーロッパ(23)　北米(11) 南米(2)　オセアニア(1)　アフリカ(2)　パートナー校なし（単独投稿型など）(5)
９．あった場合、その国・地域名 (30)
台湾　ネパール　インド　タイ　インドネシア　マレーシア　パキスタン　アラブ首長国連邦　ロシア　スロベニア　モルドバ　ベラルーシ　ルーマニア　ポルトガル　ポーランド　ドイツ　モルドバ　ジョージア　トルコ　スロバキア　ジョージア　ウクライナ　スペイン　アメリカ　カナダ　ブラジル　メキシコ　アルゼンチン　オーストラリア　モロッコ
10. 海外校と ZOOM や Skype でリアルタイム交流を持ちましたか。
はい(15)　いいえ(18)　その他(4)
11. 来年度、このような機会を持ちたいと思いますか。
はい(31)　いいえ(1)　どちらとも言えない(3)　その他(1)
13. プロジェクトに参加した関連教科/活動など（複数回答可）
外国語(22)　総合的な学習(10)　部活動(1)　その他の学校活動(7)　地域の活動(5)　民間(4)　その他(10)
14. 上記で成績の評価があった場合、１）どのプロジェクトで　２）どのような活動を　３）どのような評価内容に結びつけましたか。(16)
＜評価例＞
・小学校
1)外国語：Holiday Card Exchange 2)& 3) 国の調べ学習(主体的に学ぶ態度、知識・技能)、まとめ＋発表（思考・判断・表現力）、カード交換（主体的に学ぶ態度、知識・技能)
1)総合：Teddy Bear 2)プログラミングの学習で、台湾の地図上をレゴマインドストームの EV３を動かして探検、止まったところで台湾の小学生たちが作った動画を視聴。それを動機に自分たちで金沢紹介のビデオ作成 3) プログラミングができたか。台湾のことでわかったことが書けているか。

・中学校（外国語、学級指導）
・高校
１）国際理解（選択科目）：Girl Rising Project　2)フォーラムへ投稿し、ポスターと動画を作成 3)テストとルーブリック（投稿、参加度合い、成果物、チームワーク）
・大学（ユースとして）
1) Holiday Card Exchange 2) 小学校での指導準備、指導、オンライン鑑賞会の準備・進行　3)振り返りレポート（対象の生徒を観察し対応していたか、仲間と協力していたか、自分の活動を振り返る）

15. 参加したプロジェクトにおいて、どの項目に生徒の成果や成長を感じられましたか。（複数回答可）
1)グローバルなコミュニティとつながり、その一員となった。(27)
2)多様な聴衆とつながるためのコミュニケーション能力を身につけた。(14)
3)異文化や異なる視点を持つ人々への寛容さと尊敬の念を持つようになった。(21)
4)地域や世界のコミュニティに有意義な貢献をした。(10)
5)互いを思いやり、地球を大切にする文化を持つようになった。(14)

16. 同様に、ご自身についてはどう思いましたか。（複数回答可）上記文1)～5)と同じ
1) (28)　2)(21)　3)(27)　4)(16)　5)(15)

17. プロジェクトをおこなう上で、困ったことはありましたか。
1)プロジェクトを導入したり進める中で、学校や保護者の理解の取り付け (1)
2)授業内容への組み込みや時間数のやりくり (16)
3)海外との年度の違いによる進めづらさ (8)
4)iEARNのコラボレーション・センターの使い方 (8)
5)プロジェクト・ファシリテーターとのコミュニケーション (1)
6)パートナー校とのコニュニケーション (11)
7)パートナー校との成果物のやり取り (9)
8)生徒同士のコミュニケーションにおける語学力の差 (9)
9)特になし (4)
10)その他 (5)

20. 経費は全体で、およそいくらかかりましたか。（複数プロジェクト参加は合算）
0円(9)　～5,000円(12)　～10,000円(6)　～1,5000円(4)　その他(7)

21. かかった場合、それはどのように支払われましたか。（複数回答可）
・学校から (10)
・経費として生徒から (1)
・自費から (7)
・その他 （市教委、児童館経費、大学の研究費等から14)

22.プロジェクトに参加した全体的な感想（複数プロジェクトに参加した場合は、複数回答可）
・大変良かった。(22)
・良かった。(13)
・あまり良くなかった。(0)
・全く良くなかった。(0)
・その他 (2)

７．考察

ここではまず成果について論じる。今回の成果については、iEARN (2020) が、Asia SocietyやOECDのリソースに基づいて作成したProject Frameworkの中で“iEARN's 5 outcomes for global competence”(iEARN-USA,2021)としている5つの項目についての質問15「参加したプロジェクトにおいて、どの項目に生徒の成果や成長を感じられましたか。（複数回答可）」と、質問16「同様に、ご自身についてはどう感じましたか。（複数回答可）」、また、質問22「プロジェクトに参加した全体的な感想（複数プロジェクト参加の場合は複数回答可）」と、質問23「上記を選んだ理由」（自由記述）の結果をもとに、おもな傾向について考察する。

質問15と16で回答が最も多かった項目が、「１)グローバルなコミュニティとつながり、その一員となった。」で、生徒と会員自身について最も感じた成果や成長の内容は同じ結果となった（生徒について27名、会員自身について28名）この理由として、「小さな私たちが、こういった活動を通じて実際に世界を身近に感じ、実際に世界とつながることができるという感覚を実感としてあじわうことができた。」や、質問23の「大変良かった」「良かった」の理由の「いろいろな国と交流できる」「海外の子ども達との交流をとても楽しんだ」「繋がれるだけでも有意義」などに見られるように、まずは海外の相手と実際につながったことに意義を見出し、「海外の児童生徒と身近な仲間意識を持って交流ができる」という印象を深めていったと考えられる。特に2020年度はコロナ禍で、国内はもとより学校内や家庭内という身近な場所でさえ“距離”が求められ続けていた中で、このようなオンラインによる国際協働学習では、お互いの事情が許せば「距離に関係なく海外の生徒達とつながれる」ということがあらためて認識され、さらに徐々に拡がりつつあったGIGAスクール構想にも後押しされ、逆にこのような学習への参加の動機付けやニーズにつながっていったのではないだろうか。

次いで「３）異文化や異なる視点を持つ人々への寛容さと尊敬の念を持つようになった。」が、また同じく生徒と会員自身両方において多い結果となった（生徒について 24 名、会員自身について 27 名）。これは、「実際にカードが届いたときにはかなり興奮し喜んで、日本との違いに気づいてくれた。逆に、自分のカードに日本のことを書けたことをとても誇りに思っていた。」「異文化への興味関心を喚起できる。自国の文化は真の意欲が向上する。」などに見られるように、コラボレーション・センターやオンライン・ライブでやり取りをしたり、成果物の共有を経験していく中で、自分たちの共通点や相違点を知り比較し、また各プロジェクトのトピックについて共に考えながら学ぶことを通して視野を広げるとともに、お互いの見方や文化を尊重する気持ちを育てる機会になっていたのでは、と考えられる。

続いて「２）多様な聴衆とつながるためのコミュニケーション能力を身につけた。」も生徒、会員自身ともに 3 番目に多い回答になったが、実は前述の iEARN-USA(2021)のこの５項目に関する資料では、この 5 つは、１）から５）へのステップとして示されており、今回のアンケートでは、この「コミュニケーション能力を身につけた」が、３）と入れ替わり、１つ後に来ていることがわかる結果となった。コメントとしては、「英語を学ぶ意義や目的を実感できる。」等、特に英語使用の意義と機会についていくつも挙げられていたと同時に「生徒同士のコミュニケーションにおけるの語学力の差」についても多く触れられていたため、さらに課題として後述する。

このように、前述の global competence についての 5 つの成果・成長のステップ(iEARN-USA,2021）の最初の１)、そして３）、２）と前半に多数が集まっていたが、後半の４）と５）までも一定数が認識されていたこともわかった。これは、海外の会員も対象に、生徒についての同項目の質問も入れておこなった、あるプロジェクト後アンケートでも同じ傾向が見られている（滝沢、2020）。アンケート質問 22 のプロジェクトに参加した全体の感想で「大変良かった」「良かった」がほとんどを占める中、今回のアンケートのように生徒、会員自身の成果・成長をより明らかにし、またより良く共有していくことによって、今後この５つの outcomes が、一層達成されていくことが期待される。

次に、課題について論じる。質問 17「プロジェクトをおこなう上で、困ったことはありましたか。（複数回答可）」の結果をもとに、アイアーン学習会の報告書に掲載された会員の意見も合わせて、ジェイアーン の国際協働学習の課題について考察する。

質問 17 で回答が最も多かった項目が、「授業内容への組み込みや時間数でのやりくり」（16 名）であった。これを裏付けるように、第 1 回アイアーン学習会においても、プロジェクトをおこなう時間を作ることが難しいという実態が、うかがわれた。「取れる時間が１ヶ月に１度（１時間半）と決まっているので、それに合わせてできるプロジェクトか、またはスケジュール調整が必要」、「学校の授業でやる場合は、どのように授業内容に入れられるか、時間数はどれだけ取れるかが、特に今年度は時間数が厳しいと思われます。」という声があった。

このように、プロジェクトをおこなう時間の調整が最も大きな困難であり、特に 2020 年度は、新型コロナウィルス感染拡大による休校もあり、授業時間の確保が難しかったことも影響していると考えられる。また、課外の活動としてプロジェクトをおこなった学校もあった。「コアカリキュラムの変更時期にあたり、６コマしかなかったため、学生の課外準備が増えた」との回答もあり、どのように授業の中でプロジェクトをおこなうかが大きな課題と言える。解決策として、従来の授業の内容にプラスして、プロジェクトをおこなうのではなく、カリキュラムの中にプロジェクトを効果的に統合する方法を探る必要があると思われる。実際にプロジェクトがおこなわれた授業は、外国語の時間が最も多く、次に総合的な学習の時間であった。また、教員が授業内容を決める自由度が、海外とは異なる可能性もあり、今後、グローバルな教育コミュニティに参加しやすい仕組みが必要かもしれない。

次に多かった回答は、「パートナー校とのコミュニケーション（返信がなかなか来ない、途切れてしまった等）」（11 名）であった。こまめにパートナー校とコミュニケーションを図ることが効果的であるが、返信のタイミングは文化の違いや環境の違いもある。第 2 回アイアーン学習会で、成果物を交換する際に、「海外はゆったり」であることを受け入れる必要性も語られたが、異なる文化背景を持った人とのやり取りに慣れることも課題である。

続いて、「パートナー校との成果物のやり取り（カードが来なかった、共有されなかった等）」（9 名）と、「生徒同士のコミュニケーションにおける語学力の差」（9 名）が、３番目に多い回答であった。

国際協働学習には、パートナー校との信頼関係が重要であるが、残念ながら、パートナー校側の問題で成果物のやり取りがおこなわれないことがわずかながらある。特に Holiday Card Exchange プロジェクトについては、カードが来

ないという問題の解決策として、複数のパートナー校と交換するプロジェクトの仕組みとなった経緯もある。各国の郵便事情や環境の違い、考え方の違いもあり、成果物が絶対届くとは言えないところは、日本の教育現場では、残念な問題である。環境や文化の違うパートナー校の多様性の一つとして受け入れることは難しいかもしれないが、global competence の成長過程として異文化への寛容さを持つことが望まれる。

「生徒同士のコミュニケーションにおける語学力の差」は、９名が選択した。プロジェクトに参加した会員の約４割が、Zoom や Skype などでパートナー校と生徒同士が交流したと回答しており、その内容は、自己紹介、日本の文化紹介、自分の町や国紹介を英語でおこなった例が多い一方で、日本の遊びを見せたり、楽器の演奏をした例もあった。機械翻訳を使うことや、大学の先生に通訳をしてもらうなどの解決策を講じている会員もいた。このように、語学力の差は課題ではあるが、会員の感想は、「外国の小学生との交流は、児童に英語を使う必要性を与えられた。また、外国への興味関心を高めることができ、その後の国語科での調べ活動にもやくだった。」、「生徒は、少しでも伝わると嬉しがったり、もっと質問やジェスチャーをすればよかったと反省したり、多くの学びが生まれた実践になりました。」と前向きであった。また、「生徒たちは、日本語で言えることをそのまま英語でも表現したい気持ちが強いが、その気持ちを大切にしつつ、今自分が英語で相手に伝えられることを表現し、できない気持ちを、もっと英語で伝えられるようになりたい、という気持ちに育てることができれば良いと思う」（第 2 回アイアーン学習会）などもあり、語学力の差はあるものの、日本の子どもたちにとって、外国語を学ぶ動機づけとなるような前向きなコミュニケーション体験となっているように思われる。

最後に、「プロジェクトを導入したり進める中で、学校や保護者の理解の取り付け」に困ったと回答した会員は１名のみだった。プロジェクトの導入に、学校や保護者の理解があったことがうかがえる。質問 19「生徒のプライバシー、肖像権・著作権について、特別に対応したこと」の回答から、事前に書面で保護者から承諾を得ている学校が多いことがわかった。また、自分達だけでやり取りする写真等を共有するために、Facebook で閉じたグループを作った会員もいた。ICT を使った国際協働学習は、情報モラルを含め、デジタル・シティズンシップ教育の生きた学びの場でもある。安心・安全で、かつ効果的なオンライン交流を行うことが求められることも忘れてはならない課題といえるだろう。

８．結論

ICT を使い海外の学校とともにプロジェクト型学習を行う国際協働学習は、日本のニューノーマルにおける新たな学びの形の一つとなる可能性がある。今回、調査により、ジェイアーンの国際協働学習（アイアーンのグローバル・プロジェクト）の実践実態が可視化できた。

2020 年度は、小学校と大学に所属する会員を中心に、主に小学校高学年を対象として「外国語」授業で最も多く実践された。新型コロナ・パンデミックをきっかけに日本で ICT が普及し、海外校と ZOOM や Skype でリアルタイム交流を持った会員が４割に達していた。グローバルなコミュニティの一員としての意識や異文化理解などの global competence の成長と、外国語の使用機会と学習の動機付けが成果として挙げられた。一方、プロジェクトをおこなう時間の調整に課題があり、カリキュラムの中にプロジェクトを効果的に統合する方法の研究が必要である。また、会員とその生徒が、global competence についての 5 つの成果・成長のステップ(iEARN-USA,2021) を達成していくことが期待される。

今回のアンケート調査は、任意回答のため、今後は、より精度の高い調査を行う必要があると思われる。しかし、今回初めて調査をおこなったことは、国際協働学習の実態傾向を掴む第一歩として、一定の意義があったと思われる。この調査結果をもとに、今後の研究と課題解決につなげていきたい。

９．参考文献

Bush,A.,Chung,S.,Holton,W.,Kokozos,M. (2007).“The New York State - Moscow Schools Telecommunications Project The Founding Project of iEARN”Robert F. Wagner Graduate School of Public Service, New York University Capstone Team. Retrieved from https://iearn.org/assets/general/iEARN_NY-Moscow_Evaluation.pdf

iEARN.(2020). Project Framework. Retrieved from https://docs.google.com/document/d/1CaihzNs4S2v8cNZSQnFBawObDkyWPNOh0plQ7el0B54/edit

iEARN-USA.(2021).iEARN’s 5 outcomes for global competence. Retrieved from https://www.facebook.com/iearnusa/photos/a.194325030603333/4039488559420275/

World Economic Forum.(2020).“Schools of the Future Defining New Models of Education for the Fourth Industrial

Revolution”.
Retrieved from
http://www3.weforum.org/docs/WEF_Schools_of_the_Future_Report_2019.pdf

栗田智子(2019)　「アイアーンの国際協働学習とは何か -国際協働、プロジェクト学習、主体的・対話的で深い学び、 グローバル・コンピテンスの視点から-」、『国際協働学習 iEARN レポート　2018 年度』、p.2-7
https://jearn.jp/iearn-report/img/ISSN24340049_2018.pdf

坂本旬 (2020)「COVID-19 時代の SDGs と国際協働学習 困難な時代の異文化対話とメディア・リテラシーを考える」、『国際協働学習 iEARN レポート 2019 年度』、p.2-8
https://jearn.jp/iearn-report/img/ISSN2434-0049_iEARN%20Report%2020200604.pdf

清水和久(2009)「小学校における国際交流学習の設計と効果に関する実践的研究」、岐阜大学大学院教育学科カリキュラム開発専攻　修士論文

滝沢麻由美(2020)「Tokyo2020 をテーマにした国際協働学習プロジェクト」、JACET 言語教育エキスポ 2020 口頭発表資料

福井良子(2009)「国際協働学習の普及における NPO の課題と役割」、神戸大学大学院　人間発達環境学研究科　修士論文

文部科学省初等中等教育局 (2020)「資料 1 ニューノーマルにおける新たな学びと必要な環境整備等について」
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/jikkoukaigi_wg/syotyutou_wg/dai2/siryou1.pdf

ジェイアーン国際協働学習研究ワークショップ 第一回開催報告

デジタル・シティズンシップ
メディアリテラシーとの関係から学ぶ

防災世界子ども会議プロジェクト創設者　岡本　和子
実践女子大学短期大学部　栗田　智子
法政大学　坂本　旬

GIGA スクールで実現する新たな学びとして「デジタル・シティズンシップ教育」が急速に多くの教育関係者に浸透しつつある。このデジタル時代に求められる新たな教育に関するワークショップを、2020 年 12 月 13 日、ジェイアーン主催、日本教育工学会 SIG-08　第 16 回研究会とユネスコのメディア情報リテラシー教育を推進する AMILEC とが共催する形でオンライン開催した。参加者の事後アンケートより、成果と課題を明らかにし、今後に向けての方向性を紹介する。

COVID-19　デジタル・シティズンシップ　メディアリテラシー　SDGs　国際協働学習

1. はじめに

ジェイアーンは、2003 年設立以来、教育の情報化とその実現に向けて「世界と学ぶ！」をスローガンに、グローバル教育・ICT 教育を推進するネットワークである。世界 140 カ国・地域の学生、教育者が参加する国際 NGO アイアーンの日本センターとして、デジタル・シティズンシップにつながるグローバル・シティズンシップの形成を目標とする NPO 法人である。

COVID-19 パンデミックを契機に「デジタル・シティズンシップ」が注目されるきっかけとなったのは、緊急事態宣言下の 2020 年 4 月 27 日、文部科学省中教審初等中等教育分科会・新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会合同会議で「デジタル・シティズンシップ」、この考え方の重要性が提案されたことにある。

NPO カタリバ代表の今村久美さんが提出された資料には次のように書かれている。

「GIGA スクール構想を実現する上で、デジタル前提社会で生きる子どもたちがそのリスクを理解し、安心安全に利用しながら可能性を広げられるように、『デジタル・シティズンシップ教育』の推進が必要。 現在の『情報モラル教育』は、個々の安全な利用を学ぶものであるのに対し、『デジタル・シティズンシップ教育』は人権と民主主義のための善き社会を創る市民となることを目指すものである。それは、個人のモラル教育ではなく、パブリックなモラル教育とも言える。利用を躊躇させる情緒的抑制から、賢く使う合理的活用ができる人材育成へと、転換をすべきである。」

また文部科学省主権者教育推進会議の最終報告書に、2016 年選挙権年齢が満１８歳に引き下げられ、2022 年度からは成年年齢が１８歳へと引き下げられることに伴い、子どもたちがこれまで以上に主権者として必要な資質・能力を確実に身に付けていくことが必要となっている。インターネット情報などの豊富な資料や多様なメディアを活用して情報を収集・解釈する力や、情報の妥当性や信頼性を踏まえて公正に判断する力などのメディアリテラシーの育成を図ることが重要であるとし、メディアリテラシーへの関心が高まっている。

２．ワークショップ開催の目的

世界的なソーシャル・メディアの普及・進化に伴い「デジタル・シティズンシップ教育」というデジタル時代に求められる新たな教育が欧米で議論され、教育実践が積み重ねられている。日本においても教育政策上の課題として避けられないところまできている。

この流れで、諸外国（とりわけアメリカ）のメディアリテラシー教育がデジタル・シティズンシップの形成に果たす役割や期待される成果、事例や研究について考えていくことを目的とする JEARN 主催の第 1 回研究ワークショップを開催した。

ジェイアーンは、相互につながったデジタル世界において、「世界と学ぶ！」をスローガンに、ICT を活用し、日本の小・中・高・大学生を世界の同世代の生徒とを結びつけ、”地域と世界をつなぐ SDGs”をテーマに、国内にいながら、SDGs に貢献するプロジェクトを通して、オンラインで「国際協働学習」に取り組む、新たな時代の教育手法を推進している。

2020 年１月世界経済フォーラムで、第 4 次産業革命に対応した未来の教育モデルの一つとしてアイアーンが提示された。アイアーンが「デ

ジタル・シティズンシップ」の理論を土台にした国際協働学習の教育実践を推進しているからである。

３．ワークショップの内容

図１　ジェイアーン研究ワークショップ WEB ページより

●日時：2020 年 12 月 13 日（日）
15:00 ~17:00
●会場：Zoom
●対象者：教育の未来に関心のある方
●参加者数：63 名
●テーマ：デジタル・シティズンシップとは何か:メディアリテラシーとの関係から学ぶ
主催：NPO 法人 ジェイアーン
共催：日本教育工学会 SIG-08、AMILEC
●プログラム：
１．開催趣旨
GIGA スクール構想の実現は 2020 年度内へと前倒しされ、全国の小中学校で児童・生徒 1 人に 1 台、パソコンなどの学習用端末を配備し、リモート学習に切り替えられる環境が実現することになった。2020 年は学校教育の転換期となり、子どもたちの学びのスタイルが大きく変わる。これから何ができるようになるのか。GIGA スクールで実現する新たな学びとして、「デジタル・シティズンシップ教育」を多くの教育関係者に勧めたい。
「デジタル・シティズンシップ教育」は、「コンピュータ 1 人 1 台時代の善き使い手をめざす学び」を目標とする。ネットの危険性を叩き込むのではなく、ICT 活用とメディア・リテラシー教育の導入を前提とし、「世界標準」の参加型学習によって対話をしながらデジタル技術・思考を身につけ、社会を主体的につくる学びを目指すものである。
２．講演・質疑応答
・「デジタル・シティズンシップの基本と実践」今度珠美（鳥取県教育委員会）
第一講演者の今度珠美先生から、「デジタル・シティズンシップ」の考え方を最初に広めたのは、アメリカの国際教育テクノロジー学会 International Society for Technology Education（ISTE）であり、デジタル・シティズンシップについて構成要素を示し、次のように定義している。「生徒は相互につながったデジタル世界における生活、学習、仕事の権利と責任、機会を理解し、安全で合法的倫理的な方法で行動し、模範となる」ことだという。そのうえで具体的な授業案を考える参考として、「Common Sense Education」がハーバード教育大学院プロジェクト・ゼロの協力を得て開発したカリキュラムを取り上げている。幼稚園から高校３年生までを対象に、デジタルライフで直面する課題と関心に焦点を当て、デジタルジレンマの視点から作成されており、デジタル社会のシティズンシップに必要な資質をサポートするように設計された例が紹介された。

・「メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係」坂本旬（法政大学）
第二講演者の坂本旬先生からは、デジタル・シティズンシップの概念が ICT 教育や教育工学における ICT 利用の適切かつ責任ある行為規範から生まれたものである一方、メディアリテラシー教育ではその概念のなかにシティズンシップが内包されていたことが説明された。近年の教育のデジタル化により、両者の結合が求められるようになったということである。特にアメリカの文脈では、2016 年のアメリカ大統領選における「フェイクニュース」の影響や、2017 年 4 月にワシントン州で成立したデジタル・シティズンシップ法の成立により、両者の結合に注目が集まった。メディアリテラシーは未だに多義的な概念ではあるが、いずれにせよシティズンシップを抜きにはできないことが強調された。

図２　メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係図

研究会においては Zoom のチャット機能を活用し、講演中にも質問が寄せられた。講演後の全体質疑ではコメンテーターとしてあらたに豊福

晋平先生（国際大学）と芳賀高洋先生（岐阜聖徳学園大学）も加わり、これらの質問にお答えいただき、現代のデジタル・シティズンシップとメディア・リテラシー教育の関係についての理解と議論が深まった。
・司会：栗田智子（実践女子大学・ジェイアーン副理事長）

４．成果と課題

第 1 回研究ワークショップの事後アンケート（n=17 名）の結果をもとに成果と課題について考察したい。

研究ワークショップの内容について、「大変よかった」（16 名）、「よかった」（1 名）という結果であった。理由を見ると、デジタル・シティズンシップ教育の背景から具体的な実践方法まで学ぶことができたという点が高く評価されたことがわかる。例えば、メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係がわかったこと、アメリカの実践教材を見ることができたことなどが挙げられた。参加者にデジタル・シティズンシップ教育の全体像を知ってもらうことができた研究ワークショップであったと思われる。

次に、日本の教育現場にデジタル・シティズンシップ教育を導入することについての質問については、「非常に重要であると思う」（14 名）、「重要であると思う」（3 名）という回答であった。デジタル・シティズンシップ教育が、日本の教育現場に必要であることを参加者と共有できたのではないかと思われる。重要であると思う理由として、「これからのデジタル時代に従来の情報モラル教育からの脱却が必要であること」と、それ以上に多くの参加者が、「日本にシティズンシップ教育が必要であること」を挙げていた。デジタル・シティズンシップ教育が、民主主義と人権を守る健全な社会の実現が目的であり、メディアリテラシーと関係が深いことが認識されたと思われる。

しかし、その一方で、「重要だと思うが、日本の学校現場が、デジタル・シティズンシップ教育を容易に受け入れない」ことを指摘する声もあった。「生徒指導目線ではなく、どう生徒一人一人が自分ごととしてデジタル・シティズンシップを取り入れるかが重要である」というご意見もいただいた。どのように、日本の学校現場で、デジタル・シティズンシップ教育をおこなうのかという実践レベルの課題を今後は解決していく必要がある。

最後に、「グローバルなオンラインコミュニティを持つアイアーンについて、デジタル・シティズンシップ教育の観点からどう思うか」という質問には、「大変意義があると思う」（10 名）、「意義があると思う」（7 名） だった。理由から、アイアーンには次の３つの意義があると考えられる。まず、「アイアーンは、他国の生徒と協働学習をする場であること」、２つ目が、「アイアーンは、デジタル・シティズンシップ教育についての研究や情報を欧米から得る窓口であること」、３つ目が、「アイアーンは、デジタル・シティズンシップの重要性を訴え行動する組織であること」である。アイアーンの日本センターであるジェイアーンの役割が、さらに明確になったように思われる。しかし、「アイアーンで、どのプロジェクトにどのように参加するかによって、デジタル・シティズンシップ教育の場として生かしきれない可能性」も指摘する声があり、今後は、具体的なプロジェクトとデジタル・シティズンシップ教育との関係を研究し、実践例を積み上げていく必要があると思われる。

以上のように、今回の研究ワークショップは、デジタル・シティズンシップ教育の全体像とその日本の教育現場における重要性を示すことができたと思われる。そしてデジタル・シティズンシップ教育という観点から見た、アイアーンに期待される役割も見えてきた。一方、課題として、実際に学校でどのように子どもたちを善きデジタル市民に導くのか、日本の学校に即した具体的手法や教材の開発、デジタル・シティズンシップ教育の場としてのアイアーンのプロジェクト研究も必要である。

＊事後アンケートの報告は、添付資料１を参考にされたい。

５．今後に向けて

デジタル・シティズンシップは多様な内容を含んでいるが、本ワークショップはその中でもメディアリテラシーとの関係に焦点を合わせた。とりわけ、偽情報や陰謀論が世界的な問題となっている今日、メディアリテラシー教育の必要性はますます高まっている。しかし、日本ではデジタル・シティズンシップもメディアリテラシーも広く知られているとはいえず、教育政策に影響を与えるにはまだ至っていない。アメリカのように、教育運動の必要性が高まっていると言えるだろう。

アイアーンの国際協働学習にとって、デジタル・シティズンシップやメディアリテラシーは基礎となる能力であり、実践の中にどのように位置づけていくのか、理論的にも検討を進めていく必要がある。

参考文献

今度珠美、坂本旬、豊福晋平、芳賀 高洋(2020)「特集：デジタル時代のシティズンシップ教育

アメリカのデジタル・シティズンシップ教育教材の日本における学習実践の可能性」
法政大学図書館司書課程
メディア情報リテラシー研究 第 1 巻 2 号

栗田智子（2020）「国際協働学習と iEARN」
法政大学図書館司書課程　メディア情報リテラシー研究　第 1 巻 2 号

坂本旬 (2020)「デジタル・シティズンシップとは何か―情報社会に求められる新たな教育―」（GLOCOM 研究ワークショップ　2020.6.19）
https://note.com/junsakamoto/n/n7847cbdae8d7

坂本旬（2020）「メディアリテラシーとデジタル・シティズンシップの関係」　(2020.12.13)
https://note.com/junsakamoto/n/n3bb65c8291b6

文部科学省主権者教育推進会議（2021）「今後の主権者教育の推進に向けて（最終報告）」
https://www.mext.go.jp/content/20210331-mxt_kyoiku02-000013640_1.pdf

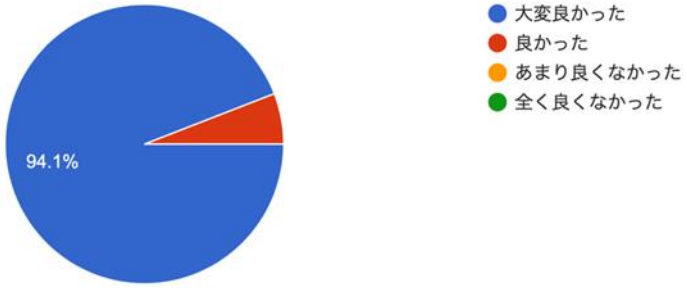
森本洋介 (2021)　「 JSTE SIG-08 メディアリテラシー、メディア教育第 16 回研究会『デジタル・シティズンシップ：メディアリテラシーとの関係から学ぶ』開催報告」　日本教育工学会ニューズレター（No.247）（2021.3.3）
https://www.jset.gr.jp/wp-jset/wpcontent/uploads/2021/02/JSET_NL-247_rev4.pdf

添付資料 1

ジェイアーン 国際協働学習研究ワークショップ
第一回事後アンケート結果

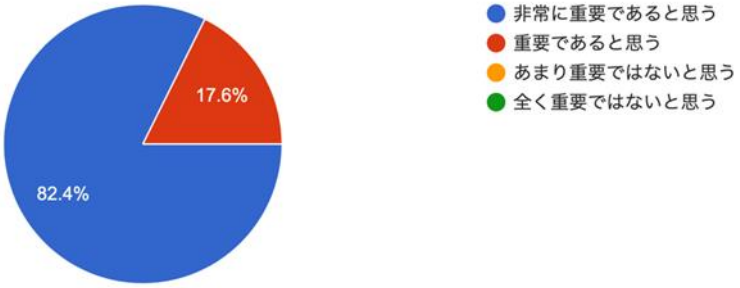
令和２年 12 月 16 日
NPO 法人ジェイアーン

Q1.今日のオンライン研究ワークショップの内容はいかがでしたか。
17 件の回答



・新しい分野で次に活かせそうだから！
・アメリかでどのような教材が使われていて、学年別にどのような内容をカバーしているのかが良く分かりました。
・新しい時代の移行への予感
・今まさに必要と感じているデジタルシ・シティズンシップについて背景から具体に至るまで学ぶことができました。
・アメリカの実践教材が見れたこととメディア・リテラシーとデジタル・シティズンシップの関係がよくわかりました。とても情報が充実していました。
・メディア・リテラシーとデジタル・シティズンシップの関係が明確になったこと。米国の common media education の教材について、多くの情報が得られたこと。
・タイムスケジュール通りに適切に進行し、議論の時間も確保されていたから。
・アメリカや欧州評議会に対して日本におけるデジタル・シティズンシップ教育の状況がわかった。commonsense.org の教材を一部研究していたので大変参考になった。
・我々が何を意識して DC に取り組まねばならないか？が明確だった。
・背景から実践までわかりやすく網羅して下さり、今後デジタル・シティズンシップを取り入れていく人の立場にたったとても良いワークショップだと感じました。
・学校の教員相手の研修（教育委員会等）だと、現場では無理だ、とか、情報モラルで何がいけないのだ、また〇〇教育か、などという、ネガティブな意見や質問が多いが、今回はそうしたネガティブな印象は全くなかったから。
・ZOOM の使い方、良いと思った。
・質疑応答が進む中でより具体的な内容へと踏み込んでお話が聞けたと思う
・これまでの情報モラル教育とのちがいや教材の内容など具体的に踏み込んだ内容を知ることができたから
・今度氏、坂本氏のおはなしをじっくり聞くことができた
・デジタル・シティズンシップについての解説や具体的な事例を聞くことができて、現場での活用のヒントとなった。

Q3.日本の教育現場にデジタル・シティズンシップ教育を導入することについて
17 件の回答

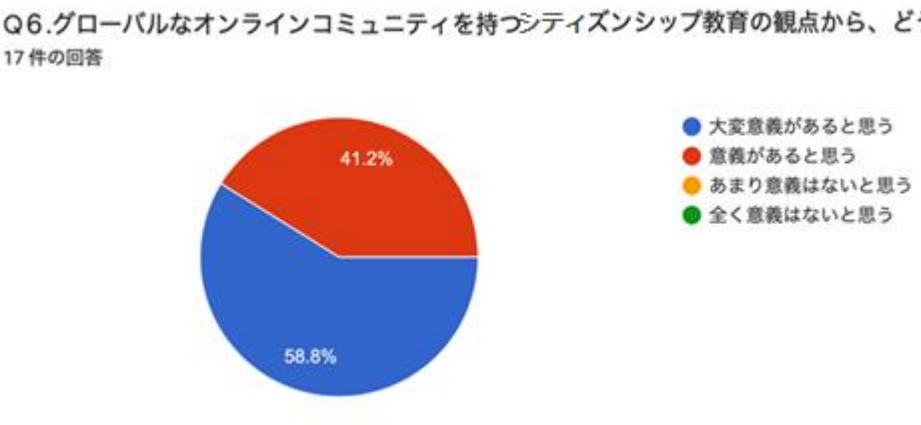


Q4.Q3でそう思う理由やご意見をお聞かせください

・GIGA スクールにおいてもたいせつ
・これから益々ICT の利用が必要となるので、非常に重要だと思います。
・教育へのデジタルな新しいシティズンシップ導入によって、積極的な コミュニケーションが展開され、戦争回避や過去の歴史に見る民族虐殺を繰り返さない可能性
・デジタルがスタンダードな時代に、デジタルをどう使うか　使うことを通してどのような人に育っていくか　それらを学ぶことは必須である。
・日本も、民主主義と人権を守り健全な社会を維持するために善きデジタル市民を育成すること、特に批判的思考を育てるメディア情報リテラシーが重要だと思いました。
・情報モラル教育から脱皮と、シティズンシップ教育の推進が不可欠だと思うので。
・他国に比して、日本は教育の場でのデジタル化が大幅に遅れている。そのため、体系的なカリキュラム設計や指導者の養成、研修の機会も合わせて進めていくことが望まれる。
・デジタル社会で安全、効果的、責任ある生活が送れるように。
・ICT,GIGA スクールによる急激な情報取得方法の変化に、DC 教育の担い手である大人たちがついていけていない。このまま放置することは日本の社会にとっても大きな影響があると感じている。
・私は幼児を対象に研究しているのですが、Common Sense Education に Kider の教材があることに驚きました。日本ではそのまま適用できないとは思いますが、デジタル・シティズンシップの芽を育てること、親にその視点を持ってもらうことが重要だと考えます。
・世界と比較してすでに１５年遅れています。いまや重要かそうでないかを議論している余裕も状況も日本の教育界にはないと思っています。
・技術的な使い方だけでなく、使う上のモラルがより一層大切と思う。
・デジタルに限らず、日本はシティズンシップを育成していかないとまずいと感じることが多いから。
・情報のあつかいの恐ろしさだけでなく、これからの生き方を考えることに直結する学びだと考えたためです。
・日本の教育は、市民（性）を育成することに関して課題があると感じている。現代社会においては社会のデジタル化を視野に入れなくてはならない。よって Q3 のような考え方は重要だと思う。　しかし、〇〇教育を導入することには（〇〇がなんであっても）学校現場は抵抗があると思う。
・GIGA スクールで実現する新たな学びに最適である。
・生徒指導目線ではなく、生徒一人一人が自分ごととして捉える必要性があると考える中で、モラル教育やマナー教育より、デジタル・シティズンシップの考え方が重要であると考えている。

Q5.メディア・リテラシーとデジタル・シティズンシップの関係について、ご意見やご感想をお聞かせください。

・どんどん活用して、交流を行いたい
・とても密接な関係だと思います。メディアを利用する場合、安全性も必要ですが、利用する責任も問われます。市民性を育むには今後、必要です。
・お話が詳しすぎて、正直なところよく分からない。。。。
・正直なところその区別や関係について、いまだ明確にものを言える程理解できていません。しかし、それらを一つ大きなものとしてとらえ、従来の情報モラル教育とは一線を画しながら子どもたちとともに学んでいきたいと考えています。
・時系列で解説していただき、統合の経緯がよくわかりました。
・メディア・リテラシー教育もデジタル・シティズンシップも、日本の公立小中学校の現場では、あまりなじみがないので、今後は、教科教育や道徳・特活等でどのように導入できるか、実践研究が必要だと思います。
・分かりやすい資料提示であり、とてもよかった。
・メディア・リテラシーはデジタル市民として生きるために必要。
・DC が育つことで、メディア・リテラシーを完全に担保できるのか？の答えを持ちたい。
・これまでの研究者との関係性が難しいので、自身が発言するときに注意しなければならたいと強く思いました。またそのような事情を説明してくださったおかげで地雷を踏まなくてすみそうで感謝いたします。
・デジタル・シティズンシップ力と、メディア・リテラシー力があるとして、デジタル・シティズンシップ力が高い人は、同時にメディア・リテラシー力も高いのでしょうか？デジタル・シティズンシップ力が高くとも、メディア・リテラシー力が低い、という人は存在するのでしょうか？
・カタカナの言葉はあまり好きではないが、定義をはっきりして使えば良いと思う。違う概念で議論しても無意味である。
・図書館や図書教育の進歩も重要であると感じました。
・これからの世の中を生きる上で切っても切れないメディアとの付き合い。一市民として生きていく子どもたちに付けたい力を校内でも話題にしたいと強く感じました。ありがとうございました。
・メディア・リテラシーはデジタル・シティズンシップを構成する重要の要素だと思います。
・ICT が当たり前の社会において、メディア・リテラシーはもちろん、特にデジタル・シティズンシップの養成は急務であると思う。



Q7.Q6でそう思う理由やご意見をお聞かせください。

・交流の中で必要になる
・iEARN は他国との生徒と協働学習をする場であるので、大変意義があると思います。
・オンラインコミュニティへ従来参加が困難であった国々からの参加の可能性
・欧米の研究や実践、情報を取り入れていく必要を強く感じています。アイアーンはその窓口になってくださっていると感じています。
・ICT を効果的に使って、異なる文化や考えを持つ同世代と対話する体験から生きた学びができると思います。
・アイアーンのこれまでの実績を、デジタル・シティズンシップ教育に活かして欲しいと思います。
・コロナ禍において、オンラインコミュニティ、コミュニケーションも必要性が増しており、教育のみならず、仕事、生活課題としても不可欠な問題であるため。
・大いに意義があると思うものの、どのプロジェクトにどのように参加するかによってデジタル・シティズンシップ教育の場として生かしきれない可能性があると思う。
・旗手としての期待
・周知や情報の集約でコミュニティの意義があると思います。
・日本がいかにクローズドな内向きの政策に固執しているかを反省するよい機会になると思うから。
・世界中の国が理解しあうための手段の一つとして良いと思う。
・多様な人が集まり学ぶことができるコミュニティがあることは素敵なことだと思います
・可能な社会は全世界の課題。世界を相手にすることになる子どもたちですから、デジタル・シティズンシップ教育は日本だけで考えることではないと考えます。世界と繋がっていることはとても意義があると思います。
・デジタル・シティズンシップについて、必要性を訴え行動する組織は他にないのではないか。
・日本はデジタル・シティズンシップ教育が遅れていることを痛感しています。是非広めていってほしい。

Q８今後、デジタル・シティズンシップのオンライン研究会で、どんなテーマの講演をききたいですか？

・発達段階における縦の系統性について
・日本で、実際にどんな授業が行われているか事例を聞きたいです。
・具体的な JEARN 会員への学びの内容
・1 人 1 台時代のよき使い手が育っている実践やその背景や価値について学ぶ機会があるとありがたいです。
・日本での授業実践例
・実践研究の成果発表と研究者からのコメント
・まずは本を読ませて頂きます。
・日本の教育現場への具体的な導入の提案
・日本の教育現場の実践はもちろん、米国以外の国の状況も知りたいです。
・これは、私がお聞きしたいです。
・特にありません。
・デジタル・シティズンシップのアウトプット事例をたくさんみたいです
・授業の様子や子どもたちの反応など、具体的な様子が知りたいです。
・具体的な活用例。日本の教育の中で使っていけるような教材等の開発。外国のように、学校図書館での活用。

コメント（自由にお書きください）

・大変学ぶことが多い時間でした。ありがとうございました！
・貴重な学びとなりました。勤務校でも取り入れる必要があると思いました。
・個人的に新しい分野で、講演者の皆さんが使われている言葉の理解が難しかった。
・たいへん充実した研修でした。ありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。
・司会として反省点も多いですが、有難うございました。
・とてもインフォ―マティブなウェビナーでした。ありがとうございました。
・ありがとうございました。
・所用で途中退席いたしまして、大変失礼いたしました。どこかに既に出ていましたらすみません、発表者のスライド等の公開はありますでしょうか？情報量が膨大で、スピード感もあったので、ぜひ振り返りがしたいです。
・貴重な機会をありがとうございました！！皆さんのホスピタリティーあふれる情報提供に感謝します。
・参考になることの多い内容でした。ありがとうございました。
・とても勉強になりました。早速実践してみたいと感じています。また、教科を超えて、学校図書館でどう関われるかと言う点について、個人的には一番興味があります。

プロジェクト実践編

Machinto – Hiroshima for Peace

戦後 75 年を迎え、広島・長崎は次世代へどう伝えられているか

Project Facilitator　高木洋子

2006 年度 iEARN プロジェクトとして誕生した Mahcinto - Hiroshima for Peace は、その活動の 15 年目を迎えた。人類に対する最大の罪を、Never Hiroshima, Never Nagasaki をゴールに、戦後 75 年を迎えた 2020 年度活動を顧みながら、今後の次世代へどう伝えるのか考えたい。

Latina Spanish 長崎　　Lantern Peace

1. はじめに

1945 年終戦の夏、8 月 6 日広島、8 月 9 日長崎 での原子爆弾投下は史上初めての原子による残 忍な死を 30 万の市民に与え、その後の放射能に よる死が今も人々を苦しめている。その犠牲者 の苦しみと死を贖うために、私たちに出来るこ とは何か。それは二度とこの過ちを繰り返さな いために、次世代を担う生徒たちにしっかりと 伝えること。4 分の 3 世紀が過ぎ、ネット社会 にある私たちができることは、このプロジェク トの広がりの高速化である。

2. 目的と方法

2-1 目的

本プロジェクトで明らかにしたいことは、どの国のどの学校で広島・長崎が取り上げられ、生徒たちが事実を学び、更にどう考え、どう決意するのかが、iEARN Machinto Forum 上で表明されることである。

2-2 方法

1）この Machinto をクラスで取り上げる方法は、基本的には、こちらから郵送する 3 冊の絵本(まちんと・My Hiroshima・わたしのやめて) を日本語・英語・またはスペイン語で読み、その感想を Machinto Forum に投稿する。

2）Machinto Resources に載せられている原爆に関するビデオを鑑賞し、Machinto News 等で更 に深く理解する。

3）個々に平和への願いを形にして表し 、Machinto Forum 上で共有する。

4）通年であれば、iEARN International Conference & Youth Summit 会場で Machinto ワークショップを開くことができたが、2019 年度以来は COVID-19 によりこの方法は不可能となっている。

5）Online を自在に使った Meeting を利用して時差の調整によって Machinto 交流が可能となる。特に 2020 年度は、活水女子大学による新しい企画「長崎 Peace Talks」が生まれた。（別章参照）

3. 活動内容

具体的な実施内容

3-1 Machinto News による情報発信

3-2 Machinto 参加国紹介

3-3 iEARN- Latina 活動

3-4 iEARN – Puerto Rico 活動

3-5 iEARN-Taiwan 活動

3-6 長崎 Peace Talk 誕生

3-1 Machinto News による情報発信

https://iearn.org/cc/space-2/group-11/news

① June 28th MACHINTO REPORT ON 2020 JEARN ANNUAL MEETING

② August 05th,YOUR "ONE MINUTE SILENT PRAYER"

③ August 09th,PEACE TALK OF ATOMIC BOMB SURVIVORS FROM NAGASAKI □ September 20th, "THE TIME TO APOLOGIZE AND MEDITATE OF THIS NOW" BY HELENE AYLON

⑤ November 21st, AN AMAZING APP FOR PEACE EDUCATION FROM HIROSHIMA - “XPLORE HIROSHIMA”

⑥ February 23rd,TAIWAN NEWSPAPER ARTICLE ABOUT LANTERN FOR PEACE

3-2 Machinto 参加国紹介

India, Mexico, Taiwan, Pakistan, iEARN-Latina

今までの全参加国数は、34 カ国である。

3-3 iEARN- Latina 活動

過去数年に亘る iEARN-Latina (Spanish 国：Puerto Rico, Argentina, Guatemala, Mexico, Catalunia, Hondurus, Boston)の活動は 2020 年度も継続して本プロジェクトの活動中心である。

“LA EXPERIENCIA MACHINTO”のタイトルで形成された iEARN Latina Machinto 2020 は 3 つのサブフォルダーで形成され、その中から特に興味深い最終活動報告を選びここに共有する：

Padlet with the final products of the Machinto Project by Arlene(Puerto Rico) ：

各ページを開くとビデオも含めた活動内容を見ることができる。特に生徒たちによる当報告者 YOKO への１４の質問ビデオへの回答が 報告者の大きな仕事となった(後述)

3-4　iEARN – Puerto Rico 活動

iEARN-Latina の中でも特に熱心な取組は、Puerto Riko の Arelen 先生であった。彼女の Machinto 取組の幾つかを紹介する：

① ACTIVIDAD #1 DOCUMENTAL BOMBA HIROSHIMA- SE JUSTIFICA
生徒たちの回答は全て NO であった。②生徒たちから YOKO への１４の質問が寄せられ、その回答ビデオが掲載された：
　生徒たちの質問
Preguntas a Yoko Takagi - YouTube
　回答ー１
https://www.youtube.com/watch?v=cCVQ7GLJKK8
　回答ー２
https://www.youtube.com/watch?v=gaUycBxwCcQ
また生徒たちから自己紹介を日本語で、と依頼があり、そのビデオがある：
https://drive.google.com/file/d/1dGypOTxApmHET2_O2JWwFY0UFmxfkHp4/ view
③“Book Final Product of the Machinto Project”として制作された本は” MACHINTO PEACE BOOK 6-2 ”である：
https://read.bookcreator.com/FQWqcOWuEqeCzdHgfdvBDNaqKsI3/tOLQJeHcSSquEPNNfKxRdw

 Recording VC Catalunya – Puerto Rico:
http://blogsuperior.pompeufabrasalt.cat/p/p telematic.html

⑤ Puerto Rico から Margarita in Spain へ Machinto 紹介ビデオ：
https://www.youtube.com/watch?v=DFdlEN7kVFM&t=1s

⑥ Margarite (Spain) Machinto presentation of Edu’sgroup:
http://blogsuperior.pompeufabrasalt.cat/p/p telematic.html

3-5 iEARN-Taiwan 活動

Chien-Kuo Junior High School in Taiwan の Machinto 活動は、継続して Lantern for Peace にあり、今年もその制作過程・完成・展示、更に台湾新聞取材による新聞記事が掲載された。：https://forums.iearn.org/iearn-projects-space/discussion/228593/chien-kuo-junior-high-school-in taiwan#latest
Dolphin 先生の下で生徒たちがランターン作成に勤しんでいる様子が好ましく、サイトには 3 冊の創作絵本 Voices for Peace の紹介もある。

3-6　長崎 Peace Talk 誕生

長崎・活水女子大学と長崎被爆者語り部の皆さんによる新しい企画が始まり、海外の生徒たちへ原爆体験が直接伝えられた。この企画は Machinto として別の章で吉牟田先生によって報告される。

４成果と課題

○成果

1) 2006 年以来、15 年間続いている。
2) iEARN-Latina の Machinto 活動が次年度も継続される予定である。
3) 長崎の語り部の皆さんの直接的な語りがあり、海外の生徒たちとの交流が生れる。
4) プエルトリコの生徒から、報告者への 14 の質問がビデオで送られ,回答もビデオでとの依頼があり、大変であったがやりがいがあった。

○課題

1) 今年度 5 カ国からの参加を得たが、iEARN Latina と台湾以外は、本格的な取組が見られなかった。
2) 日本の学校から参加が無かった。
3) iEARN-Latina の Machinto forum は全てスペイン語であるため、内容を理解するために逐一英語翻訳する手間暇が大変であった。

以上

GOMI on EARTH

～ごみの長い旅～

高木洋子（GOMI on EARTH)

わたしは GOMI である。近年の地球温暖化問題、プラステック問題、そして SDG11 並びに SDG14 に深く関わるゴミに対して、iEARN を通して世界の子どもたち・生徒たちが身近な GOMI への意識 に目覚め、未来の地球を護るための GOMI 活動へと展開する。

ＧＯＭＩ探検家　ＧＯＭＩ活動家　世界のＧＯＭＩ現実　プラステック

1. はじめに

2017 年に発足した本プロジェクトは 4 年間の活動実績を積み、”ＧＯＭＩ”という単語は既 に日本語を超え、iEARN の中でも馴染んできた。 本プロジェクト参加者は、違和感なく GOMI を 使っている。更に世界に通用する言葉として GOMI on EARTH 活動を一般化する。

２．目的と方法

2-1 目的

まず GOMI への意識を育てる。身近な自分の手から離れる GOMI から始まり、家庭の、学校の、地域の、日本の、そして地球規模のＧＯＭＩへと興味・関心を広げ深める。参加国間のＧＯＭＩ事情や対応を共有し、Ｇ ＯＭＩ活動を展開する。

2-2 方法

iEARN “GOMI on EARTH” Forum に沿って次 の内容を進める：

１）学校紹介・参加者の自己紹介
２）Part I: GOMI Detectives
３）Part 2: World GOMI Reality
４）Part 3: GOMI Activists
５）GOMI campaign/video 等作成
６）参加校間の Online Meetings

３．活動内容

3-1 GOMI News up on GOMI Forum:
https://iearn.org/cc/space-2/group-478/news
2020
Mar.9th ZOOM GOMI Meeting between Egypt and Japan
Nov.1st E-Waste turns into Arts!
2021
Jan.2nd CORONAVIRUS’ Letter to Humanity”
Jan.18th A Plastic Story – PSD Nepal

Mar.14th A New Video “GOMI Project” by AGU

3-2 参加国・参加校

Turkey, Japan, Taiwan, Russia, Lithuania, Nepal, USA, Turkey, Pakistan, India, Egypt 実際の 2020 年度 GOMI 取組活動国：　USA、Taiwan, Japan
GOMI 総参加国数：39

3-3 GOMI Forum 活動

https://iearn.org/cc/space-2/group-478

１) School Introduction ＆students’ self-introduction ○ Lincolnton High School – NC, USA ○ Wunshan Senior High School-Taiwan ○ Jhengsing Junior High School - Taiwan ○ Aoyama Gakuin University - Japan

２）Part I: GOMI Detectives (GOMI 探偵家)

○ Jhenging JHS in Taiwan

10 Students report their daily GOMI and hand in detective docs. These two are from Eric, one of the students.

○ Wunshan SHS in Taiwan

25 reports one week “Household GOMI Survey”

○ Lincolnton HS in NC, USA

Group works as A~E:
GOMI Plastic Survey- 17 students report New thoughts for this spring–11 students report What is GOMI to me- 57 students report GOMI public places – 16 students report

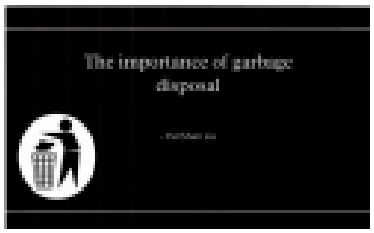
GOMI pass by Megan

３）Part II: World GOMI Reality- Globally focused ○ World GOMI Reality by Wunshan, Taiwan 15 students report their severe points with photos after reading researches and watching videos.

４）Part III: GOMI Activists (GOMI 活動家)
○ Wunshan SHS – GOMI presentation Slides
https://forums.iearn.org/iearn-projects-space/discussion/229598/wunshan-gomi-activists#latest

以下 7 名の生徒作品

By Angelina Hsiao



By YunShan Liu

By Ping Yun

By Tai Yu Hsieh

By Li Yi Hsiang

By Minbgyi Teng

By hien-Hui_Cghen

3-４ iEARN GOMI presentation : Kathy & Yoko 9 月 25 日 iEARN Project Release Party が開催され GOMI は最初のプレゼンテーションであった。https://youtu.be/F4EjU8G7uCU（ビデオ開始 5 分後）
高木が何故このプロジェクトを始めたかの説明、その後 Kathy（US)がスライドで本プロジェクトの全体を紹介”GOMI Students and Teachers make a difference.”

3-５ GOMI Project video up by AGU
2021 年 3 月青山学院大学生による GOMI ビデオが制作された。詳細は、GOMI の別章で AGU により紹介される：https://www.youtube .com/watch?v=bzpz0_P9m8I

４成果と課題

○成果
まず、Wunshan SHS （台湾）による 7 編の GOMI presentation Slides である。今までこの Part 3:GOMI Activists まで進むことがなく、今回初めて Yunchai 先生とその生徒たちによって達成された。
また、Lincolnton HS, Wunshan SHS と Jhengsing JHS の生徒たちによる一週間の正確な GOMI の記録が投稿された。
Part 2 World GOMI Reality の部で投稿があった Wunshan SHS の 17 名からは、彼らの現実の GOMI 問題への真剣さが伝わってくる。

○課題
やはり日本の学校の参加が無いことが残念である。また、GOMI グループに参加しても実際に取組に繋がらない海外の学校も多く、今後の オンラインによる GOMI ワークショップや、iEARN USA 企画による Virtual project Exhibition 時に積極的に関わる必要がある。

ANNE FRAMK Meet & Learn

ANNE パネル展　２０２０

高木洋子（ANNE FRANK）

「この忌まわしい戦争もいつかは終わるでしょう。いつかはきっとわたくしたちがただのユダヤ人ではなく、一個の人間となれる日がくるはずです。」1944 年 4 月 9 日　アンネが書いたこの 一言一言が現在を生きる私たちに響いているのだろうか。

パネル展　ものがたりのあるミュージアム　オランだ大使館.

1. はじめに

2009 年末に ANNE FRANK House(Amsterdam) から託された 34 枚の ANNE 大型パネル展第一回 が上智大学で開催された。その後、2011 年 3 月 その 16 回開催より JEARN が委託を受け、パネ ル展の全国展開となり、今に至っている。

２．目的と方法

2-1 目的

ベルゲン・ベルゼン強制収容所で 15 歳で亡くなった ANNE に会って、ユダヤ人であるという理由で 600 万という人々に悲惨な死をもたらした事実を次の世代に継続して語り続ける。

2-2 方法

１）パネル展開催

JEARN 会員を通して、学校・大学・地元の図書館・記念館などでの開催地を募集し、開催に当たっての具体的な打合せをする。開催後には報告書の提出、また次の開催地へのパネル一式輸送経費負担について事前の承諾をる。

２）大型 ANNE 写真本の配布

2015 年アンネ・フランク・ハウスから送られてきた 200 冊のアンネの大型写真本「ものがたりのあるミュージアム」をパネル開催地ほか 希望先へ、送料着地払いで贈る。図書館などでの永久保存版である。

３)　隠れ家模型”3D Cardboard Model” の配布

同様に送られてきた 30 組の組立式隠れ家も希望先へ贈る。

4)　オランダ大使館からのオファー

東京オランダ大使館からの誘い

3. 活動内容

3-1　パネル展開催

COVID-19 下において開催された 2020 年度パ ネル展は唯一、次の高校であった。パネル展第 １０７回である。

アンネ・フランク・パネル展

2020 9/25~11/10

（私立）山口県桜ケ丘高等学校英語科 常勤講師 家庭同好会顧問 清水弥生先生

写真 1 パネル展の様子

→

尚、本パネル展に於ける清水先生のメッセージ、 生徒たちの感想、数枚の写真は、次の ANNE FRANK Meet & Learn に掲載された：

https://gcpej.jimdofree.com/link/annefrank/2020/

是非、サイトへ行き取組を見て頂きたい。

3-2 ANNE 写真本の配布先：

2019 年度残数 122 冊

① 2020 Jun.15th

清水弥生先生（山口県）

② 2020 June 16th

長谷川小百合先生（東京）

③ 2020 June 18th

瀬倉祥子先生（東京）

2021 年度へ 119 冊

写真 2　配布本

3-3 隠れ家模型の配布

2019 年度残数　８セット

① 2020 June 15th

桜ケ丘高校　清水弥生先生（山口）

② 2020 Oct.29th

啓明学園　　関根真理先生（東京）

3-4 オランダ大使館 からのオファー

アンネ・フランク・ハウスからの報告依頼に 2020 年度に於ける国内パネル開催数が 107 件と報告をしたところ、当ハウスから東京のオランだ大使館へ連絡が行き、コロナが沈静化したら会いたいとの連絡があった。いづれ出かける予定である。

４．成果と課題

〇成果

2019 年に続く COVID-19 下で、2020 年度はパネル展開催が危ぶまれる中、山口県桜ケ丘高校において、清水先生と生徒たちによって 107 回目の開催が可能となった事は、何よりも貴重な ANNE 活動となった。 山口県桜ケ丘高校展示 〇〇課題

今後のコロナ状況によっては、2021 年度パネル展開催希望校が望み薄という現状がある 。ANNE との出会いを継続するために、100 冊余ある「ものがたりのあるミュージアム」を生徒た ちに届ける努力をする。

オンラインが可能にした防災世界子ども会議 2020 成果発表会

パンデミック時代の国際協働学習

防災世界子ども会議実行委員会 実行委員長 納谷 淑恵
プロジェクト創設者 岡本 和子

COVID-19 パンデミックは、人々に行動変容を促した。それは日常生活の変化だけでなく、教育においても同様である。学校教育において、ニューノーマルにおける新たな学びと環境が必要となった。防災世界子ども会議は、パンデミック禍であっても、地域と世界をつなぐ SDGs をめざした国際協働学習を実現し、グローバルなデジタル・シティズンの育成を継続して実現することができた。その方法、成果、課題について紹介する。

SDGs　国際協働学習　防災学習ネットワーク　Zoom　グローバルなデジタル・シティズンシップ

1. はじめに

COVID-19 パンデミックは、人々に行動変容を促した。それは日常生活での変化だけでなく、教育においても同様である。つまり、このような時代にあった、これまでとは異なる学習方法や発表方法が必要となったのである。

防災世界子ども会議(NDYS Natural Disaster Youth Summit))は、2020 年の成果発表会として、実際に新潟市に集まり成果発表を行う計画であった。しかし、感染拡大予防の観点から、実際に集まる会議は、中止せざるを得なかった。

参加可能な世界の小中高校生が、主体的にすすめてきた防災学習の成果を Zoom でオンライン発表することに決定し、パンデミック禍であっても国際協働学習の成果発表の場をもつことができた。

本稿では昨年 8 月 23 日に行った、成果発表会について報告するとともに、パンデミック時代の国際協働学習の可能性について述べたい。

2. 防災世界子ども会議　ロードマップ

2005 年 1 月、防災世界子ども会議は、神戸での阪神・淡路大震災 10 周年記念事業「第 2 回国連防災世界会議 パブリックフォーラム」開催を機に、ひょうごで生まれ育った子どもたちが、「自分たちの震災経験やそこから得た教訓を世界の子どもたちに伝えよう、未来へ生かそう」という目的で、兵庫発アイアーンのグローバルプロジェクトとしてスタートした。

防災世界子ども会議は、ICT を活用し「世界と学ぶ！」をスローガンに「国際協働学習のモデル」として、教育実践を積み重ねてきた。これまでの教育形態ではできなかった国境を越えた国際協働によるグローバルな視点での問題解決型学習の実践である。この先行研究実践については添付資料 1 を参考にしていただきたい。

3. 目的と方法

3-1 防災世界子ども会議が目指すものは、

①地域を創生する 主体的な市民の育成

地球規模での防災意識を共有しながら、それぞれの国・地域にあった持続可能な社会づくり（防災文化の醸成）を目指して、SDGs 達成を担う、次世代の市民を育成する。

②グローバルなデジタル・シティズンの育成

国際協働によるプロジェクト学習の実践で、地球は一つの視点から、地球規模の課題解決を担うなど、イノベーティブなグローバル・デジタル・シティズンを育成することである。

3-2 成果発表会の方法

プロジェクト参加校は、成果発表会に向け、すでに災害安全マップやパワーポイントによる発表資料の作成を行っていた。また、災害後の心の癒し、および各国・地域の文化紹介としての音楽発表の練習も行っていた。　しかし、学校に集まることさえできない地域が続出し、発表は 6 か国 6 グループとなった。

写真1　災害安全マップ　日本

防災世界子ども会議では、Zoom による会議は、経験したことのないニューノーマルの世界ではなく、2007-2011 神戸で開催のオンラインによる国際会議やプロジェクトの途中経過報告

など、プロジェクトのスタートからオンライン会議を行っていたので、Zoom での発表会はスムーズに進めることができた。

４．活動内容

4-1　成果発表会概要

タイトル：防災世界子ども会議 2020in 四日市
日時：2020 年 8 月 23 日（日）
テーマ：気候変動と私たちの住むまちの
　　「防災・減災・復興」
プログラム：特別講演：
　　各国グループ発表：
　　総評：
　　NDYS2020 宣言文採択
参加者：100 名（見学者を含む）
発表者：６か国・６グループ
　　インド、インドネシア、ウクライナ、
　　ジョージア、マレーシア、日本

写真２　パワーポイントによる発表資料

4-2　具体的な実施内容

成果発表会のタイトルが「防災世界子ども会議 2020 in 四日市」となったのは、四日市市の学習グループ「はづっ子カウボーイ」の生徒が発表会の総合司会をすることになったからである。生徒は英語と日本語のシナリオを作成し司会とプロジェクト発表の準備をし本番に臨んだ。

特別講演はジョージアのアイアーン代表の Pavle Tvaliashvili 氏によって、COVID-19 により教育現場がどのように変わったかを紹介していただいた。

総評は、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科科長 室崎益輝教授にお願いした。

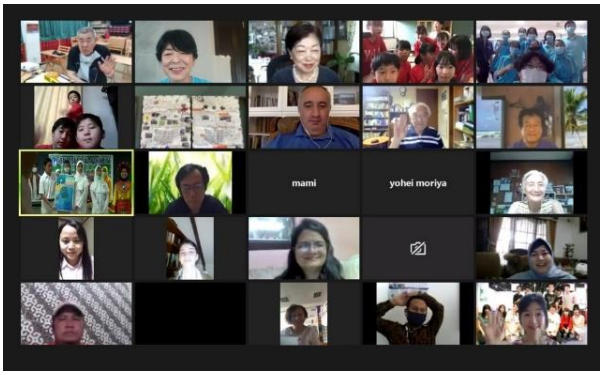


写真３　Zoom 会議の様子

Zoom 会議の記録をダイジェスト ビデオに編集し、後日、iEARN のニュースレターで紹介された。

５．成果と課題

○成果（NDYS2020 宣言文）

NDYS では、毎年プロジェクトの締めとしてこれからなすべきことを集め、宣言文を発信している。2020 年の宣言文は以下である。

・‘Take Action for Better Earth,
Green Action for Better Earth! (Indonesia)
Planting for a better tomorrow! (Malaysia)
Save forests for future generations. (Ukraine)
Let's make local elderly people smile. (Japan)
Connect and communicate to overcome disasters. (India)
Let's make the world more lifeful... (Turkey)
Together we can do!! (Georgia)
So, Let's find what we can do and take action. (Japan)

Here we go!

四日市市の子どもたちによる熱意ある司会とこれまでに培った NDYS グローバルネットワークのもつ多様性の力で、コロナ禍にあっても、笑顔で、希望にあふれた協働の学びの場をオンラインでもつことができた。世界から 100 名を超える参加者があり多くの感想が寄せられた。

写真４　マレーシアの高校の e-レポート

○課題

GIGA スクールで実現する新たな学びとして、グローバルなデジタル・シティズンシップの形成を目標とする「国際協働学習」が、ニューノーマルにおける新たな学びの形の一つとなる可能性がある。日本において、デジタル・シティズンシップ教育の理論を土台にして、SDGs を目指す国際協働学習の授業案を早急に考える必要があるだろう。

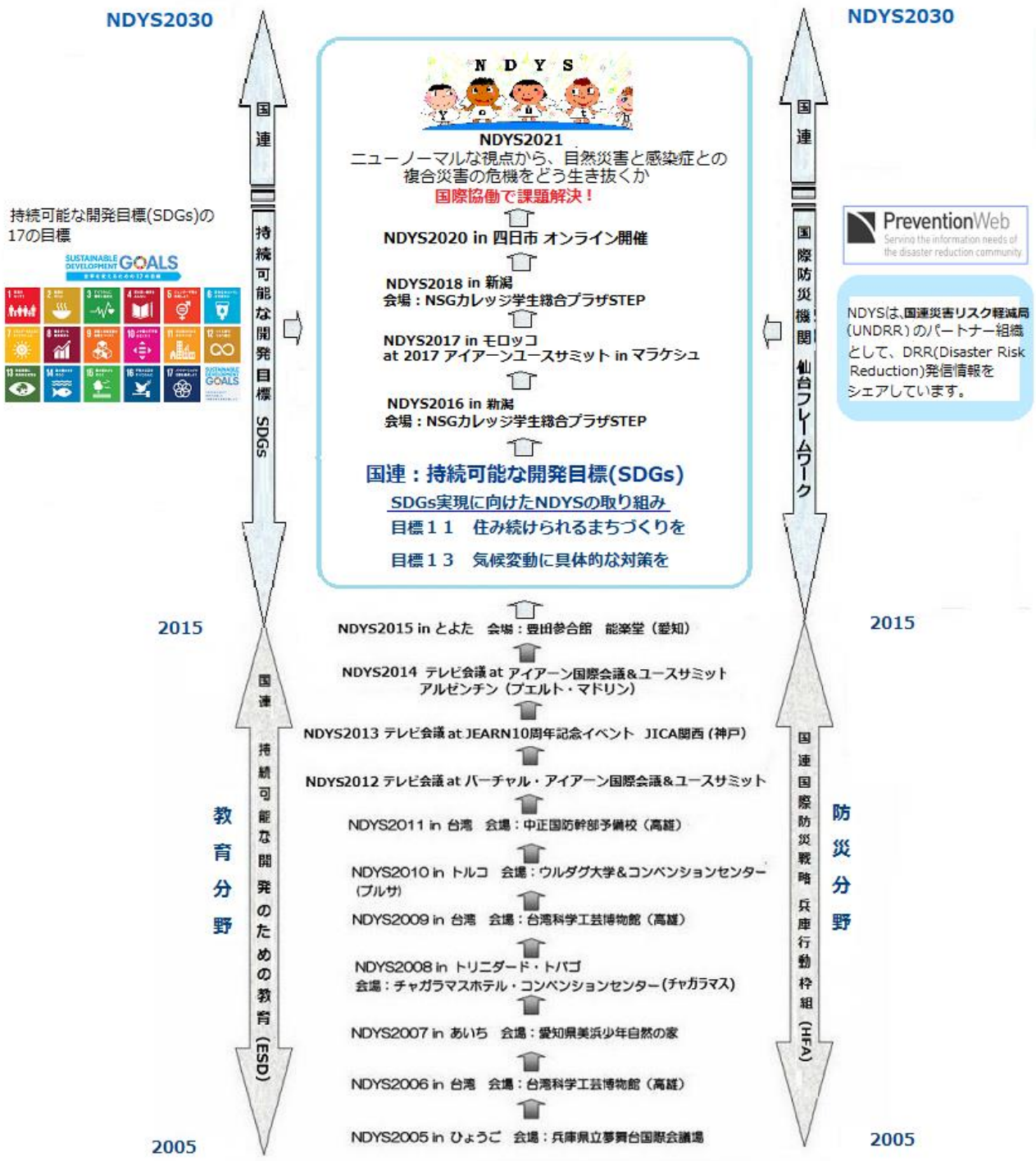
2021 年 7 月に今年も Zoom による成果発表会を計画している。オンラインでの成果発表がニューノーマルとなり、デジタルでつながった世界で、国内外から多くの子どもたちが「環境危機意識」「多様性」「市民性」を学ぶ交流や協働を体験できる場を創出したい。

添付資料 1

地域と世界をつなぐ

国際協働学習の実践

防災世界子ども会議 NDYS ロードマップ



TOPA（The Olympics & Paralympics in Action）Project

Well-being & Solidarity in Response to Covid-19
（コロナ禍におけるウェルビーイングと連帯をめざして）

東洋学園大学　滝沢麻由美

今回は、コロナ禍による東京 2020 延期決定後の 2020 年 6 月 27 日に、日本を含む 10 ヶ国から 60 名以上の参加を得たオンライン発表会（Zoom）とその後について、プロジェクト・ファシリテーターとして報告する。成果としては、世界中が困難な状況であったにもかかわらず、充実した成果物や発表の共有と交流ができたことだったが、その後いっそう状況が深刻になる中、さらに well-being と solidarity という目標を掲げ、今年 2021 年 6 月にまた予定されているオンライン発表会に向け、再びつながり励まし合おうとしている。

オリパラ教育　　東京 2020　　コロナ禍　　オンライン発表会　　well-being & solidarity

1. はじめに

筆者が 2017 年に iEARN に加入した当初から、国際理解教育の１つとしてのオリパラ教育、という構想（町田・滝沢,2019;坂本・滝沢,2019）を持っていたこのプロジェクトは、2018 年７月の iEARN 国際会議（米国、バージニア）での新プロジェクト提案のポスター発表を経て、2019 年５月に、TOPA（The Olympics & Paralympics in Action）Project としてスタートした(共同ファシリテーターは、長谷川早百合氏)。TOPA が目指す SDGs は、#3 Good Health & Well-being, #10 Reduced Inequalities, #17 Partnerships for the Goals の３つである。

ここでは、2020 年 6 月 27 日におこなわれたオンライン発表会（Zoom）、TOPA Global Exhibition 2020 について中心に述べ、共有や鑑賞された成果物や、発表・交流の様子から、その成果を考察する。そして、発表会後は、さらに世界的に深刻で複雑な状況下で、東京 2020＋1 の開催可否、また是非さえ問われて続けてきたこと自体が、そのままこのプロジェクトの大きな課題となったのだが、さらに“well-being & solidarity”を目標に子ども達の心身の健康を願い、彼らがお互いを励まし合いながら、スポーツを通して常に自己ベストを尽くしている世界のアスリートたちを開催可否、是非に関わらず応援することで、本来の五輪・パラの意義が学べるようにと、このプロジェクト継続の意味を見出してきた。最後に、その集いの場となる 2021 年 6 月 26 日の TOPA Global Exhibition 2021 について、今後の展望を述べる。

２．目的と方法

2-1 目的

ホスト・シティのある国と世界の参加国・地域の先生と生徒達が集い、ともに五輪・パラリンピックの価値を学びながら、そしてこのコロナ禍において、いっそう「友情・励まし合いの精神・多様性の中の団結」を育くんでいくこと。

2-2 方法

1）実施計画案

2020 年 6 月 27 日(土) TOPA Global Exhibition

＜第 1 部＞19:40-20:40 Youth Session（中高生の発表）

・参加国・地域（学校名）７校
アゼルバイジャン（School 238）、ブルガリア（Tsar Simeon Veliki High School）、中国（Hai Yue Community)、日本（啓明学園高等学校）、モロッコ(Sidi Elhaj Said High School)、ネパール(Kavya School)、ポルトガル(Escolas de Santa Comba Dão)

・参加人数　教員(14)、生徒（26）

＜第 2 部＞　21:00-22:00　Global Exhibition

・参加国・地域（第 1 部に追加で、計 10）
オーストラリア、ロシア、アメリカ
（台湾、パキスタンは当日欠席）

・参加人数（第 1 部に追加/入替）
教員等（16）、生徒(8)、大学生(3)
合計(67):教員等（30）、生徒/大学生(37)

２）内容項目

第 1 部: 自国紹介とコロナ禍における学校生活についての各校のスライド発表。他者意識を持って効果的にわかりやすく、またコロナ禍における経験を共感を持って伝え合おうとする。

第 2 部:プロジェクト成果物鑑賞や参加者同士の交流アクティビティに、積極的に参加する。

３）評価方法

・成果物評価と発表や鑑賞、交流時の行動観察

・発表会後に参加教員向けにおこなった任意のアンケート結果を参考にする（回答数 8）。これは iEARN Project Framework にある global competences のための 5 つの outcomes の項目

（iEARN, 2020）を含んだ TOPA 独自の作成。

３．活動内容

3-1 第 1 部プログラムと内容

前述の内容と参加校順で発表（各 7 分）がおこなわれた。例えば、アゼルバイジャンは実際に自国の特産品を見せてくれたり、中国は、Paprika「パプリカ」を歌ってくれた。また、ネパールは民族衣装での参加だった。日本の啓明学園は、日本のアニメやお菓子など、中高生が興味を持つ内容をクイズ形式でおこなったインタラクティブで参加型の発表が、たいへん効果的だった。コロナ禍における学校生活については、特にモロッコとポルトガルが、自分たちの考えをしっかりと述べていて印象的だった。

3-2 第 2 部プログラムと内容

1. Opening：各国語であいさつ
2. Collective Video Exhibition ① TOPA Activities：2020 年 5 月末までにフォーラムに投稿された小中高の参加校（22 校）のさまざまなプロジェクト成果物を約 10 分のビデオに事前にまとめてあり、それを共に鑑賞した。
3. Group Session “Not Everything is Canceled” Activity（川島章子氏案）：川島氏の “Everybody, wash your hands!” のウクレレ演奏と歌、長谷川氏による上記の詩の朗読後、コロナ禍でも失われていない大切なこと（sunshine, friendship, hope 等）を breakout rooms や全体で共有したり、パートナー校や参加者同士の親交を深めたりした。
4. Collective Video Exhibition ② “Together Hand in Hand!” Campaign：これは、もとは町田淳子氏作成の低学年用の自己紹介アクティビティだった “My Happy Face& Words（町田・滝沢、2019）をあらためて TOPA で「このコロナ禍だからこそ、よりみんなでつながろう！」と、キャンペーンとして広く声をかけ展開したものである。この結果、21 の学校/グループから多くの作品が集まり、その国・地域は地球をほぼ 1 周するほどになった。
5. Closing：坂本ひとみ氏による須賀川市立白方小（鹿又悟教諭）のコロナ禍における SDGs の取り組みと七夕の紹介後、最後に “Smile” をみなで歌い、 “See you next year！” と 1 年後の再会を呼びかけ終了した（写真 1）。

４．成果と課題

○成果

第 1 部は、各校工夫を凝らし、国際色豊かなものとなった。また、英語で堂々と自国とコロナ禍の学校の様子を紹介しており、そのレベルと参加意識の高さは、このような多国間でのライブ発表の機会が、生徒の意欲と成果につながっているからではと、じかに感じさせられた。

第 2 部の成果物については、メインの応援ポスターと、特に今回のキャンペーンの作品は、メッセージ性が強くアート的な表現も各国、個人ともに豊かで、やはりアンケートでも生徒の成果を感じるアクティビティと答えた人数が最も多い２つとなった。全体としては、前述の５つの outcomes のうち、1)「グローバルなコミュニティとつながり、その一員となった。」、3)「異文化や異なる視点を持つ人々への寛容さと尊敬の念を持つようになった。」の 2 つが最も多く、自由記述においても global community, international, other countries, connect, join, meet のような、この２つにつながることばが多く見られたことから、このプロジェクトがその一助となれた、と言えるのではないだろうか。

○ 課題と今後の展望

この発表会後、状況の難しさからいったん休止、模索状態に入っていたが、春先から今年の発表会をめざして再びを声かけ、活動を再開している。当日は、前回は不慣れであった時差がいくつもまたがる多国間での Zoom 同時進行をスムーズにおこない、参加各国・地域のスポーツとアスリート紹介に加えて、国別応援エールの紹介と全体での交換のライブを “Let’s Cheer for the World!” として１つにつなげ、今回最大の協働成果物にする予定である。このコロナ禍でまたつながる意義が感じられ、生徒たちの元気な声と笑顔があふれる集いにしたい。

写真１（ジェイアーン HP より）

５．参考文献

iEARN. (2020). Project Framework. Retrieved from https://docs.google.com/document/d/1CaihzNs4S2v8cNZSQnFBawObDkyWPNOh0p1Q7el0B54/edit

坂本ひとみ・滝沢麻由美 (2019)「オリンピック・パラリンピックをテーマにした国際理解教育」東洋学園大学紀要, *27*. 139-158.

滝沢麻由美(2020)「Tokyo2020 をテーマにした国際協働学習プロジェクト」、JACET 言語教育エキスポ 2020 口頭発表資料

町田淳子・滝沢麻由美(2019)『英語で学ぼう オリンピック・パラリンピック』子どもの未来社

THE TEDDY BEAR　PROJECT REPORT-2020

Puppala Rasagnya　　TBP Coordinator

The Teddy Bear project aims to foster tolerance and understanding of cultures other than your own. The project has been aiming at acknowledging student personal experiences, their perspectives on the present and the future, sharing student outlooks globally and creating international peace throughout the world through a teddy bear.
Teddy bear will show the world we are ready for peace and harmony

1．We are all living in the age of pandemic.

The COVID　19 pandemic has affected educational systems worldwide, leading to the near-total closures of schools, universities and colleges.

School closures impact not only students, teachers, and families...but have far-reaching economic and societal consequences.

Theme 2020-2021: Share our ideas to survive the pandemic.

As COVID-19 spreads all over the world, we need to modify our past lifestyle and methods to fit to the recent situation.

It is important to share our ideas and learn how survive. Teddy Bear Project has had wonderful teachers and students sharing their learnings even during this pandemic.　Even though we have noticed a decline in registrations it did not dampen the zeal of the Project.

２．The COVID-19 pandemic has been felt across all industries, sparing little and forever changing the way we live, socialize, and work. Many of us have switched to remote study or telecommuting with teachers, students, and friends, while others have faced prolonged holiday at schools and could not attend classes due to the lack of hardware and technology. In one way or another, we've all felt the devastating blow on the day-to-day school routine and classes instability.
This hindered the smooth completion of quite a few partnerships of the Teddy Bear Project.

For teachers, the impact of COVID-19 on school operations has been catastrophic. A reliance on remote classes has obstructed the collaborative approaches often seen within a traditional classroom and effected the team environment. Lockdowns and border closures have caused a major disruption to Teddy Bear postal services.

In a world beyond the COVID-19 pandemic, project management remains the key to success for many partnerships. Teddy Bear Project teachers thus started sending virtual pictures and information instead of posting the soft toy. Many schools will develop web pages demonstrating their participation in the project,

including the children's art work.

3. Teddy Bear Project countrys

United Arab Emirates, Taiwan, Russia, USA, Israel, Pakistan, Tajikistan, Japan, Canada,Slovenia,Australia,Peru,Colombia,Belarus,Italy,Moldova,China,Germany,Palestine,Brazil,Ukrane,Romania,Orillas,Morrocco,Iran,Qatar,Turkey,Indonesia,CzechRepublic,Mexico,Jordan,Thailand,Tunisia,Newzealand,Argentina,Georgia,PuertoRico,UK,Lebenon,Kenya,India,Kuwait,Uruguay,Nepal,Iraq,Malaysia,Azerbaijan, Srilanka,Spain and Honduras.

There are a total of 945 active Teddy Bear Project Members on the iEARN forum.

Teddy Bear is a project that promotes the dialogue between different cultures through a collaborative research strategy to share and understand the cultural traditions around the world.

Table1. The number of TBP member

Year	2019	2020
No of Registrations	44	34
No of partnerships	21	7
Carry on Partnerships from 2018	6	-
Unsuccessful Partnerships	7	12

On November 3rd 2020 at the Suzurandai Jidoukan Kobe City.

The students from India Japan, Taiwan, Indonesia and the participants from Australia, Nepal exchanged their views on the covid -19 and how they are tackling the issues in their respective schools

Fig 1:Zoom meeting

Fig ２　Q&A Session

Fig3.Presentation

4. To promote intercultural exchange and contribute a better world to live in, participants shared local practices and ideas that can be used in any digital forms. We are trying to promote Teddy Bear Project even during the pandemic because The Teddy Bear promotes happiness throughout the world by bringing international smiles to you.

We will enlist the help of schools and exchange virtual data to promote love care and responsibility among the students as global citizens through the Teddy Bear Project.

地域と世界をつなぐ SDGs

大正琴プロジェクトは防災＆大正琴プロジェクトとして再スタート！

大正琴プロジェクト　代表　廣田　元子
琴リンピック　代表　琴　　源
（本名　金子　秀樹）

2009 年にスタートした大正琴プロジェクトは、 JEARN 中部センターを三重県四日市市に開設。JICA 中部名古屋に市民登録をして４年間活動。その後、世界大正琴交流大会琴リンピック開催のために活動拠点を新潟市に移す。JEARN 中部センター休止。2019 年、プロジェクトは琴リンピックと合併。2019 年 9 月地域の高齢者や子どもたちのための無料サロン「防災＆大正琴カフェ『とまり木』」に併設して JEARN 中部センターが復活。

① 中部センターの運営方針　②地域と取り組む SDGs　③大正琴プロジェクトと防災世界子ども会議の役割と琴リンピックの役割　④琴リンピック参加申し込み方法

1.　はじめに

JEARN 中部センターの運営方針

① 地域の子どもたちをグループで募集しその代表者は JEARN の会員にならなければならない。
② プロジェクトのサポートは防災世界子ども会議（ NDYS）と大正琴プロジェクトのみとする。
③ プロジェクトの延長線上でのイベント募集に関しては、イベント代表が毎月開催される国際 ZOOM カンファレンスに参加し説明をする。
④ センターの利用は羽津地区のみの住人とする。理由：このセンターはリフォームし、税金等諸費用は全て家主が支払って地域に開放している。2019 年 9 月から社会福祉協議会が電気、水道料金の一部負担、カフェ補助等上限はあるが補助金が出ている。この補助金は高齢者介護保険から出ている。

2.　目的と方法

2-1 目的　地域と取り組む SDGs

地域の小中学生ボランティアがインターネットや ZOOM を使って、世界の先生や生徒たちと意見やアイデアを出し合い、在宅医療、在宅介護、高齢者のための防災・減災等、地域課題を解決するための必要な能力を伸ばす。同時に、豊かな心を育てる「音楽の力」を借りて、日本で発明された大正琴の楽器を練習し、世界の人たちと音楽交流をする。※現時点ではボランティア活動グループ「はづっ子カウボーイ」中学生グループが中心となって JEARN 中部センターで活躍中

2-2　方法

1）　実践計画案　＜はづっ子カウボーイ＞

SDGs「3. 全ての人に健康と福祉を」

SDGs「11. 住み続けられるまちづくりを」

2019 年は高齢者施設やサロンのボランティアとして「地域の高齢者に笑顔を届ける」訪問活動。長期休業中（45 分×４）

2019 年 9 月に「琴リンピック」と、「防災世界子ども会議」を知り高齢者のために「災害安全マップ」の制作を計画。

大正琴プロジェクトに参加している海外の学校とメッセンジャーで英会話と大正琴交流を計画。楽器練習５曲（45 分×6)）

1)　内容項目

・災害安全マップ制作：高齢者施設でマップ作りのためのアンケート調査→現地調査→制作→損保「ぼうさい探検隊」応募。「防災甲子園」応募。

・大正琴の楽器練習、英会話練習→マレーシアの学校とメッセンジャーで音楽交流。

2)　評価方法

「災害安全マップ」：高齢者が「高齢者サロン」を利用する時、施設の周りに危険箇所がある場合、それがわかるように描かれているか。

「大正琴交流」：学校で習った英語が相手に伝わったかどうか。大正琴で楽しく交流ができたかどうか。

３．活動内容　JEARN 中部センターの実践

3-1 具体的な実践内容

子供たちは、高齢者の意見を直接聞いて、選択肢を広げることにもなり、地図制作を通して今まで見えていなかった地域のあり方が少し見えるようになった。

写真１　地域との交流の様子

大正琴プロジェクトに参加している海外の学校とメッセンジャーで英会話と大正琴交流を通して、英語を身近に感じその必要性を認識した。

演奏発表交流を通して、海外でも熱心に練習していることを知り、大正琴を身近に感じ「音楽の力」の強さを認識した。

写真２　上　琴源さん、納谷さん、下マレーシアの生徒たち、はづっ子カウボーイたち

４．成果と課題

成果として、JEARN 中部センターの復活により、子どもたちは活動の居場所ができ、目標の立て方にも意欲的で、高齢者のゴミ置き場までの道のりを考慮して自治会へ提案したり手伝ったり等、「今自分たちができることをやろう!」と積極的に実践を重ねている。

今後の課題は災害が続く中、災害時の水とトイレの確保を解決したいと話し合いSDGs「6.すべての人の水とトイレの確保」を目指し、在宅医療、在宅介護と障害者のための防災・減災等を AI、ロボット等の最先端テクノロジーを使った製品の開発を企業と共にしていきたい。

※活動の様子は Facebook「JEARN 中部センター」参照

5. 大正琴プロジェクトと防災世界子ども会議の役割と琴リンピックの役割

大正琴プロジェクトは「防災世界子ども会議」の「心のケア」のために始めたプロジェクトである。そのため、大正琴プロジェクトと「防災世界子ども会議」はいつも同時開催されている。iEARN 国際会議で大正琴ワークショップを開催し、日本から持参した大正琴を配り、ネット上で成果発表をする取り組みを 5 年間続け、自己資金が底をついたところでプロジェクトを閉鎖。しかし、数ヶ月後に琴リンピックの絶大なるサポートで復活。その後は、海外校への橋渡し。インターネットを通して練習ができるようにする交流サポート。琴リンピック開催までのスケジュール調整、参加者受入準備、琴リンピック本番以外のサポートを大正琴プロジェクトと防災世界子ども会議が担った。琴リンピック事務局は新潟市への協力交渉、カルチャーナイト、リハーサル、本番に関してすべてと、大正琴をリサイクルして贈呈。

写真３．準備の様子

海外参加者の滞在費（防災世界子ども会議マップ展示、宣言発表、成果発表会も含む）期間中の宿泊費、食費、交通費、防災世界子ども会議展示場及び会場費は琴リンピックが新潟市や実行委員長の募金活動で担った。

琴リンピックは「世界大正琴交流大会　琴リンピック 2016 イン新潟」と「世界大正琴交流大会　琴リンピック 2018 イン新潟」がすでに開催され大成功を収めた。2020 年も予定されていたが新型コロナ拡大防止のため中止となった。

2020 年は練習してきた海外の学校からぜひ成果発表をさせてあげたいとの声に ZOOM 開催の「防災世界子ども会議 2020 イン四日市」で大正琴発表会を開催した。

※JEARN 防災世界子ども会議参照

6. 琴リンピックとは

琴リンピックとは大正琴プロジェクトと協力関係にある別団体である。従って大会に参加するのは iEARN の学生や先生たちだけではない。日本全国の大正琴愛好家たち、大使館を通じて参加申し込みをしてくる世界の団体、留学生たち、地域の方々等様々である。日本の参加者はすべて参加費を払って出場している。※滞在費が無料なのは２回の大会で iEARN 海外参加者だけである。＜今後は未定である。＞

写真 4 大会前の合同練習　大正琴新潟友の会の指導＞

写真 5　大会前の舞台での合同練習

写真６．世界大正琴交流大会　琴リンピック 2018 イン新潟」のフィナーレの様子＞

7. 世界に贈った大正琴

2021 年５月１日現在、全国から送られて来た大正琴は、855 台。主に海外に贈呈した大正琴は、380 台。

＜iEARN ブルガリアの先生＞

内訳：アゼルバイジャン、アメリカ、イタリア、イラン、インド、インドネシア、ウクライナ、オーストラリア、オランダ、コロンビア、シンガポール、中国、トルコ、ネパール、フィンランド、ブルガリア、ベトナム、マリ(アフリカ)、マレーシア、モロッコ、モンゴル、ロシア、台湾、日本
最近では、モンゴル 32 台、インドネシア 12 台、マレーシア 4 台贈呈。

＜iEARN モロッコ会議でワークショップ後の贈呈式＞

8.「第３回世界大正琴交流大会琴リンピック 2022 イン新潟」参加申し込み方法

この催事は、新潟市の共催で、外務省の後援を頂くことになっている。また、世界の子どもたちの滞在費の一部に充てるための募金活動もおこなっている。

開催日：2022 年７月 21 日（木）～25 日（月）

生徒宿泊：「ゆいぽーと」(新潟市芸術創造村・国際青少年センター)

スケジュール

7 月 21 日（木）　受付

7 月 22 日（金）　合同練習

7 月 23 日（土）（リハーサル、カルチャーナイト　ホテル イタリア軒）

7 月 24 日（日）　発表会本番（新潟市民芸術文化会館りゅーとぴあ「劇場」）※1，2 回目の会場のとなりの会館

7 月 25 日（月）の「防災世界子ども会議 2022 イン新潟」会場「ゆいぽーと」を予定。詳しくは琴リンピック事務局へ

申込：2022 年申込は、2021 年 10 月より開始。http://kotolympic.com

問合せメールは、kotolym@gmail.com

注意！宿泊：8 人部屋なのでできるだけ 1 国、同性 8 名。指導員は別室 2 名まで。一般の大人は別のホテル(有料)宿泊。

課題曲：参加者全員で演奏する曲（故郷、砂山）

希望者は、パプリカ、千本桜　(琴リンピックＨＰ参照)

各国ごとに演奏したい曲がある場合、事前に事務局に参考になる音を提出(伴奏を付けるため)。

日本の学生の参加(ボランティア通訳兼)も大歓迎！

青少年ペンフレンドクラブ（PFC）
―海外文通の取組―

日本郵便株式会社
郵便・物流事業企画部　切手・葉書室
青少年ペンフレンドクラブ

青少年ペンフレンドクラブは「Peace（平和）」「Friendship（友愛）」「Culture（教養）」の三信条を基に、国内はもとより世界中の人々と「手紙のやりとり」を通じて友情を深めるとともに、世界中で起こる様々なことに関心を抱き、思考を巡らせ、また、意見を交わすことにより、平和な社会の構築に取り組むクラブである。1949 年 6 月に「郵便友の会」として発足し、現在は手紙文化振興という観点から、弊社が運営している。

PFC(青少年ペンフレンドクラブ)・海外文通・ペンパル紹介・会報誌（Letter Park）・国際交流

1　はじめに

手紙を通じた国際交流活動の促進として、iEARN（アイアーン）及び JEARN（ジェイアーン）のネットワークで展開する PFC 海外文通プロジェクトにて交流を呼びかけ、児童・生徒のペンパルリストを入手､PFC 会員との海外文通活動に取り組んでいる。

2　目的

手紙のやり取りを通して､国際親善、国際理解、相互理解の促進に努めることを目的としている。

3　方法

毎月発行の会員情報誌「Letter Park」の「海外ペンパル紹介コーナー」に､毎回約50名分の文通希望者情報(国名、名前、年齢、趣味等）を掲載。PFC 会員からの紹介申込受付後、当会から申込者に希望相手の連絡先をお知らせし、手紙の交換（文通）を行う。

4　活動内容

2020 年度（2020 年 4 月～2021 年 3 月においては iEARN 及び JEARN のネットワークを通じて得た 182 名の海外ペンパルリストを会報誌に掲載し、PFC 会員からの文通申込みは 309 名であった。（「表 1」参照）

5　成果と課題

2019 年度に続き 2020 年度も iEARN 及び JEARN のネットワークから多くの方をご紹介いただき、当会員と手紙のやり取りを通した海外交流の橋渡しができた。また、iEARN 及び JEARN のネットワークからご紹介された海外の学校を会報誌（Letter Park）で紹介し、メインのページに学校の先生のコメントや写真等を載せたことで海外ペンパルの紹介人数が増えた。さらに、Web での入力フォームを作成した事により、手軽にペンパルアプリケーションフォームが送れることができるようになり、世界の様々な国からの申し込みが来るようになった。

2021 年度も引き続き、海外ペンパルの紹介目標人数 2,000 人に向けて、PFC 会報誌等を通じて海外文通への取組を働きかける。

表 1　2020 年度　海外文通の取組　iEARN からの申込みに対する掲載・紹介人数

掲載号		国名	学校名	掲載人数	紹介人数 申込み人数
2020年	4 月	ウクライナ	学校名不明	8	12
		スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	20	41
	5 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	15	25
		チュニジア	Pioneer prep school of Monastir	21	35
	6 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojn	8	3
		スロベニア	Antona Ingolica Spodnja Polskava	5	9
		モルドバ	IPLT Petru movila lyceum	15	48
	7 月		Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	11	4
		ウクライナ	学校名不明	4	5
	8 月	チュニジア	Pioneer prep school of Monastir	9	8
	9 月	モルドバ	IPLT Petru movila lyceum	4	1
		スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	9	5
	10月	チュニジア	Pioneer prep school of Monastir	3	6
		モルドバ	IPLT Petru movila lyceum	3	13
	11月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	5	5
	12月	モルドバ	IPLT Petru movila lyceum	3	4
2021年	1 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	10	23
	2 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	11	21
		アメリカ	Waddell Language Academy	4	17
	3 月	アメリカ	Waddell Language Academy	3	12
		スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	11	12
合計		5 カ国	6 校	182	309

小学校実践編

福島県白方小学校からビデオレターで世界へ発信

コロナに負けない元気な姿を TOPA の世界大会で紹介

鹿又 悟（白方小学校）・坂本ひとみ（ 東洋学園大学）

ユネスコスクールである白方小学校においては、すべての学びが SDGs をめざした ESD をベースとしている。教科化された「外国語」授業においても「人とつながる、世界とつながる」ことが学びの目標とされている。６年生の担任教員が「外国語」や「総合的な学習の時間」」を使って子どもたちのビデオレター作成に取り組み、TOPA に参加して発信した実践を紹介する。

キーワード　小学校英語, 総合的な学習の時間、ESD, SDGs, ビデオレター

1. はじめに

2020 年４月より小学校高学年において正式な教科としての「外国語」授業が始まり、英語を使って世界に向けて発信することが検定教科書においてもプロジェクトとして取り上げられている。福島県の白方小学校６年生の担任である鹿又は、英語授業における ALT への依存度を下げて、自らがもっと主体的に授業計画をたてるようになった。

教科書のユニット１にある子ども一人ひとりによる英語の自己紹介をビデオに撮り、海外の子どもたちにもそれを見てもらい、リアクションが返ってくるなら、子どもたちは英語を学ぶ意義を実感し、学習意欲が向上するであろうと考え、JEARN に加入することを決めた。

２．目的と方法

2-1 目的

学習指導要領の 3 つの柱に沿って、１．習得した英語の知識を活用して自己紹介の英文を作り、２．ビデオレターという方法を用いて自己表現をし、３．子どもたちの「人とつながる力、世界とつながる力」を育てることにより、英語コミュニケーションに主体的に取り組み、学習意欲を向上させる。

2-2 方法

1）実施計画案

「外国語」

プロジェクトの活動時間：(45 分× 8 コマ)

２）内容項目

①　英語教科書のユニット１に沿っての英語自己紹介の英文作成とビデオ作成。

②TOPA の Hand-in-Hand Project に参加するためのメッセージカードを 6 年生一人ひとりが作成。「コロナに負けるな」の英語メッセージも入れる。

③白方小学校で行っているコロナの感染対策のいろいろな場面をビデオレターにまとめ、英語の字幕をつける。

３）評価方法

外国語「Unit１　This is me!」

「Check Your　Steps 1　外国の人にメッセージを伝えよう」（ New Horizon Elementary 6）

3 観点: 知識･技能/ 思考･判断･表現 /主体的に学習に取り組む態度

5 領域：話す（発表）

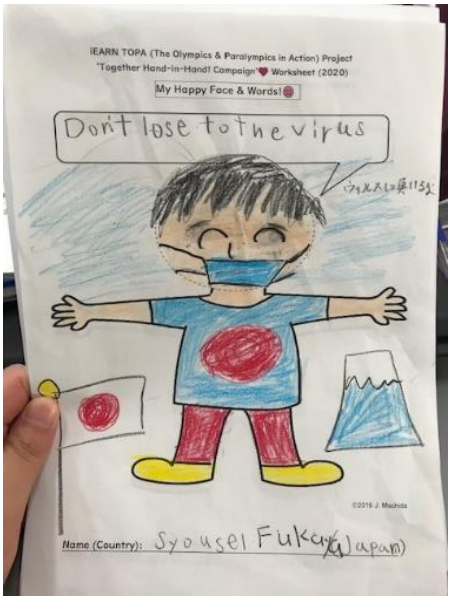
３．活動内容

① 小学校6年生のクラス全員が英語による自己紹介を練習し、教科書 New Horizon Elementary 6 の Check Your Steps 1「外国の人にメッセージを伝えよう」に沿って、iEARN を通じて、その自己紹介ビデオを外国の子どもたちに届けることにした。「Unit 1 This is me!」での表現方法は、児童たちの中で、既に理解していた内容も多かったため、自信をもって発表することができていた。

② TOPA のプロジェクトである「みなで手をとりあってコロナに負けないようにしよう」に参加し、このプロジェクトに参加している世界各国の子ども共通のワークシートに自分らしい色をつけ、英語メッセージも書いて世界大会で披露した。世界の子どもたちと紹介し合うということで、児童たちは、日本を象徴する絵を描き加えたり、今の自分たちの現状を伝えるべく、マスクを着用した顔にしたりと一人一人が工夫して表現している姿が見られた。

③ 日ごろのコロナ対策を英語ビデオにまとめ、TOPA の世界大会で発表した。手洗い、手作りマスク、三密などの自分たちが経験し、実践している内容だったので、ビデオレターに表現する際は、取り組みが早く、意欲的に参加することができた。

テロップで英語を入れる際には、辞書や翻訳機能を活用し、相手に伝わるように工夫を凝らすことができた。



TOPA の Hand-in-Hand　Project に参加するために 6 年生が作成したメッセージカード

TOPA の世界大会で発表したコロナ対策のビデオレター

４成果と課題

〇成果

・子どもたちは、自分たちの作品が世界に向けて初めて発信されたことに達成感を感じ、自己尊重感を高めることができ、英語がグローバル・ランゲージとして使えるものであることをあらためて認識した。

・TOPA の世界大会は zoom で開かれ、昨年からポスターを送るなどの交流をしてきたネパールの先生や子どもたちにスクリーン上ではあったが会うことができ、Breakout Rooms のセッションでは鹿又・坂本がネパールの先生たちと一緒のグループにしていただき、話もすることができたのがよかった。

〇課題

・世界大会は参加国の時差を考慮して、日本時間の夜に開かれるため、小学校の児童はライブのミーティングには参加することができなかったのが残念であった。ネパールと日本だけなら、時差を考慮しても、双方の子どもが参加できる時間帯の交流も組むことが可能なので、さらに共通のプロジェクトに取り組み、双方の国の子ども同士がオンラインで話し合うことができる機会を持ちたいと思う。

・世界大会でメッセージカードやビデオレターを披露することはできたが、子どもたちは、直接、コメントが自分たちに返ってくることがもっとほしいと感じていた。そこで、「総合的な学習の時間」を使って地域のことをそれぞれの関心に応じてグループごとに調べて作成したビデオレターを TOPA の「最新ニュース」のコーナーにアップすることにした。ファシリテーターの滝沢麻由美先生のご協力もあり、ネパールの小学校では、そのビデオレター 4 作品を子どもたちが一同に会してじっくりと見てくれて、その様子をとった写真やネパールの子どもからの自己紹介が届いた。また、ゴミ問題を扱ったグループもあったので、高木洋子先生の GOMI on EARTH の方にもアップしていただき、コメントが返ってきた。子どもたちの小学校卒業直前にこれらのコメントが返ってきたので、児童が中学校にあがってさらに英語学習をするにあたり、高い意欲をもって臨んでくれることが期待される。

・小学校英語において、子どもたちが五感を活かした主体的で対話的な体験をしながら思考を深めていくことの重要性は、児童英語教育学会、小学校英語教育学会でも認められていることである。白方小学校における iEARN を通じた国際協働学習をさらに継続し、発展させることが、SDG 4「質の高い教育をみんなに」そして、SDG 17 の「パートナーシップで目標を達成しよう」に近づいていく可能性を秘めたものであることを確信している。

＜参考文献＞

・正頭英和「ICT 活用のその先へ―教育はどういう方向に向かっていくか、向かうべきか―」2021 年 5 月 16 日 日本児童英語教育学会研究大会における講演.

・松川禮子(2000)「岐阜県下の公立小学校の英語教育への取り組み」御園和夫(監修)『英語を楽しくする 7 つの方法』旺文社.

・萬屋隆一(2012)「国際理解教育と英語教育」岡秀夫・金森強（編著）『小学校外国語活動の進め方』成美堂.

こんな時だからこそ原点に戻って

ー継続し続けることの意義ー

角納　裕信（金沢市立大野町小学校）

コロナ禍の中の２年目の教育実践に突入しようとしている。毎年、継続して星稜大学の清水先生と共に、助言をいただきながら「国際理解教育実践」を積んできた。令和２年度の春、突然の学校休校、その中でも、交流し続けてきた台湾の新甲國小学校のサンディ（楊美媛）先生と共に親日国台湾（高雄市）の学校とである。Teddy Bear Project としては、大野町小学校に赴任してからであるので、５年目になる。それまで、Artmile Project でイタリア、韓国、インドネシアという国々と交流してきた。このような世界的に困難なときにこそ、交流する意義があるのだと感じる。国内での教育活動と同様に、できる限りのことを工夫して継続し続けていく。

Teddy Bear Project　Artmile Project　国際理解教育　国際協働学習　継続　LINE

1. はじめに

今年も生徒指導主事を拝命した。特に新しいことはないのだが、学校長より、「生徒指導の三機能」を生かした授業づくりを基本とした生徒指導をお願いしたい、と話があった。①自己決定②自己存在感（自己有用感）③共感的人間関係　の三つの機能を指す。GIGA スクール構想と共になんだか学校が全く違うもののようになっていくような感じではあるのだが、生徒指導に関して、以前から言われていることに立ちかえって授業を組み立て直すいい機会だと思った。単級である本校は、人間関係が固定化してしまい、新しい考えや思考の深まりは、教師側から外部より刺激を与えてこそ生まれてくる。そう考えると、このコロナ禍で交流を避けていくというよりは、逆に ICT を活用して積極的にこちらからアプローチしていくことが大切であると考える。このコロナ禍であるからこそ、是非とも推し進めていかねばならないプロジェクトであると考えられる。

２．国際理解教育→国際協働学習

2-1　外国と交流することにより、異文化理解と共に協働して新しい社会を生み出していくことを共に考え、見出していく。

2-2　その方法について

1）実施計画

国際協働学習 Teddy Bear Project

第４学年児童３１名

英語学習や総合的な学習の時間を活用して

２）内容項目

・自己紹介カード交換

・地域の自慢を LINE を通じて交流し合う

・クリスマスカード交換

・Teddy Bear 帰国と同時に、お土産記念品交換

３）評価方法

写真１　送られてきた動画をみんなで視聴する。

外国語「Unit 5　Do you have a pen? おすすめの文房具セットをつくろう」の中で自己紹介カードづくりと共に鉛筆を送る。「Unit7　What do you want?　ほしいものは何かな？」の中で、地域にあるものを紹介する。

写真２　日本の折り紙や台湾にはない「煎餅」を送った。

観点: 知識・技能/　思考・判断・表現 /主体的に学習に取り組む態度

領域：話す（発表）LINE 上動画 Googleclassroom

３．変化していない国際理解教育

ドラゴン桜２で桜木建二の２つの言葉が的を

得ていると思った。「教師の最大の仕事は生徒にチャレンジさせること、目標に向かって背中を思いっきり押すこと。」「額面に合格と記した空手形（裏付けのない）を切りまくれ！」まさにこの言葉こそ、生徒指導の原則であると思う。教師が子供の信頼を勝ち取ることができるかどうかなのである。口約束でもいいから、とにかく任せてくれ、ついてこい！と力強くいってやるのだ。もうひとつ、「そういった人を見下すような言葉を使っていると東大落ちるぞ。受かりたかったらまずその性格を直せ。受験は人間性で決まる、自らの人格を磨くことが合格の礎だ。そんな思いあがった考えを持つ奴は百回受けても合格しない。」学力アップのカギは、性格改革である、と言っている。その通りだと思う。学習を通して、児童の性格の良いところは伸ばし、悪いところは直していくのが、教育であると考えるからである。

国際理解教育＝英語教育などと最初の頃は解釈された。しかし、バックパッカーでそんなに英語を話せたわけでもない私が、色々なアジアの国を旅行できたのは、周りで話している言葉を聞いて名詞と動詞を判別して、少しの語彙を獲得したら、その語順を並べて話すことで何となく通じたからなのである。その時は、指差し会話帳が大変役に立った。単語を指さして並べるだけでいいのであるから。英語はちょっぴりできれば、あとは考えてコミュニケーションすることが当時からできたのである。そう考えると、今は WEB 翻訳があるわけだから、基本的な語彙と文法が分かれば、コミュニケーションすることができるのである。

もとより国際理解教育は変化していないのである。最初から、つけたい力は変わっていない。寧ろインターネットが発達しているから、より効率よく学習することができるようになっているのである。

写真 3　自分のペアの相手を見つけ出す。

４成果と課題

〇成果

・LINE でお互いに繋がっているから（教師同士が）リアルタイムに送り合ったことを朝の会や帰りの会ですぐに紹介することができる。

・動画や写真がすぐに送ることができること、教室に大型ディスプレイがあることで提示することも可能である。

・お土産やカードを１対１で交換することでリアルに友達付き合いが始まったような感じになることができる。

〇課題

・コロナ禍の中での活動できることを工夫してできるだけリアルな活動を組んでいきたい。

・クロムブック一人一台を活用できる可能性を考えだしていきたい。

〇最後に

向粟崎小学校（５年生）イタリア→向粟崎小学校（６年生）イタリア→向粟崎小学校（３年生）イタリア→木曳野小学校（６年生）韓国→木曳野小学校（３年～６年　歴史クラブ）インドネシア→大野町小学校（５年生）台湾→大野町小学校（５年生）台湾→大野町小学校（３年生）台湾→大野町小学校（６年生）台湾→今年度（令和３年度）大野町小学校（４年生）台湾 Artmile５枚＋Teddy Bear５頭＝１０年は、継続して国際理解教育→国際協働学習を行ってきている。どちらも物が残るところが、ゴールがはっきりしていて、わかりやすいところである。実際に人とモノが介入しているため記憶にも残る。テレビ会議をするときに、スカイプから始まって、通信手段も、断線することが多かったが、今は GIGA スクールの為、回線も強力なものとなった。また一人一台のタブレットと国際理解教育がやりやすい基盤が整ってきている。インターネット全盛の時代に、このことの良さを最大限に生かすことができる教育が、「国際協働学習」に他ならない。距離を無視することができるのであるから。

写真 4　金沢の代表的な食べ物としてのおでん

国際交流とプログラミング学習の融合

マインドストーム EV3 を活用したテディベアプロジェクトを通して

齋藤　亜蘭（金沢市立四十万小学校）清水　和久（金沢星稜大学）

総合的な学習における国際理解教育とプログラミング学習を融合させた単元開発及び、授業実践を行った。本校では毎年 6 年生が国際交流でテディベアプロジェクトを行っている。今年度は台湾の精忠國民小学校の 6 年 1 組 18 名と、四十万小学校 29 名で行った。

国際交流　テディベアプロジェクト　プログラミング教育　マインドストーム EV3

１　はじめに

プログラミング学習は、ゴールまで何度も挑戦することで主体性と論理性、グループで取り組むことで協働的な学びを実感できるものである。また、国際協働学習は交流相手が実在することで、目的意識や相手意識をもつことができ、伝えたいという意欲を高めることができる。本研究ではこの両者の融合をねらった。

２　目的

国際協働学習において、「台湾のことを知りたい」という目的意識や「学校生活や金沢について交流相手に伝えたい」という相手意識を高める意欲をより高めるために行う。

３　研究の方法

（１）総合的な学習の時間の単元開発（含本時）
（２）授業における工夫点
（３）児童の反応

４．研究の内容

（１）単元開発

今年度、総合的な学習（全 70 時間）において国際交流を行ってきた。コロナによる臨時休校があったため、6 月～3 月までの 10 カ月間で実施

表１　総合的な学習の時間年間指導計画

時	主な学習内容
6月 〜 7月 ⑦	〈世界は今どのような状況にあるのだろう〉 ・金沢星稜大学の学生による「世界がもし 100 人の村だったら」オリエンテーションで、世界の現状を知る。 ・テディベアプロジェクトについて知る。 ・交流相手国を知る。
	〈台湾に送る人形を決めよう〉 ・児童が持っている人形の中から台湾に送りたいものを決める。 〈台湾の小学生に伝えたい私達の生活や文化？＞ ・これから始まる交流に向けて、自分たちが台湾の小学生に発信したいことは何か考える。
	・発信するために自分が知りたいことや調べたいことは何か、テーマを決める。 ・テーマごとにグループに分かれる。
9月 ⑩	〈グループごとに自己紹介動画を作ろう〉 ・自己紹介動画＆ミニ金沢紹介動画を作る。 ・どんな動画にするか、絵コンテを考える ・必要な写真や動画を集めたり、撮影したりする。 ・交流相手の先生に LINE で動画を送る。
	〈台湾とはどんな国なのかな〉 ・動画づくりと並行して、PCや本で台湾について調べ活動をする。
	〈台湾に向けて金沢の紹介動画を作ろう〉 ・以前に作った自己紹介動画で行った金沢紹介をもとに、より詳しく交流相手に伝えたい内容を考える。 ・グループに分かれて、動画の構成を考える。 **・人形を台湾へ郵送する。**
10月 ⑩	☆金沢ふるさと学習（金沢めぐり） 〈昔からある物をどのように守り、伝えているのかな〉 ・グループごとに行ってみたい場所を調べ、見学スケジュールを立てる。 ・質問したいことや、テディベアプロジェクトでどんな写真が使えそうか考える。 ・グループに 1 人まいどさんについてもらい、金沢市中心部を散策する。
	〈台湾とはどんな国なのかな〉 ・動画づくりと並行して、PCや本で台湾について調べ活動をする。 〈調べたことをまとめよう〉 ・台湾について調べたことの中から、1 人1項目を画用紙にまとめ、クラスで冊子を作る ・同じくテディベアプロジェクトに参加している星稜中学生に、まとめた冊子を見てもらう。
	プログラミング学習 〈EV3を動かしてみよう〉 ・金沢星稜大学の学生にEV3の使い方を学ぶ。
11月 ⑩	☆金沢ふるさと学習（金沢めぐり） 〈金沢めぐりに行こう〉 ・グループに 1 人まいどさんについてもらい、金沢市中心部を散策する。 ・まいどさんや施設の方に聞きたいことを質問する。 ・テディベアプロジェクトに使えそうな写真や動画を撮る。
	★本時 **プログラミング学習** 〈台湾について学び、金沢マップを作る準備をしよう〉 ・台湾の小学校から送ってもらった嘉儀市紹介動画をマップ上に位置づけ、EV3を走らせる。停車ポイントに停まると、QRコードで動画を読み取り、視聴ができる。

	〈金沢の魅力を伝えるマップを作ろう〉 ・金沢めぐりで得た情報や写真をもとに、これまでに作成した動画を完成させる。金沢の紹介動画を、児童が作ったマップ上にQRコードで位置付ける。 **・台湾の人形が届く。**
12月 ⑬	〈交流相手にクリスマス・ニューイヤーカードを送ろう〉 ・英語で習ったフレーズを使って、交流相手に 1 人 1 通手紙を書く。 ・完成した金沢マップと一緒に郵送する。
	〈交流相手とTV会議をしよう〉 ・お互いの人形が届いたことを確認し、交流相手の子と顔合わせ＆自己紹介をする。 **・冬休み中、台湾から来た人形をホームステイさせてくれる児童を募る。**冬休み中の家での様子を人形と一緒に撮ってもらい、Google Classroom 上にアップしてもらう。
1月 〜 2月 ⑭	〈これまでの滞在記をまとめよう〉 ・台湾の人形が来日してから、日本でどんな生活を送っていたのか、滞在記を動画で作る。冬休みのホームステイで、Google Classroom にアップしてもらった写真や動画も使う。 ・グループに分かれて学校生活をメインに動画を作る。 ・交流相手の先生に LINE で動画を送る。 **・日本から送った人形が帰ってくる。**
3月 ⑥	〈最終 TV 会議に向けて、内容を考えよう〉 ・交流相手の先生と、どんな最終回にするか考える。 ・お別れ会も兼ねた TV 会議になるよう、どんなことをしたいか考える。
	〈お別れ TV 会議をしよう〉 ・互いの放課後の様子を交流する。 ・最後に出し物をする。

本時案

【知識・技能】

EV3 を操作する上で、命令コマンドを理解しそれらを操作することができる。

【思考力・判断力・表現力】

プログラミングを体験しながら、EV3 に意図する処理を行わせるために必要な論理的思考を養う。また、自分でテーマを決めて、金沢を工夫して発信するよう内容をまとめている。

【学びに向かう力、人間性等】

失敗や成功を繰り返し、試行錯誤しながら粘り強く、意図した処理を行わせようとしている。また、異文化を知ることで、金沢の良さを再認識し発信していこうとする意識を高める。

①使用したプログラミングロボットについて

教育版レゴ「マインドストーム EV3」を使用。専用アプリ「mindstorms education」で命令ブロックを組み合わせる形でプログラムした内容をロボット本体に送信し、操作することができる。ロボットを走行させる他、カラーセンサーで色を読み取ったり、タッチセンサーで障害物を認識したりすることもできる。

図 1　EV3 の操作をしている様子

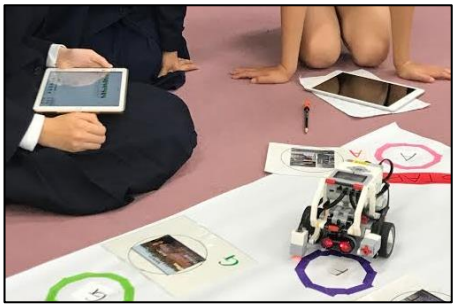


表 2　本時案

時	学習活動と児童の意識の流れ
3	1.　本時の課題をつかむ。 ・台湾からマップが送られてきたよ。 ・教わった操作方法を思い出しながら、EV3 を走らせてみたいな。 ・金沢マップも作ってあげたらいいんじゃないかな。 **〈台湾について学び、金沢マップを作る準備をしよう〉** 条件1 スタート地点からゴール地点までの間で、 停車できるポイントを 2 か所とする。(最後まで辿り着いたグループは、別ルートをプログラミングしてもよい。)
10	2.　考えを出し合い、思い通りに動く方法を考える。 条件2 3 人 1 グループで 1 台の EV3 を動かす。全員が操作できるよう、交代制で行う。専用アプリでスタート地点から停車ポイントまでプログラムを組む。
12	3.　上手くプログラムできたグループからコツを掴み、再度プログラミングする。 ・時間が長すぎるから、停車ポイントで停まれないよ。 ・右のタイヤを動かせば、左に回ることができるよ。
5	4.　マップから学んだ情報を共有する。 ○台湾マップからどんなことが分かったかな。 ・台湾にも金沢駅のような駅があったよ。
15	5.　台湾に送る金沢マップの検討 ・金沢駅を見せてあげたいな。 ・台湾にはないような食べ物はどうだろう。

（2）授業における工夫点

①コースの選択権を学習者に持たせる

条件としてマップ上のスタート地点からゴール地点までの間で、EV3 を停車できるポイントを 2 か所にした。マップには停車ポイントを 10 か所設け、そこに 10 種類の動画の QR コードを添付した。停車できたら QR コードを iPad で読み取り、動画を視聴していく。

1 回のルートで停車できるポイントを 2 か所に絞ったことで、どのグループも 5 分以内で 1 ルートをプログラミングすることができた。

②協働作業の設定

3 人 1 グループで 1 台の EV3 を動かし、全員が操作できるよう、交代制で行った。どの児童にも EV3 を操作させ、試行錯誤させることで達成感や、

協働のよさを感じられるようにした。上手に操作できる児童もいれば、上手くいかず周囲からアドバイスをもらいながら操作する児童もいたが、「～してみたら？」や「それじゃ、うまくいかないんじゃない？」と声を掛け合いながら進めていた。

図２　金沢マップ上をEV3に走らせる様子

（３）授業後の児童の反応

①相手意識及び目的意識について

本時のプログラミング学習の目的として、台湾の街並みや文化を知ることが挙げられる。台湾についての知識を増やすためには、EV3 を操作しなければならないため、児童は目的意識をもって授業参加することができていた。また、動画に映る台湾の友達が、自分の交流相手かどうか楽しみにしている様子も見受けられた。「金沢マップを作製する時は、交流相手が知らなさそうなことを発信したい。」や、「～な動画なら、交流相手も分かりやすいのではないか。」という意見も挙がったため、これまで TV 会議や手紙で繋がってきた相手意識が、EV3 の活用で更に高まっていることが分かった。

②比較できるモデルの提示

本時で扱った台湾マップは、金沢星稜大学の学生に作成を依頼した。事前に精忠小と宣信小から送ってもらった嘉儀市に関する観光スポットや食に関する動画をQRコードに変換し、EV3が走ることのできる大きさのマップに位置付けてもらった。動画の中に出てきた嘉儀駅に対して金沢駅を、精忠小・宣伸小に対して本校をと、台湾マップに対応した金沢マップを作ろうとする姿が見られた。このマップがあったことで、児童はどんな金沢マップを作ったらよいか、イメージを膨らませることが出来た。

図３　簡体字に翻訳した金沢マップ
（尾山神社・武家屋敷跡 野村家・兼六園）

５　研究の成果と課題

これまでは、調べ活動や動画制作、TV 会議など単発の活動になりがちだった国際交流に、プログラミング学習を融合させたことで、児童の変容が見られた。金沢マップに動画を埋め込んで発信するという形をとることで、児童の意欲を高め、総合の活動の１つのゴールとすることができた。そして、台湾マップという比較できる教材を得たことで、それに対応した金沢マップをつくるという視点が持て、交流相手に金沢を伝えたいという気持ちが高まった。

また、EV3 の活用でこれまで以上に児童間に対話が生まれた。6 年生ということもあり、高学年ならではの男女の溝を感じることもあったが、EV3 の秒数を縮める相談や、進む方向を見極める姿には、一つの目標に対して試行錯誤しながら協働する姿が見られた。また、協働することで効率よく処理することができ、相談できるよさを感じていた。プログラミングは、国際交流を円滑にするだけでなく、主体性や協働性が必然的に入り、学習に向かう児童の人間関係も円滑にする効果を感じた。

一方で、他教科との融合させる際に、ねらいを絞る難しさを感じた。各教科のねらいを網羅しながらも、プログラミング学習としてのねらいも兼ねていかなければならないため、配慮する必要がある。今回の場合も、国際交流としての台湾の小学校との協働作業という視点をベースに置きつつ、教科とプログラミングを巻き込んだ。国際交流とプログラミング学習の融合を図るには、国際交流を年間の活動の土台として、プログラミングを教科などにも組みツールとして使うことが重要である。

Holiday Card Exchange Project

― 公立小学校における iEARN 参加プロジェクト 2 年目の実践報告 ―

島　崎　はるか（世田谷区立千歳小学校）
長谷川　早百合（世田谷区英語活動支援員）

iEARN プロジェクトに初めて参加した前年度に引き続き 2 回目の Holiday Card Exchange プロジェクトを実践した。コロナ禍で始まった 2020 年度では、新学習指導要領のもと導入された外国語科授業で 5 年生と 6 年生が英語の学びを活用しカード、ビデオ、ZOOM を通じて 5 ヶ国と交流を果たした。本年度は外国語専科の教員も iEARN メンバーとなり強みが活かされた。

公立小学校　　外国語科　　コロナ禍　　国際交流　共感力

１　はじめに

小学校では 2020 年度新しい学習指導要領が全面実施となり外国語科元年であった。コロナ禍で世界中の学校が困難な状況への対応に追われる中、本校も分散当校が 6 月に始まり児童が毎日学校へ通えるようになったのは 2 学期の終わり近かった。本校では前年度に初めて参加した Holiday Card Exchange（以下、HCE）が実在の相手とモノとの交流体験により児童の意欲を刺激したと高く評価され、引き続き HCE を実施することとなった。また、英語支援員を介した iEARN 参加による教育的機会の制限が課題であったことから外国語専科の教員を iEARN メンバーとした。ICT を基本としてきた iEARN の国際協働学習はコロナ禍でも工夫をしながら続けることができ、本校の国際協働学習の持続可能な仕組み作りの次なる展開をここで報告したい。

２．目的と方法

2-1 目的

本プロジェクトの目的は外国語専科の先生が iEARN メンバーとなった強みを活かし 5 年、6 年の二学年を参加させ、より多くの児童が実在の相手との国際交流の実体験を得ること。また、外国語科として初めて使う教科書 Here We Go!（光村図書）に沿ってどのように HCE プロジェクトを組み込み評価へとつなげられるかを検証することの二つである。

2-2 方法

1）実施計画案

6 年生全 4 組と 5 年生全 4 組が外国語科授業で参加。6 年生の関連単元は、Here We Go! 6 Unit 2 Welcome to Japan（1 学期）、同 Unit 6 This is my town（2 学期 45 分 x 6 コマ）。5 年生は、Here We Go! 5 Unit 6 I want to go to Italy (45 分×6 コマ)。

２）内容項目

コロナ禍での各国郵便事情に対応し HCE 申請時に①紙カード②電子カード③「どちらでも良い」の選択肢があった。本校は③を選択した。

３）評価方法

成果物としてのカードは評価せず、それぞれの単元での評価を行った。

写真 1　外国語専科の教員が直接 iEARN にアクセス

３　活動内容

3-1　具体的な実施内容―交流校・国

台湾 2 校、ベラルーシ、スロベニア、スロバキア、ロシアの計 6 校、5 ヵ国と交流した。台湾 1 校とはカード交換後も ZOOM でライブ交流を実現した。

3-2　具体的な実施内容―6 年生

Unit 2 Welcome to Japan（1 学期）の最終成果物を交流校との自己紹介で発表した。

写真 1　四季に分けての国紹介―夏の例（6 年生）.

実際の HCE は、Unit 6 This is my town の単元に組み込み、その最終成果物として This is my country の旅行パンフレットを制作した。

3-3　具体的な実施内容―5 年生

5 年生は Unit 6 I want to go to Italy で相手国の調べ学習を実施した。カード作りでは英語の挨拶文などのひな型を提示し、児童は相手国の文字で挨拶を書き調べた知識をカードに反映していた。

写真 2　調べ学習を反映したカード（5 年生）

3-4　交流校との実体験

相手校からは紙カード、電子カードも ICT、フォーラム経由のビデオメッセージが届いた。本校児童が鑑賞している姿の写真を相手校に送るとお礼のメッセージ、写真、ビデオが届きそれをまた児童に見せて交流を繋げた。

4　成果と課題

〇成果

・台湾 1 校とのライブ交流（ZOOM）では異文化への共感力を育てるための今後の活動としてヒントを得ることができた。

・教科書に組み込むさらなる可能性も見え 2021 年度 5、6 年生の外国語科で HCE 参加が決まった。学校と地域運営委員会の理解を得て引き続き小学校の教員が直接 iEARN メンバーとなる。これにより支援員など外部の iEARN メンバーなしでも本校のカリキュラムや活動に国際協働学習を持続的に組み込める道筋ができた。

・児童の様子に関しては、お互いの自己紹介から始まった国際交流も、回を重ねる度に相手意識が芽生え、どうしたらより相手が喜んでくれるか、日本に興味をもってくれるか、など試行錯誤する姿が見えてきた。1 番の成果は、交流校から届いた手紙を児童たちが見ていた時の理解しようと努力する姿だ。「先生、この文章はこれであってる？」「これは明けましておめでとうで、これは…」など手紙の内容を楽しむ姿が多く見られた。海外と繋がることのできた様子が伺えた。

・英語に興味があり、意欲的に外国語の授業に取り組む児童が大半である。コロナ禍で制限が多く、直接的な交流があまり行えなかった中、ICT を利用した国際交流はとても有意義であった。なにより、児童たちの「繋がりたい」気持ちとマッチしていたことが 1 番の要因である。度重なる英語支援員との打ち合わせでは、「繋がる意識」を児童にもってもらうために様々な方法を考えた。1 年かけてその意識付けは徐々に浸透していったと感じる。次年度以降も、繋がりを大切に取り組んでいきたい。

〇課題

コロナ禍の授業では、活動内容に多くの制限があった。特に児童間の交流は極力避け、ICT の活用や小規模のグループ交流をメインに活動を進めていった。児童間の交流がままならず、発話練習の回数も少ない中、自分たちでできる範囲の取り組みを行った。新しい教科書に沿った HCE の準備不足も否定できず次年度では、よりスムーズに思いや考えを伝えられる環境を配備し 5，6 年生の実態に合わせたより「主体的・対話的な深い学び」への工夫を強化したい。

中学校・高等学校実践編

コミュニケーション能力・異文化理解能力を育成する 中学校版テディベアプロジェクト

森　直樹（星稜中学校）

コミュニケーション能力・異文化理解能力を育成することを目的とし、中学 1 年生を対象にテディベアプロジェクトを実施した。台湾の小学生に何を伝えればよいかについて考え、英語で伝えることを通じて、コミュニケーションを図ろうとする意欲を高めることができ、英語のライティング力を高めることができた。また、生徒たち自身の深い自己理解につながった。次年度の実施においては、自分の興味のあることや相手の興味のあることについて、より深くきき合い伝え合う交流ができるようにしたい。

キーワード　国際理解教育　コミュニケーション能力　異文化理解

1. はじめに

中学校学習指導要領では、中学校の総合的な学習の時間の探究課題の設定の際には、国際理解などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題を踏まえて設定することとされている。また、中学校外国語科の目標は、言語活動を通じて、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することとされている。

中学校英語科の授業において、コミュニケーションを図る技能を身につけていく上で、英語を活用してコミュニケーションを図らなければならない機会があることが望ましいが、教育活動全般を通じて、そのような機会はほとんどないのが現状である。そこで、総合的な学習の時間において、英語科で育成するコミュニケーションを図る資質・能力を活用する機会を生徒に与えることで、その資質・能力をさらに伸長させるとともに、国際理解教育を実施する行うために、テディベアプロジェクトを実施することとした。

２．目的と方法

2-1 目的

本プロジェクト実施の目的は、台湾の小学校の交流相手との活動を通して、生徒に相手を理解し、自分の思いを伝えようとする力や、交流相手からの情報によって異文化にふれ、多様な文化を理解する力を育成することである。

2-2 方法

1）実施計画

中学 1 年　総合的な学習の時間／英語

プロジェクトの活動時間：(50 分× 8 コマ)

〇総合的な学習の時間として 5 コマ

国際理解教育（台湾について知る・日本や日本の学校について伝える・テディベアの出発式・テディベアとの歓送迎会・TV 会議）

〇英語科として 3 コマ

自己紹介をしよう／英語の手紙を書こう

※中学 1 年 3 クラスに計 8 コマずつ実施。

３．活動内容

3-1 具体的な実施内容 1

「台湾について知る」

・前年度のテディベアプロジェクトの説明

・台湾について（食べ物・文化など)、iPad を使って、インターネットで調べ学習を行う。

［活動時の生徒の姿］

・交流や異文化理解への興味が高まり、台湾についもっと知りたい気持ちを持ったようだった。

3-2 具体的な実施内容 2

「自己紹介をしよう」

・自己紹介の英文原稿の作成。

・自分の好きなことや興味のあることについて台湾の小学生にどのように伝えるか考え、英語で表現する。

［活動時の生徒の姿］

・台湾の小学生が興味をもってくれそうなことを想像したり、台湾で何が人気があるかを調べたりして、相手に自己紹介文を興味をもって読んでもらえるよう工夫していた。

3-3 具体的な実施内容 3

「日本や日本の学校について伝える」

・生徒が各クラスで用意したテディベアといっしょに、日常の学校生活の写真を自分の iPad を使ってロイロノートで撮影し、英語での一言コメントをつけて教師に送信。教師から LINE で台湾

の学校へ写真データを送る。台湾からも送ってもらう。

［活動時の生徒の姿］

・前年度の中学１年生で実施したテディベアプロジェクトの取組の写真をあらかじめ示していたことで、活動のイメージが湧き、意欲的に取り組むことができた。

・台湾から送られてくる写真をみて、台湾の児童の姿や、これからやってくる台湾のテディベアの姿を見ることができて、交流していることの実感が湧き、到着が待ち遠しい様子であった。

3-4 具体的な実施内容４

「台湾について知る」

・金沢星稜大学の学生から各クラスに台湾と台湾の学校についてプレゼンや台湾の遊び（コマ）の紹介をしてもらう。

・日本のクラスレクリエーションを台湾に紹介するために、レクリエーションをしている動画や写真を撮影し、台湾に送る。

［活動時の生徒の姿］

・実際に台湾の小学校に訪れた大学生からのプレゼンを通じて、さらに交流への意欲が高まった様子だった。大学生とクラスの仲間とのレクリエーションを心から楽しんでいる様子であった。

写真１　クラスレクリエーションの様子

3-5 具体的な実施内容５

「台湾からのテディベアの歓迎会」

・台湾から留学してきたテディベアと自己紹介カードが届く。自己紹介カードには、台湾の生徒の写真とたくさんの英語の自己紹介文が書かれていた。

［活動時の生徒の姿］

・自分のペアになる生徒の顔を見ることができたことで、より交流している実感が湧いたようだ。自分のペアの児童の自己紹介カードを見て、内容を一生懸命読み取ろうとしていた。また、自分のペアの自己紹介カードを見せ合って喜んでいた。

3-6 具体的な実施内容６

「ＴＶ会議」

・台湾の児童一人ずつが自己紹介を行う。ペアの生徒同士の顔合わせを行い、英語であいさつをする。台湾の生徒によるリコーダーや太鼓の演奏、一輪車の披露をしてもらう。

［活動時の生徒の姿］

・日本から送ったテディベアが大切にされている様子をみて生徒は喜んでいた。また、ペアの生徒と短い挨拶ができたことがうれしかったようだった。演奏や一輪車を披露してくれたことで、こんなにも自分たちのために準備をしてくれていたことを喜んでいた。

４成果と課題

〇成果

・日本や日本の学校のことを知らない台湾の小学生に、日本や日本の学校のことを伝えるために、何を伝えればよいかについて考えることが、生徒たちの深い自己理解につながった。

・自分自身について伝えようとしたり、台湾やペアの生徒のことを知ろうとしたりして、自己紹介カードや手紙を書くことで、相手とコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めることができた。また、英語のライティング力を高めることができた。

・担任教師が積極的にクラスでのテディベアとの生活の様子を機会があるごとに写真を撮ってLINEで台湾に送ってくれていた。担任教師とテディベア担当の教員の連携がうまくとれた。

〇課題

・ＴＶ会議では、こちらの準備時間が足りずに、台湾の小学生のプレゼンを楽しませてもらう形になってしまったので、事前に準備の時間が取れればよかった。

・テディベアと生徒を撮影した写真を生徒の名前がわかるようにして送ったが、もっと多く送る機会をもてば、ペアの生徒同士で深い交流につなげられるのではないか。交流先にもそのような写真を送ってもらうようお願いしていくべきであった。

・日本と台湾の教員同士のLINEでの日常的な交流の機会を多くとって、ペアの生徒同士のコミュニケーションの機会をより多くとるべきであった。お互いの好きなことを手紙やＴＶ会議で伝えあう程度だったので、相手の興味のあることを深くきき出せるようなコミュニケーションができるようにしたい。

“Girl Rising Project”の実践

― 高校 3 年生選択授業・「国際理解」―

関根　真理（啓明学園中学校高等学校）

国連の 2030 年までに世界のすべての国々が達成すべき目標として掲げている持続可能な開発目標（SDGs）には、目標４「質の高い教育」と目標５「ジェンダー平等」が含まれている。SDGs は、「誰一人取り残さない」がキャッチフレーズになっており、『女子教育の大切さ』は、世界の人々と共に解決しなくてはいけない課題である。

質の高い教育　　女性の人権　　国際協同学習　　課題発見　　課題解決

1. はじめに

このプロジェクトを開始した理由は、筆者がマララ・ユスフザイさんの勇気ある行動に共感し、新しいプロジェクトとして女子教育の大切さについて協働学習をしたいと iEARN の Teachers Forum に投稿したのが始まりである。2014 年度より、iEARN の Ed Gragert 氏と共に、Girl Rising のファシリテーターとなり、「女子教育の大切さ」を学ぶための活動をしている。

２．目的と方法

Girl Rising プロジェクトは、開発途上国で女子がどのような境遇にあり、その中で教育を受けた女子がどのように変化し、周りに影響を与えることが出来るかを学ぶ。さらに、他国の生徒と協働学習することにより、自国や他国に存在するジェンダー問題を発見し、課題を解決するために立ち上がり、アクションを起こすことを目的としている。

参加するには、9 ヶ国（カンボジア、ハイチ、ネパール、エジプト、エチオピア、インド、ペルー、シエラレオネ、アフガニスタン）の少女たちの DVD（映像）または Youtube で視聴することから始める。DVD は、ファシリテーターの Ed Gragert 氏に連絡を取ることによって入手可能である。どの国の映像をどのぐらいの期間費やして学習するかは、担当教員の判断による。ストーリーの内容と問題提起は国によって、それぞれ内容が異なるので、教員は事前に全てのストーリーを視聴し、扱う生徒の年齢や内容によってテーマを選択する必要がある。その後、生徒達はストーリーを視聴し、フォルダーの中に挙げられている質問に答える。

勤務校では、フォーラムに自分の意見や感想を投稿する前に、授業でストーリーで紹介されている各国の課題や情勢について話し合う時間を設けている。さらに、問題解決する為にどうしたら良いかをまず自分たちで模索する。

フォーラムでは、他国の生徒とお互いに気づいたこと、学んだことを共有し、協働学習をすることによって、理解を深めていく。生徒同士はフォーラムへの投稿だけでなく、写真やビデオレターの交換などが可能である。互いの時間が合えば Zoom などのオンライン会議を実施しすることも可能である。

３．活動内容

2020 年度は、高校 3 年生選択授業「国際理解」の生徒、21 名が Girl Rising プロジェクトに参加した。今年度はカナダ、アメリカ、アルゼンチン、メキシコとインドの高校生と協働学習をした。本校の生徒は Girl Rising プロジェクトを通して、女性であるがために現在でも人権を侵害されるような文化や風習があることを知り、この問題を解決するために自国の人々や周りの国々がどのように接していくべきかを他国の生徒と討議した。

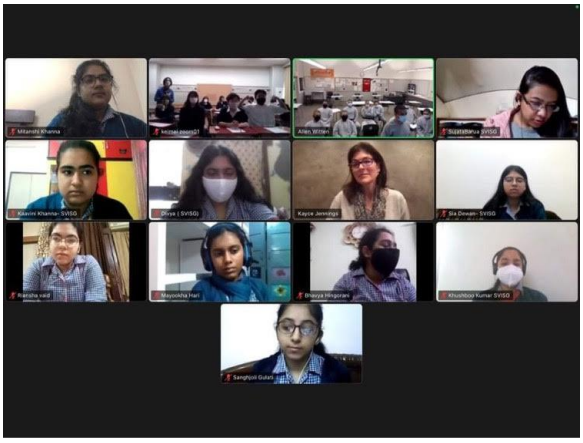
1 学期は、Girl Rising の映像のカンボジアとエチオピアの少女のストーリーを取り上げたた。今年度はコロナウイルスの影響のため、4 月と 5

月はオンラインでの授業となった。生徒は、それぞれ自宅でカンボジアの少女のストーリーを視聴し、スクールタクトを使用して質問に回答し、iEARN のフォーラムで感想や質問を投稿した。同時に、授業を Zoom で実施した際には、お互いに学んだことを共有した。6 月以降は、学校での授業が再開されたため、教室で一緒にエチオピアのストーリーを視聴し、学び合うことが出来た。

2 学期は、ネパールのストーリーを授業で視聴した後、実際にネパールの教員を Zoom に招き、ネパールの現状について生徒が直接尋ねる機会を持った。その結果、親の借金を理由に児童労働を強いる“Kamlari”という風習が現在も地方で存在することを生徒が学んだ。また、違法であるにも関わらず、“Kamlari”はなぜ今も行われているのかという質問に対して、「人々の考え方が変わらないからだ。」との返答が来た。この問題を解決するには、やはり教育が大切であり、人々の考え方が変わらないといけないことを生徒は悟ったようだった。

《ネパールの教員との話し合い》

11 月には、一緒に協働授業をしていたインドとアメリカの教員と Girl Rising のプロデューサーである Kayce Jennings 氏と Zoom による交流を行った。当日、各国の生徒たちは、Girl Rising のストーリーを通して学んだことを共有した。生徒たちは、国は異なっても共通して大切にしなければいけない人権と質の高い教育がいかに大切であるかを確認することが出来た。また、それぞれの国が抱えている女性の差別についても共有した。インドの生徒は、“Kamlari”と似た風習が地方で存在し、他にも女性差別に繋がる風習があることを話した。そして、この問題を解決するには、根拠を示すことや論理的思考が必要であると訴えていた。さらに、Zoom 交流では本校の生徒が作成したポスターを Jennings 氏に紹介し、喜んでいただく場面もあった。この様子は後日、iEARN USA のニュースレターと SNS でも紹介された。



《Zoom 交流での様子》

今年度は、プロジェクトのまとめとしてポスターと動画作成に取り組んだ。生徒たちは、カンボジア、エチオピア、ネパール、難民キャンプ・Dadaab の班に分かれて、授業を通して学んだ事と自分たちに出来ることは何かを表現活動を通して模索した。

５　成果と課題

○成果

Girl Rising のムーブメントは、プロジェクトに参加する生徒たちが力強い地球市民になるように、共に学び合い、励まし合う仲間を生み出すきっかけとなっている。遠隔授業を通して、各国の生徒は同年齢で同じ地球に生きる者として、SDG s 「持続可能な開発目標」の「質の高い教育」と「ジェンダー平等の実現」に対して積極的に関わっていく意識を再確認することが出来た。

○課題

他国の生徒との協働学習を充実させるためには、相手校とのスケジュール調整が要となる。また、生徒同士の学びを深めるためには、フォーラム上でお互いの感想を述べるだけでなく、自国の授業で学んだことや他の生徒の意見に対しての批判的思考、見えてきた課題、そしてそれらの課題に対する解決策の提案などが必要となる。そのために、教員は、日々の授業でこれらの力を生徒が養うことができるように工夫をすることが求められる。

大学実践編
（含 Youth Project）

FOLK COSTUMES AROUNG THE GLOBE PROJECT

―ルーマニアの高校生との国際協働学習―

勝又恵理子（青山学院大学）

Folk Costumes Around the Globe プロジェクトに青山学院大学国際政治経済学部の学生たちが参加し、日本の民族衣装について資料を作成し提供した。また英語版の現在の日本の民族衣装についての動画を作成し、伝統衣装を守ることについて若い世代が学ぶ重要性や意義について海外の生徒と一緒に考えてもらうことを目的とした。フォーラムを使った非同期型交流の他に、ルーマニアの高校生たちと同期型のオンライン交流を行い、互いの民族衣装や課題についてコミュニケーションを通して学ぶことができた。

国際協働学習　異文化コミュニケーション　異文化理解　民族衣装　ICT 教育

1. はじめに

2020 年は COVID-19 がアカデミックの世界に顕著な影響を与え、対面式の授業ができなくなり、多数の大学がオンライン授業に切り替えた。また、多くの学生が自由に海外に行くことができなくなり、留学していた学生は途中で帰国し、留学を控えていた学生はキャンセルしなければならないという状況になった。そのため、国外の人と交流したいという学生たちの声が高まり、オンラインで海外の人と交流することを目的としている iEARN を栗田智子先生にご紹介いただき 2020 年の夏に加入し、Folk Costumes Around the Globe プロジェクトの活動に参加した。

２．目的と方法

2-1　目的

本プロジェクトは学生たちに自分たちの民族衣装や伝統を英語で披露する機会を与え、自分たちの伝統文化を広めることを目的としている。学生たちは民族衣装の写真と説明を提供し、人々がそれをいつ着用するのか、どのように使用していたかを説明する。また自文化の民族衣装や伝統を紹介した短いビデオを作成しプロジェクトのフォーラムに発信して交流を図る。

学生たちは交流を通して、文化的・言語的能力を身につけながら、学生同士が関わり合いを持ち、自分のアイデアや考えを共有する機会を持てる。また、さまざまなツールを利用することで、学生のデジタル能力の向上にもつながっている。

また 2020 年は大学がオンライン授業になったため、iEARN の活動を通して仲間と一緒に海外の生徒と交流する機会を与えることを目的とした。

2-2　方法

2020 年 11 月から月 2 回、筆者とオンライン会議を 30 分～1 時間行った。その他に学生たちだけや各チームで活動を対面とオンラインで行った。

３．活動内容

3-1　全体活動の内容

【2020 年】

11 月　学部の学生団体として iEARN の活動開始

12 月　本プロジェクトの参加者決定

【2021 年】

1 月　チーム分け・活動内容の策定

2 月　日本の民族衣装について調べ、資料を作成し、全体活動で発表

3 月　フォーラムで自己紹介、日本の民族衣装の資料①を発信

4 月　フォーラムで日本の民族衣装の資料②を発信、英語ビデオ作成

5 月　フォーラムに英語ビデオを発信、Zoom 交流の準備と交流

3-2　フォーラムでの交流内容

本プロジェクトのフォーラムで自己紹介をした後、日本の民族衣装に関する英語の資料を 2 つ(資料①と②)発信した。また日本の民族衣装の英語ビデオ（ビデオ①）を作成し発信した。

以下は学生が作成した資料 2 つとビデオのリンクである。

資料

① “Kimono: Most Popular Japanese Costume” https://us.v-cdn.net/6028780/uploads/editor/w7/nuptpb5s2nvf.pdf

② “Fashion Items Based on Japanese Traditional Folk Costumes”

https://us.v-cdn.net/6028780/uploads/editor/wr/krm5rnwrcq0f.pdf

ビデオ
①“Japanese Folk Costumes: KIMONO”
https://youtu.be/kVANdTfascE

3-3　Zoom 会議での交流内容

2021 年 5 月 14 日に Group Facilitator であるルーマニアの Cornelia Platon 先生の高校生たち（Alexandru Papiu Ilarian 高校）と Zoom でオンライン交流を行った。自己紹介をした後に、互いの民族衣装について発表し、質疑応答する時間を設けた。またルーマニアの学生が伝統衣装を着て民謡を披露してくれた。

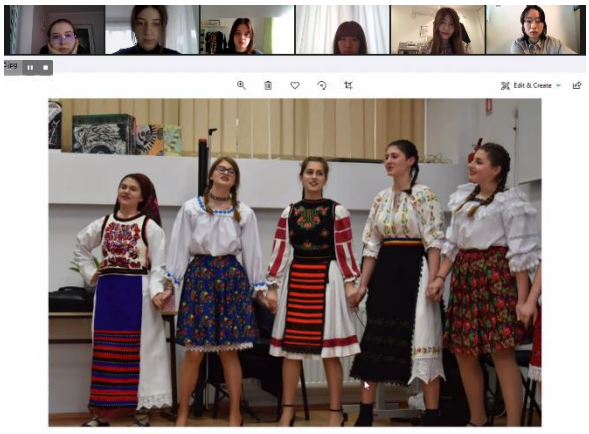


写真 1　ZOOM 会議の様子

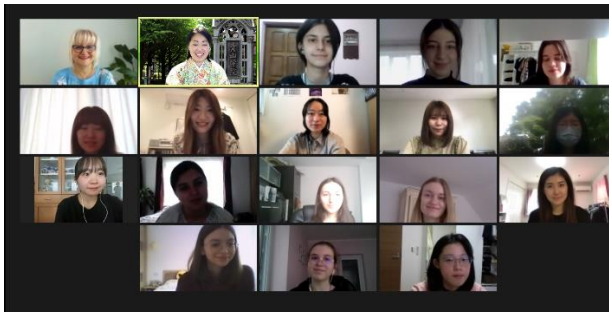


写真 2　ZOOM 会議の様子

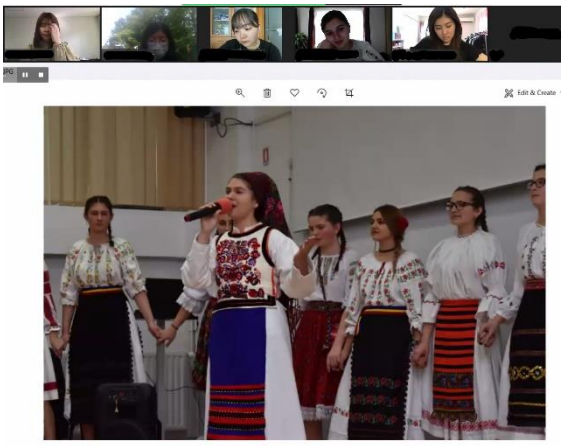


写真 3　ZOOM 会議の様子

４成果と課題

成果

本プロジェクトでどのような活動をしていくか決めるまでに時間がかかったが、決まった後は、学生たちの主体性が高まり、積極的に取り組む姿勢が見られた。民族衣装を着る機会がなくなり、伝統も失われつつある中、自分たちが同世代にどう伝えていけるのかを考える機会となった。

日本の民族衣装の資料とビデオを英語で作成することにより、外国の生徒たちに日本の民族衣装や伝統をどう伝えるかを考えることができた。それと同時に自分たちも知らなかった自文化を学ぶことができた。

英語圏以外の国の生徒と英語を使ってコミュニケーションを取ることによって、異文化コミュニケーションへの動機づけになった。また、ルーマニアの高校生とやり取りすることで、互いの文化や課題を学ぶことができた。

課題

今後は多くの国に資料・ビデオを見てもらいワークショップを開催したい。そして、大学生がファシリテーターとなり、日本国内と海外の小中高校生と国際協働学習を通してファシリテーション・スキルの育成に力を入れたい。

iEARN Project for Future Teachers

未来の教員たちの国際協働学習“Dream School of the Future”

長谷川早百合（明治学院大学）

日本とアメリカの教育者を目指す学生たちが iEARN の Future Teachers プロジェクトに参加した。SDG4 の枠組みで地球市民を意識したインクルーシブ教育を実現するための“Dream School of the Future”について考えることを国際協働学習として取り組んだ。iEARN Project Framework で学習者成果目標の５項目から分析すると実践の結果日本の学生の成長が見られた。

SDG#4　インクルーシブ教育　国際協働学習　　グローバルコンピテンス　CLIL

1. はじめに

iEARN の Future Teachers プロジェクト（以下、FT）は教員を目指す post-secondary の学生たちがテクノロジーとグローバル学習ネットワークを直接体験し多様な背景を持つ学習者に相応しい 21 世紀教育について考えるプロジェクトである。今回、英語講師である筆者は、グローバル教育に関わるコミュニケーション科学と障害を専門とするアメリカの大学教授と国際協働学習プロジェクトを考案し、お互いの学生を FT に参加させた。本項では CLIL（内容言語統合型学習）授業として実践したこの FT を報告する。

２．目的と方法

2-1 目的

21 世紀地球市民に必要とされるグローバルコンピテンス（Boix Mansilla & Jackson,2011）を小学校現場で育む一手段として iEARN のような ICT を使った国際協働学習が有効と考えられる。iEARN の FT に参加した目的は、小学校教員を目指す学生たちが iEARN の国際協働学習を体験し英語を使って外国の学生と対話や協働を通じて共通の目標を達成することであり、その学びを未来の小学校現場で活かしてもらいたい。考案したプロジェクトは SDG4 を枠組みに地球市民を意識したインクルーシブ教育を提唱し、その最終成果物として“Dream School of the Future”を学生たちに検討させた。大学の実践英語コミュニケーション課程で小学校教員を目指す 4 年生 3 名が iEARN の学生会員となり、アメリカの教員課程を受講する大学 1 年生 21 名と以下実施計画に沿って国際協働学習に取り組んだ。

2-2 方法

1）実施計画案

国際協働学習 の４段階：

１．導入・自己紹介（1 回目 ZOOM）

２．教育者インタビュー（9 カ国）、情報収集

３．“Dream School of the Future”制作

４．最終成果物の共有と振返り(2 回目 ZOOM)

２）内容項目

上記段階２.で日本の学生は未来の教育者としてアメリカの学生にインタビューされ、またインクルーシブ教育の先生をもインタビューした。

３）評価方法

毎週の振返りジャーナルに加え海外教育者インタビュー、最終成果物、成果物のプレゼンテーションを内容、言語、貢献度で評価した。

３．活動内容

3-1　具体的な実施内容１―導入・自己紹介

日本の学生は後期授業に FT プロジェクトの説明を受け、iEARN 会員の手続きを行い、ファシリテーターが準備したフォーラムで自己紹介記入から、その後 FT フォーラムにある“*I am from* poem”を書き初回顔合わせの準備を行った。ZOOM での米国側の学生との顔合わせではそれぞれが準備した詩を交換するなどブレイクアウトルームで親交を深め、プロジェクトについて双方の学生たちの共通認識を得た。

写真１　1 回目の ZOOM 会議の様子

3-2　具体的な実施内容―教育者インタビュー

インクルーシブ教育を実践する 9 ヵ国（ブラジル、グアテマラ、フランス、日本、モロッコ、スペイン、台湾、ウガンダ、アメリカ）18 名の教育者たちのインタビューを実施。この中に日本の学生も含まれ、米側の学生と交渉して ZOOM やメールでインタビューされていた。また、インタビューする側として日本の学生 1 名はアメ

リカの学生グループに参加しスペインの教育者をインタビュー。他 2 名は日本人ペアでパートナー校の教授を ZOOM でインタビューした。適切な英語を使ったリクエストのメールを出し、時差を考慮した時間帯の調整、インタビュー形式の決定、質問を事前に送る準備などが求められた。インタビュー後、各教育者の話はそれぞれまとめられフォーラムから全員に共有された。インタビュー以外にもこの段階で SDG4.7、SDG4.5、インクルーシブ教育、多言語主義、グローバルコンピテンスモデル、健常者優先主義(ableism)などについて先方と共有していた記事やネット情報を教材とし、学習を進めた。同じ量は読めないのでかなり集約した。

3-3　具体的な実施内容―成果物の制作

日米混合グループで成果物を作る選択肢はあったが日本の学生はオールジャパンで取り組むこととし彼らの専門とする日本の教育を前提にインクルーシブ教育として“Dream School of the Future”を提唱した。日本側ではこの成果物は、保護者向けパンフレットとして表現された。学生たちは筆者に二度のプレゼンを行い、軌道修正をしながらスクリプトを書き、次の段階への準備を行った。

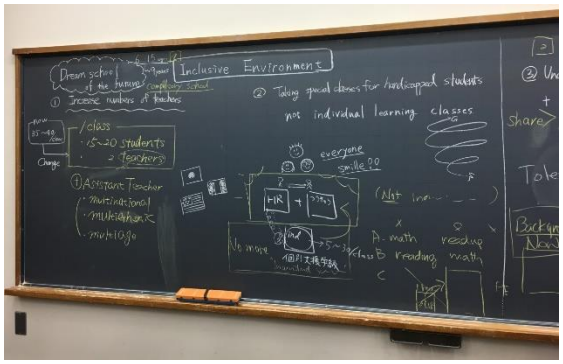


写真 2 “Dream School of the Future”の制作現場

3-4　具体的な実施内容―成果物の共有と振返り

2 回目の ZOOM 会議では 7 つのグループがそれぞれのインクルーシブ教育を軸とした“Dream School of the Future” を提唱した。各グループは 7 分の持ち時間内でプレゼンし表現方法は広告的動画から学校のオープンデーを想定した来校者向けスライド、ろうあ者やグローバル教育を支える教員向けガイダンスなど様々だった。学生たちは簡単なコメントをお互い残しお別れをした。その後、日米の学生は振返りをフォーラムで共有し、FT プロジェクトは終了した。

４成果と課題

〇成果

iEARN Project Framework で目標とする学習者成果項目と学生の振返りや授業後アンケートの結果を照らし合わせ成果を考察する。以下、鍵カッコ内が目標学習者成果項目である。

1. 「グローバルなコミュニティとつながり、その一員となる。」

教育実習が行われる時間的余裕がない中、学生たちのモチベーションは非常に高く、アメリカの学生たちとの国際協働学習への価値を感じていた。また、本課程後に行われた iEARN Virtual Exhibition で発表もした。グローバルなコミュニティとのさらなるつながりに興味を持ちその一員として大いに学び、経験を楽しんでいた。

2. 「多様な聴衆とつながるためのコミュニケーション能力を身につる。」

英語で話すスキルが上がった実感に加え英語コミュニケーションに対する考え方を変えていた。「うまく伝わらなかったら他の言い方を使ったり、相手が聞いてきてくれたりするので、そこで互いにコミュニケーションを取ることができる」の気づきや自分の経験を多様な人たちに伝えることに達成感を感じたとの振返りもあった

3.「異文化や異なる視点を持つ人々への寛容さと尊敬の念を持つようになる。」

インクルーシブ教育についてともに考えることで「互いの良さや課題点を見つけることができた」ことを評価し、障害に対する日米の考え方の相違点や、英語話者でない自分に対しての気遣いと寛容さをアメリカの学生から感じていた。

4. 「地域や世界のコミュニティに有意義な貢献をする。」

学生たちは FT での学びを近未来の小学校現場と繋げていた。英語を学ぶことの有用性を児童に伝えたい、児童を受け入れ寛容でありたい、多様性を認める社会を自分のクラスからその精神を創造したいと小学校現場での行動変容を考えていた。

5. 「互いを思いやり、地球を大切にする文化を持つようになる。」

寛容の重要性を訴え、多様性を受け入れる姿勢を持ち、本プロジェクト自体がインクルーシブであったと感動と感謝を述べる学生たちだった。

〇課題

・FT には大変協力的で有能なファシリテーターがいるので安心できる一方、必ず相手が見つかるわけではない。コロナ禍の影響があったようだが相手校の先生と対話を始めたのが 8 月半ば近かった。学習するトピックも相手の先生と話し合って決めるためシラバスを流動的にしておく必要がある。2 月前後に提出する日本の大学のシラバスに導入するには多少のリスクがあることを理解しておく必要がある。

参考資料

Boix Mansilla, V. & Jackson, A. (2011). *Educating for Global Competence: Preparing our Youth to Engage the World.* CCSSO-Asia Society. https://asiasociety.org/files/book-globalcompetence.pdf

異年齢グループの協働による Holiday Card Exchange Project

津田ひろみ（実践女子大学教職課程）

要旨　JEARN Youth Project として参加した Holiday Card Exchange Project の実践を報告する。教職課程の大学 2 年生 7 名が公立小学校 5 年生 3 クラスの小学生と協働し、海外の小学校とクリスマスカード交換に挑戦した。コロナ禍の状況下、鑑賞会をオンラインで実施するなど工夫しながら無事にプロジェクトを達成した。海外から届いたカードを手にしたとき生徒の異文化に対する意識が大きく変化した。

キーワード　小学生　大学生　コロナ禍　オンライン　異年齢グループの協働学習

1. 本実践の背景

学習者による自律的な学習態度を育むことを目標に協働学習を研究してきたが、今年度は iEARN 主宰の Holiday Card Exchange Project に JEARN Youth Project として参加し、大学生と小学生の異年齢間の協働学習を試みた。

２．目的と方法

2-1　目的

大学生と協働しながら、小学生が本物の英語に触れて異文化への意識が変わり、世界との繋がりを実感することを目的とする。小学生の英語学習への動機づけが高まることが期待される。

2-2　方法

1）実施計画案

・Holiday Card Exchange Project に「小学校教育」を受講する大学 2 年生 7 名と小学校 5 年生 3 クラス 100 名が Youth Project として参加

・プロジェクトの活動時間：45 分 × 3 コマ

・大学での準備時間：90 分 × 3 コマ

2）内容項目

小学校の「総合的な時間」内の活動で、活動目的は地域とのつながりや理解、国際交流である。

３．活動内容

3-1　実施内容概要

グループは日本を含む 6 校で、1 校あたりの参加者数、年齢はまちまちだった（表 1）。

新型コロナの影響が広がり、カナダではロックダウン明けの 12 月に 50 名のうち 10 名が登校した。カナダへの郵便物は到着まで 3 週間を要し、ベラルーシへの EMS（国際スピード郵便）は一時期停止され、スロベニアから iEARN への連絡は途絶えた。

図 1. 日本の子どもたちの作ったカード

コロナ禍では、オンラインによるカード交換という選択肢もあったが、小学校の ICT 環境の実情に鑑み紙媒体を選択した。

表 1. 同グループ参加国の内訳

参加国	生徒の年齢（才）	生徒数（名）	返事到着時期
台湾	11	20	12 月中旬
台湾－台南	13	46	12 月中旬
カナダ	12-13	50	1 月中旬
ベラルーシ	10-12	10	12 月中旬
スロベニア	9-13	30	連絡なし
日本	10-11	100	11/19 発送

3-2　具体的な実施内容

今年度は教職課程がコアカリキュラム移行期間に当たり、小学校教育 15 コマのうち 6 コマが英語科に当てられた。3 コマは小学校で実習（1 校時は 45 分）、3 コマは大学で準備、買い物や発送などは授業外活動とした（表 2）。

表 2.　実践の大まかな流れ

回	日程	場所	主な活動
1 回	10 月 14 日	大学	プロジェクトの主旨説明、役割分担
2 回	10 月 28 日	大学	国別紹介スライド・英語表現集の作成
3 回	11 月 11 日	小学校	相手国紹介、英語指導、カード作り開始
4 回	11 月 18 日	小学校	カード仕上げ 発送準備
5 回	1 月 20 日	大学	海外のカードに日本語の注釈をつける
6 回	1 月 27 日	オンライン	鑑賞会 小学生の感想

1）準備活動

学生に本プロジェクトの主旨を説明し、手順を確認し、国別担当を決めた。国の紹介スライドと、小学生が使える英語の挨拶文を準備するよう指示したが、学生は英語専攻ではないため授業内で simple English を指導した。

2)　小学校での実践活動

大学生は 3 つに分かれ、準備したパワーポイントを使って 5 年生各クラスで相手国を紹介し、プリントを配布して英語表現を教えた。小学生は自分が本当に書きたいことを英語で書きたがったため、学生はネットで調べて対応し予定以上に時間を要した。結局、ホームルームの時間を使って仕上げていただいた。カードの装飾用の鶴やサンタクロース、トナカイの折り方も学生が指導した。カードが仕上がった段階で担任の先生方にアンケート調査を依頼した。

3)　鑑賞会

コロナ禍で直接指導ができないため、届いたカードを大学の授業で確認し、小学生に難しそうな英語に日本語の訳や注を記した付箋を貼りつけた。小学校では、届いたカードを廊下や黒板に国別に展示し、生徒は密にならないよう順番に鑑賞した。鑑賞会は、両校を zoom でつなぎオンラインで実施した。

オンライン鑑賞会当日は各国の担当学生が感想を伝え、代表的なカードを紹介した（10 分）。Breakout session では 5 年生と学生が 3 つのクラスに分かれ担任の先生を中心に感想を述べあった（20 分）。その後ホームに戻り、各クラスの代表生徒がクラスで話し合った内容をカメラの前で順に発表し、全員で共有した（10 分）。

活動後に小学生に感想を書いてもらった。

４．結果

4.1　小学生のアンケート調査と結果

カード作成後、次のアンケート 11 問に 3 件法（とてもそう思う、そう思う、そう思わない）で回答してもらった（結果は図 2）。

1. プロジェクトに参加して楽しかった
2. 外国のことを知ることができて楽しかった
3. 外国の小学生と手紙の交換ができてわくわくした
4. 英語やほかの外国語を書くのは楽しかった
5. 英語の例文から書きたいことがみつかった
6. 外国からどんなカードが届くか楽しみ
7. 外国の小学生とまたカードの交換をしたい
8. カードを送った国にいつか行ってみたい
9. もっと英語をがんばろうと思った
10. 英語だけでなくほかの外国語も勉強したい
11. 大学生といっしょに活動して楽しかった

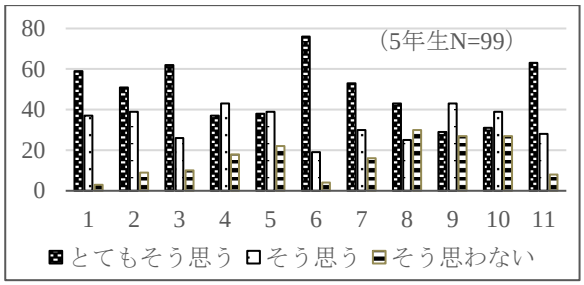


図 2.　Project に参加した振り返り

4.2　オンライン鑑賞会後の小学生の感想

1）海外との交流について

・海外にそんなに触れてこなかったけれど海外のことが気になった
・日本の文化について書けたから良かった

2)　英語、外国語について

・英語の筆記が苦手だが、この活動を通して上手になったと思う
・他の国の言葉を知れたからうれしかった

3)　その他

・早く返事が来ないかなとワクワクした
・またやりたいと思いました

4.3　オンライン鑑賞会後の学生の振り返り

・このプロジェクトを通して自分と各国で手紙を書いてくれた子は変わらない、いい人なのだという考えに変わったと小学生が述べていた。
・異文化理解教育を行うことで、子どもたちの海外への興味・関心、英語の学習、日本文化について、表現力を身に付けることができる。
・今回のプロジェクトのように実際に他の国と交流を持って、相手を理解しようとする過程で相手の国のことを知るという方法のほうが、児童の身につくのではないかと考える。

５．成果と課題

5.1　成果

・生徒たちは、台湾でも同じ人気アニメを観ていることを知り海外の子どもたちとの繋がりを実感した。コロナが世界中に広がっていること、クリスマスや正月が世界共通であることなど、外国への理解を深め、興味・関心を強めた。
・学生たちは、小学校での初めての授業に当初戸惑ったが、小学生に頼りにされ自信をつけた。
・オーセンティックな教材を利用した CLIL 的アプローチの学習がいかに子どもたちの異文化理解を助け、興味を引き出すかが確認された。
・外国をもっと知りたい、外国語をもっと勉強したいという内的動機づけの高まりがみられた。
・大学生と小学生という年齢差のある異質のグループが「共に学ぶ」協働学習の新しい形態の可能性を示唆することができた。

5.2　課題

次年度は小学校教員と連絡を密に取りながらもっと協働してプロジェクトを進めたい。

大学を拠点とした Holiday Card Exchange プロジェクト

COVID-19 パンデミックの中のオンライン・ワークショップの試み

栗田智子（実践女子大学短期大学部）

世界の子ども達がホリデーカードを交換し合うことにより、自国と他国の文化を相互に学び、国際的視野を養い、世界の人々の多様性を学ぶことを目的とした Holiday Card Exchange プロジェクトを、実践女子大学短期大学部の学生が、2016 年から子ども達と保護者をキャンパスに招き、ワークショップをおこなう形で実施してきた。しかし、2020 年度は、新型コロナパンデミックで直接集まれないため、学生は、デジタルスキルを学びながら、オンラインで準備し、初のオンライン・ワークショップの実施、デジタル画像でのホリデーカード交換を行った。学生対象のルーブリック調査では、国際的視野、協働力、行動力の項目で成長が見られた。

プロジェクト　　国際的視野　　異文化理解　　大学　　オンライン

1. はじめに

2016 年度から、実践女子大学短期大学部は、Youth プロジェクトとして、Holiday Card Exchange プロジェクトのワークショップを学生が企画し開催してきた。5 年目を迎えた 2020 年度は、教育プロジェクト「グローバル・シティズンシップ教育への取り組み」の一環として行なった。新型コロナウィルスの感染拡大により、オンラインを活用しながら、準備もワークショップも、パートナー校とのカードの交換も行なった。

２．目的と方法

2-1 目的

1) プロジェクト参加者が、自国と他国の文化を相互に学び、異文化コミュニケーションへの興味、国際的視野を育てる。

2) 短大生が、国際協働学習のワークショップの企画運営を通じて、国際的視野を養い、協働する力、行動する力の向上をはかる。

2-2 方法

1) Holiday Card Exchange プロジェクトに登録した。パートナー校は、アメリカ、ロシア、スロベニア、台湾の学校計 6 校だった。
2) 短大生（16 名）が、「世界のお友達とホリデーカードを交換しよう！〜Holiday Card Exchange Project 2020」を企画した。
短大生は課外プロジェクト後期の活動として、10 月から毎週 1 回昼休みに Zoom によるミーティングを実施し、参加募集した子ども達を対象に、オンライン・ワークショップを 2 回行った。
3) オンラインによるワークショップを実施し、子ども達にカードを書いてもらい、海外のパートナー校に、デジタル画像でメールで送った。相手校からは、各国の事情により、デジタル画像、台湾からは現物のホリデーカードが届いた。

2-3 評価方法

課外活動であるが、短大生を対象にルーブリックによる評価を行った。

３．活動内容

3-1　準備

10 月から、Zoom ミーティングと LMS を使い、チラシの作成から事務局、スライド作成、カード見本作成を学生が行った。

3-2　第 1 回ワークショップ（オンライン）

日時：2020 年 11 月 8 日（日）

実践女子大学渋谷キャンパスから、ワークショップを Zoom で発信。司会、撮影を学生が担当した。一部の学生は自宅から Zoom に参加した。プログラムは以下の通りである。

1) パートナー校の国・地域の地理、文化、ことば等についてのクイズ大会
2) 日本文化（お正月）の紹介
3) 日本文化への関心を深めるためのパフォーマンス（獅子舞や皿回し）
4) 海外の学校に送るホリデーカード（年賀状）の作り方アドバイス

パートナー校の台湾の先生が参加し、英語でメッセージをいただく場面もあった。

3-3　第 2 回ワークショップ（オンライン）
日時：2020 年 12 月 20 日(日)
実践女子大学の文化祭である常盤祭の Live 配信で実施した。各国から届いたホリデーカードの紹介とただじゅんさんによる、世界のじゃんけんや太鼓のお話を発信した。
学生は、獅子舞を撮影し、獅子舞紹介の英語動画を作成し、パートナー校へ送った。

写真 1　第 1 回ワークショップ配信の様子

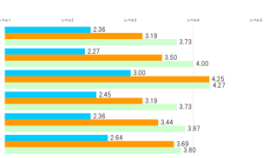
写真 2　第 2 回ワークショップ配信の様子

4 成果と課題

4-1 成果
・新型コロナウィルス感染拡大の中で、4 カ国 6 校全てとカード交換が滞りなくおこなえた。
・第 1 回ワークショップでは、台湾の先生と、また、2021 年の 4 月には、ロシアのパートナー校と Zoom による交流をおこなうことができた。このように、パートナー校の先生と生徒とリアルタイムでオンライン交流ができ、異文化コミュニケーションへの興味と国際的視野を育めたと思われる。
・短大生は、オンライン・ミーティングで話し合い、各自が責任を持って主体的に仕事をこなした。この困難な状況で、デジタル・スキルを効果的に使う方法を学びながら、協働して企画から運営までおこなった経験は、学生達の学びと自信につながった。
・学生の感想
「ホリデーカードプロジェクトを通して、自ら立案し目標をたて計画をすることは中々ないのですごく大変でしたが、達成感を感じられました。司会をしたり、ただじゅんさんと一緒に発表できたことがすごく楽しくて、自ら挑戦してよかったなと思いました。また海外の子供たちからたくさんのカードが届いたときは少し泣きそうになるくらい、この状況下でやり取りできて本当に良かったです。このプロジェクトを通して、学んだことがたくさんあったので今後の就職活動に生かしていきたいと思います。」
「パワーポイントやマナバなどたくさんのツールを利用することに慣れてきたことを感じました。当日も積極的に行動することができたのでよかったです。これから社会に出るうえで必要なチームで協力して取り組む力がついたことを実感できました。参加して本当によかったです。」
「異なる学科の学生と協力して活動に取り組んだため、自身の考えとは真逆の考えを教えていただき視野を広く持つことが出来たと思います。」
・学生のルーブリック評価では、プロジェクトの前後で、国際的視野、協働力、行動力において成長が見られた。結果(実践女子大学短期大学部　大塚みさ教授作成)は、【国際的視野-2　カード交換国への知識と理解を深め、子ども達に伝える】の伸長度が+1.73　と最も高く、【行動力-1　目標を設定し、計画、及び企画を立案実行できる】の伸長度が+1.51　で次に高かった。

表 1 ルーブリック調査結果（大塚教授作成）

項　目	1回目	2回目	3回目
日本文化の特長を世界に発信できる	2.36	3.19	3.73
カード交換相手国・地域への知識と理解を深め、子どもたちに伝えられる	2.27	3.50	4.00
メンバー間で協働することができる	3.00	4.25	4.27
交流相手と協働することができる	2.45	3.19	3.73
目標を設定し、計画及び企画を立案・実行できる	2.36	3.44	3.87
課題を発見し、問題解決につなげられる	2.64	3.69	3.80



4-2 課題
・オンライン・ワークショップは対面と違い、参加した子ども達と学生が対話することが難しかった。
・学生が、日本文化やパートナー校の国の紹介をどのように子ども達に伝えるか、また、動画作りについても、どのように情報を伝えるかということを学生が考えていけるよう指導したいと思う。
・第 2 回ワークショップは、常盤祭の Live 配信のため、こども達が海外からのカードを鑑賞し、発見したことを話し合い、発表する機会を作ることができなかった。次年度は子供たちの発表の機会を作りたいと思う。

GOMI on EARTH project からの学び
—Youth project を通して—

岡田　麻唯（青山学院大学）

青山学院大学国際政治経済学部の学生が、GOMI on EARTH プロジェクトにはじめて参加した。学生チームで話し合いを重ね、世界共通の社会問題であるプラスチックごみについて、自分たちに何ができるのかを考えた。世界中の子供たちに向けて、ごみの現状と削減のアイデアをまとめたビデオを作成し、発信を行った。この活動を通して、学生同士が協力しあい、プラスチックごみ問題についての学びを深め、自ら行動を起こす意識を強めた。

国際協働学習　ICT　ごみ問題　プラスチックごみ　ユースファシリテーター

1. はじめに

世界中に大きな衝撃が走った新型コロナウィルスの影響は、私たちの生活基盤を変えただけでなく、教育分野にも大きな影響を及ぼしている。異文化交流に興味を持つ学生も、海外留学や異文化の人々との関わりなど、体験を通した学びを得ることが難しい状況が続いている。さらに、自宅待機やオンラインでの学習が進む中、学生の学習意欲を維持することも困難である。

そのような中で、ICT を活用しての国際協働学習の歴史を持ち、その成果と重要性を発信してきた iEARN との関わりは、学生が体験的に学ぶことができる貴重な機会となったと感じている。

今回、はじめて GOMI on EARTH プロジェクトに参加し、地球規模で深刻な問題となっているプラスチックごみについて学びを深めた。この問題を、世界中の子供たちと共に考えようと、学生自らが考えた取り組みをビデオにし、発信を行った。

2．目的と方法

2-1 目的

以下の 4 点を目的とする。

①ごみ問題に関心を持ち、学びを深める。
②自分たちに何ができるのか解決案を考え、世界中の子供たちへ発信する。
③ユースファシリテーターの役割を通して、異文化理解を深め、異文化コミュニケーション力を高める。
④学生同士の交流を深め、チームで協力することを学ぶ。

2-2 方法

1）実施計画案

GOMI プロジェクトチームを立ち上げ、ZOOM 会議にて計画を立て、進めていく。

2) 実施内容

プラスチックごみ問題について、私たちが身近な問題として捉え、日々の生活の中でできる解決策について、紹介ビデオを作成し、フォーラムに投稿する。

3．活動内容

3-1 活動スケジュール

2020 年
11 月　青学 iEARN プロジェクト立ち上げ
　　活動説明会実施
12 月　活動スタート・メンバー同士の交流
2021 年
1 月　プロジェクトグループ分け・活動開始
2 月　企画の話し合い・内容決定・役割分担
3 月　ビデオ作成・完成
　　フォーラムへ自己紹介とビデオ発信
　　青学 iEARN チーム内での発表

3-2 企画準備（ZOOM 会議での話し合い）

週に 1 回 1～2 時間、ZOOM 会議を実施し、プロジェクトの企画について話し合いを行った。学生同士、初対面でもあったため、お互いに交流を深めながら、チーム力を高めていった。ごみ問題について、さまざまな意見交換を重ねた結果、プラスチックごみ問題の現状とごみ削減のために自分たちができる取り組みやアイデアについて、ビデオを発信することに決定した。

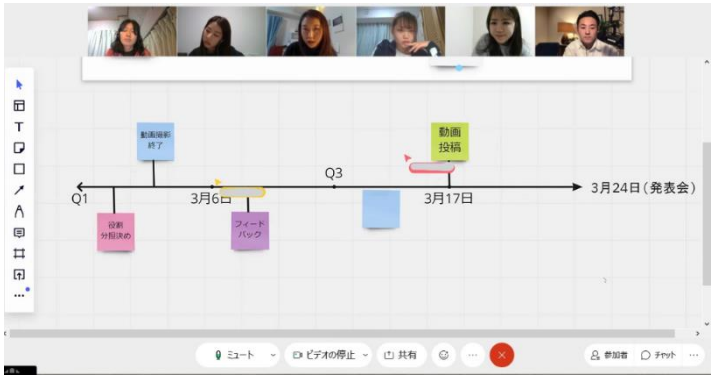


写真 1 ：ZOOM での話し合いの様子

3-3 ビデオの作成とフォーラムへの投稿

ビデオの作成は、役割を分担し、それぞれの担当ごとに作業を進めていった。ビデオ内容は、はじめにプラスチックごみの現状について図やデータ、写真を用いながら説明した後、プラスチックごみ削減のための取り組みについて、各自が生活の中で実践できるものを動画に撮って紹介した。学生がそれぞれ紹介する取り組みでは、アイデアが重ならないよう配慮した。また、日本文化も同時に紹介できるようなものとして、お弁当箱（曲げわっぱ）の利用や風呂敷を使ったエコバックなども取り入れた。

フォーラムへの投稿は、自己紹介と共に、ビデオの説明文をつけて発信した。新年度の時期には、新入生や新学年を迎える子供たちへのお祝いメッセージとともに、JEARN のホームページでも紹介された。

写真 2　JEARN のホームページ掲載

４成果と課題

【成果】

次の 2 つのことがあげられる。1 つは、ごみ問題について、マクロとミクロの両方の視点から現状を捉え、取り組むことができた点である。数あるごみ問題の中から多くの学生が関心を持っていたプラスチックごみに焦点を絞り、世界規模で考えるとどのような悪影響があるのかという視点から、個人レベルでできることへと視点を変えていくことで、他人事ではなく、自らの問題として捉える意識が強まっていった。

2 つ目は、ビデオ作成から発信までの過程を通して、学生同士の自発的なコミュニケーションが養われた点である。話し合いはすべて学生主体で行い、積極的に意見交換を進めていくことを通して、ユースファシリテーターとして、世界の子供たちへ発信するという意識が強まっていった。対面での活動ができない状況や全員参加の話し合いが難しい中でも、うまく役割分担を決めて、お互いに助け合っていた。

【課題】

一方的な発信だけで終わってしまわないよう、直接的な交流を通した国際協働学習の実現を目指すことで、より学びを深められると考える。学生たちも、海外校との交流に高い興味関心を持っている。今後は、ごみ問題の取り組みについて、海外の学校との交流や日本の学校とを繋ぐファシリテーターの役割として、活動を広げられるとよい。現在、このビデオを元に、ワークショップを計画中で準備を進めている。

以下に、学生の感想を一部紹介する。

○GOMI プロジェクトを通して学んだこと

・環境問題を普段の生活の中で自然と意識するようになったこともそうだが、一つのプロジェクトをグループで遂行する大変さも学んだ。

・自分から社会問題について発信したことがなかったので、自分たちで考えて一つのことを作り上げそして発信する過程が刺激になりました。

・一つの問題でも様々な考え方があることに改めて気付かされたこと。これからも自分の偏った考えだけでなく色んな人の意見を聞こうと思わされたこと。 新しい友人に出会えたこと。

・ゴミ問題の現状や学生でもできる身近なアクションについて学ぶことができた。 企画考案から精査、実施までの過程を学ぶことができた。

○大変だったこと

・ゴミ問題というグローバルイシューに対して、日本から発信する意義（オリジナリティ）と誰でもアクションに参加できる普遍性を意識しながらプロジェクトを作り上げていくこと。

・色んな意見がある一方でそれをまとめることが大変だった。みんなが納得する一つのものを作る／決めるのは大変だった。

・コロナによって直接会えなかったこと。なかなか全員が合う時間を見つけるのが難しかった。

○自分自身が変わったと思うこと

・ミーティングに参加できなかったメンバーのバックアップなど、周りをサポートする力が身についたと思う。

・意識の仕方が変わった。ファシリテーターとはいえ、プラスチック問題の現状についてドキュメンタリー等も観たりしながら調べたため、日々の生活でも気を付けるようになったことは多い。

・自分から意見やアイデアを積極的に発言するタイプではなかったが、Gomi on Earth プロジェクトでは主体的に取り組めたと感じている。

・色んな視点から物事を見る意識が強くなった。

Peace Talk from Nagasaki の活動報告

活水女子大学「語学ボランティア演習」での被爆講話の配信

吉牟田聡美（活水女子大学）

2020 年度活水女子大学初の試みで、「語学ボランティア演習」という授業の一環として被爆講話を英語で海外に Zoom 配信するプロジェクトを実施した。jEARN には高木洋子氏が運営する『まちんと』という広島のプロジェクトがあり、そちらのネットワークをお借りして相手校を探していただいた。実際には、英語で被爆体験を語る長崎の語り部とメキシコの ITESM 高校の生徒をつなぐ橋渡しの役割を活水女子大の学生が担った。ファシリテーターの学生、パソコンに不慣れな語り部の方々、そして初めて実施する大学側にとっても考えさせられることの多い取り組みとなった。今後もこの活動を継続すべく準備している。

キーワード　SDGs 目標 16, ボランティア、長崎、平和

1. はじめに

本プロジェクトの背景として当大学にて新規カリキュラムの一科目として『英語』『ボランティア』『地域との交流』を組み合わせた内容にする必要があった。長崎では平和推進協会継承部会の中に、英語で被爆体験を語る英語班が発足し活躍の場を求めていたこともあり、時宜かなってこのプロジェクトが生まれた。また jEARN を紹介してくだった栗田先生、「まちんと」プロジェクトを長年にわたって関与されている高木氏のご協力も暗中模索する筆者には大変心強いものであった。

２．目的と方法

2-1 目的

大学の授業内で実施した iEARN/jEARN のプロジェクトとしての Peace Talk の取り組みを具体的に紹介し、今後に向けての課題点も検証する

2-2 方法

1）実施計画案
教科名『語学ボランティア演習』
活動名 Peace Talk
時間 90 分 x 6 コマ

２）評価方法
学生の評価は、教員（筆者）による客観的評価と学生自身による自己評価をレポートにて提出してもらった。事前にできるようになりたいことを具体的に挙げておき、できるようになったかどうか自分で分析を加えたものである。例えば、「Peace Talk のファシリテーターとして英語でよどみなく語り部の紹介ができたか」など。

３．活動内容

3-1　活動内容概略

表 1　プロジェクトのタイムライン

	項目
7 月 29 日	iEARN ウェブサイトにチラシをアップした
9 月 14 日	メキシコの高校よりオファーがあった
10 月 13 日	大学生は被爆講話の英語の原稿を読み、理解した
10 月 20 日	大学生と語り部の授業内打ち合わせを行った。発音などアドバイスさせていただいた
10 月 27 日	大学生は司会に必要な英語表現などを学んだ。文化交流の準備を行った
11 月 3 日	大学生がメキシコ高校生と文化交流を行った
11 月 10 日	大学生は語り部の紹介を準備する
11 月 17 日	Peace Talk 本番

3-2　Peace Talk 事前準備として

Peace Talk の前にメキシコ高校生と大学生が文化交流を図った。その準備授業として、高校所在地であるモンテレイという都市について、またメキシコの文化について調査し、文化交流につなげた。さらに日本の文化を紹介できるように自分の好きな祝祭時の食べ物、B 級グルメなどについて調べ英語で言えるように準備した。さらに Zoom 越しで楽しめるゲームなどを考案し、パワーポイントでやり方を簡単な英語を用いて示した。これは文化交流の際に大人気であった。

3-3　Peace Talk 本番

当日は 4 名の語り部が来学、Zoom 越しに 30 名を超えるメキシコの高校生に対して被爆体験を英語で語り、活水の大学生は語り部の紹介と Q&A セッションの司会を行った。

3-3　メディアの取材

コロナ禍で来崎する修学旅行生などが減少する昨今、Zoom で被爆講話を配信する試みは珍しかったらしく複数のテレビ・新聞社の取材が入った。本来大学の授業に取材が入ることは難しいが、結果的に大学内の iEARN/jEARN の活動を広める手段として極めて有効ではないかと思われた。

写真 1　当日放送された NHK ローカルニュースより
https://www.youtube.com/watch?v=zWmHT_LxJnw

4 成果と課題

○成果

【学生の事前の期待】

語学支援を行うことやメキシコの人たちの視点を学べることを楽しみにする声や、プロジェクト全体を通じて英語で話すことへの自信を持ちたいと語ったり、はじめてのプロジェクト型学習に期待を寄せるコメント等々が寄せられた。また、長崎とは全く異なるであろう平和への視点を知りたいという声もあった。

【学生の事後の感想】

- ファシリテーターの役割とは柔軟な対応が求められることもあるが、それに対応するには相当の経験と事前準備が必要であるという学びを得た。
- Q&A で出た「アメリカのことがまだ嫌いですか」といったような、メキシコの高校生たちの疑問の素朴さに日本側から理解が生まれていた。
- 被爆講話は語り部が主役になるため、むしろ文化交流の際に果たした役割についての自己評価は高かった学生もいれば、逆に自信を失いかけた学生もいた。

○課題

・相手あって成立するプロジェクトであるため学期開始の前月まで可否がわからないのは見通しが難しい部分があるが、今回築いたネットワークを駆使してできるだけ早い段階で相手校が決まるよう努力したい。

・学生ファシリテーター役には高い英語力・柔軟に場を仕切る力が求められるが、学生にその力量を付けさせるには準備時間が圧倒的に足りなかった。そのため学生が自信を失いそうになる場面もあった。次年度この点については優先的に取り組みたい。

・長崎市内の平和教育に関して県内外の他の地区とは温度差があるため、被爆の事実を長崎の視点のみならずクリティカルシンキングの題材として扱いたかったが、ニュートラルな立場を貫き学生に理解させるためには時間が足りなかった。

・語り部の方からどこまで語っていいかという問い合わせがあった。学生に共有したところ、語り部の表現したいことは 100%語ってもらうよう支援したいと言う。結局、相手校から過酷すぎる場面は”moderate”に描写してほしいという要請が来たためいくつかの場面を割愛したが、今後学生に投げかけ議論し続けていくべき意義深い論点であるように思われる。

・筆者は 4 者の観点から同時にプロジェクトを見ておく必要があるので準備する側は初回の負担が大きかったが、次年度から緩急をつけることができるようになると思われる。例えば、4 者に加えてメディアも来学するため事前の連絡が非常に煩雑なものになった。語り部の連絡手段は手紙と電話であったため、メールでの連絡の必要性を理解してもらった。

・大学の科目として次年度までに解決すべき課題は、学生の評価方法を詳しく設定することある。教員が客観的に評価するにしても、授業態度や提出物などという分かりやすいものになってしまう。また自己評価も個人により分析の深さがまちまちであったため、丁寧なルーブリックと自己分析のサンプルを先に渡しておく必要性を感じた。

Peace Talk は準備に相当の時間がかかるのは否めないプロジェクトのため、次年度は別のプロジェクトを縮小することも検討する可能性がある。また、今回のメキシコを皮切りに北米・南米の小学校から被爆講話のオファーが来るようになり、そちらは授業とは別に筆者個人で対応している。オファーがあるので語り部の方々も自主的な勉強会を開き熱の入った練習を始められるようになった。相手あっての本プロジェクトであるため今後も続いていくことを願ってやまない。

小中学校の国際協働学習を進めるうえでの大学の支援の実際

―テディベアプロジェクトの支援を通して―

清水　和久（金沢星稜大学）

テディベアプロジェクトを進めるうえで、初めての先生でも参加しやすいように、JEARN Youth Project として学生がかかわる支援を考え実施した。具体的には導入時期の興味関心を高める体験型のワークショップ、外国の教員と日本の教員の交流ツールとして LINE グループの活用、外国の紹介および、日本の紹介コンテンツの作成などである。これらは、大学の学生側と現場教員側の双方にとってメリットがあることが分かった。

キーワード　　国際協働学習　学生による支援　テディベアプロジェクト

1. はじめに

筆者は小学校教員養成系の大学に在籍し、小学校教員を目指す学生に対して、国際協働学習の有益性を伝えたいと願っている。そこで、大学の学生と国際協働学習に参加する先生方とをつなぐ研究会を定期的に持ち、進行状況の確認と課題点を明確にしながら支援を行った。

２．目的と方法

2-1 目的

Youth project として学生が、小中学校の教育現場の国際協働学習にかかわるための内容についての、メリットデメリットを明らかにする

2-2 方法

1）研究会の参加体制と計画

交流国は台湾の 3 校の小学校、日本側は小中 3 校。年間 3 回の研究会の実施計画について

表 1 .2020 年度研究会の予定

回	月	内容
1	9 月	スタートの会 台湾教師との顔合わせ TV 会議
2	11 月	各校ごとの活動報告 TV 会議と問題点把握
3	２月	活動のまとめとベアーの返却

2）支援の内容と時期の検討

表２．学生の支援内容

内容	学生の活動
導入授業	Zoom による遠隔 100 人村ワークショップの実施
金沢の情報発信	小学生が訪問できなかった金沢紹介の動画作成
台湾の情報発信	中学生へ台湾の遊具の紹介と実演
台湾動画紹介時の工夫点	土台となる台湾マップの作成とプログラミング教育の出前授業の実施
ＬＩＮＥ打合せ	日本と台湾の教員の動きのチェックと支援

３．活動内容

3-1　実施した研究会の内容

〇第 1 回目研究会（9 月 28 日）

例年は 6 月に 1 回目の会を持ち、英語などで発信するコンテンツ（自己紹介カード、ビデオ）を準備するのであるが、covid19 で 2 学期からの開始となった。

表 3. 2020 年度の交流の組み合わせ

日本の小学校	台湾の小学校
四十万小 6 年 3 クラス	精忠小 5，6 年 3 クラス
大野町小 6 年社会救外	新甲小 5 年 1 クラス
星稜中 1 年 3 クラス	宣信小 6 年 2 クラス 精忠小 6 年 2 クラス

上記の 7 クラスで交流がスタートした。サポート役の 6 名の星稜大学の学生も担当校を決め、学級担任と対面で今後の打ち合わせをおこなった。当日は、Zoom で台湾とつなげ、交流相手の校長先生や学級担任も参加してもらい、と顔つなぎを行った。

〇第 2 回研究会（11 月 9 日）

この時点で日本からはベアーは発送済であるが各校には台湾からはまだ届いていなかった。

各校の取り組み状況の報告

・四十万小学校

今後金沢探検を行う予定で、取材結果をパンフレットや動画にして台湾に送る予定。コロナなどで十分に市内をまわれないため、いけない所は大学生が代わりに訪問しビデオにまとめることになった。また、台湾からは今後ビデオが届くが、そのビデオを日本子供に見せるためにプログラミング教育と融合せることを検討した。

・星稜中学校

活動時間は、英語と特別活動で実施しているため、時間を十分かけられない。台湾に対する調べ活動も十分行えないため、学生が、台湾の遊び道具「ディアボロ」という遊具の実演をすることとし、台湾の紹介を行うこととした。

・大野町小学校

今後、社会科の歴史で調べたこと発信することとした。

○第 3 回研究会（12 月 7 日）

台湾からもベアーが届き、学校での生活の様子を報告、数クラスは台湾との zoom の交流の報告があった。

○第 4 回研究会（2 月 8 日）

活動のまとめと返却するベアーの持参。2 月半ばには大学が責任をもって台湾に郵送した。

3 校の実践経過は、12 月 6 日の第 3 回アイアーンワークショップで報告し、今回のジャーナルにも別途、記載されている。

3-2　学生の支援の内容

１）導入授業としてのワークショップ

図 1　zoom 版 100 人ワークショップ

Covid-19 のため、小学校訪問はできなかったため、世界の富の分布や識字率などの問題を扱う「世界がもし 100 人の村だったら」のワークショップを zoom 形式で行った。すでに遠隔となっていた大学の学生は自宅からアクセス。小学校は遠隔授業になっていないためし、基本的に登校しているので教室とつなぐことになる。学生は、各国の代表の住人になりきって自己紹介を行ったり、クイズ形式で世界の状況を伝えたりした。

２）金沢の情報発信への支援

四十万小の 6 年生は金沢市内の探検をして、その様子をビデオにまとめて台湾に発信する予定であった。しかし、Covid-19 の影響で予定されていたところに行けなくなった。学生が代わりに小学生の訪問予定地を訪問し、ビデオクリップにまとめた。このビデオは YouTtube の限定リンクで台湾にすぐ伝えられた。

３）台湾遊具の紹介

学生が台湾の伝統的なコマであるディアボロの紹介を行った。台湾の子供たちが実演している動画を見せ、中学生使い方を教えた。台湾の伝統的な遊びについて身近に感じさせることができた。中学校の先生にも好評であった（詳細は星稜中学校の報告書参照）

４）台湾の動画紹介時の工夫

お互いの地域の様子を紹介するビデオクリップを作成することが多い。そこで学生が出前授業として行っているプログラミング教育と連動させることとした。具体的には台湾の地図上でロボットカーを走らせ、希望の目的地に着くと設定してある QR コードを読み込みで、その場の台湾の児童が自作したビデオクリップが見られるというものである。

学生はプログラミング教育で四十万小において 1 クラス 2 時間指導し、ロボットカーの使い方を教えている。児童は、その操作法をマスターした上で、今度は台湾の地図上で調べたい場所にロボットカーを移動させ、ビデオクリップを鑑賞することができる。（詳細は、四十万小学校の報告書を参照）

５）LINE グループでの打合

日本と台湾の先生のやり取りは、LINE グループを作り、担当の学生も筆者もそこに加わりやり取りをモニターした。ニュアンス的に伝わっていない場合は、会話に入り、サポートした。学生は、台湾からの写真がアップされた時に日本の先生が多忙で反応が薄い時に、反応を積極的に返していた。LINE グループには日本語と中国語（繁体字）の翻訳アプリを参加させることで、自動翻訳され割と会話が成立していた。

４成果と課題

○成果として

表 4. 学生と現場教師の立場から視点

内容	支援する学生の立場	現場の教師の立場
導入授業	世界情勢についての教材研究。世界の住人としての演技力をつける	共通体験の場として興味関心を持たせられる
金沢の情報発信	金沢の地域取材、動画制作などのコンテンツを作れる	児童が行けなかった地域の情報の取得ができる
台湾の情報発信	台湾の教材研究、中学生に対するプレゼン力をつける	対面を通して人から得られる情報の双方向性
動画の紹介上の工夫	プログラミング教育と国際教育との新たなコラボの企画の可能性	比較対象としての台湾動画の鑑賞 児童のビデオの選択権の保障
ＬＩＮＥでの打合せ	日本と台湾の進行状況の把握と支援者としての立場の実感	翻訳を気にせず、瞬時に思いが伝わるメディアの体験

学生にとっては、学習者側の立場として、発信コンテンツの作成体験、教師の立場として、演技力をつける場、子供へプレゼン体験、プログラミング教育をツールとした国際教育の企画の実現があげられる。現場教師にとっては、マンパワーとしての多岐にわたる支援が期待できた点があげられる。

○課題点として

今後は教育現場と大学間での zoom などの活用、zoom に対応した発信できるコンテンツの蓄積、台湾の児童と大学生との直接遠隔授業、そして GIGA スクール構想に対応した。国際協働学習の支援の在り方も重要なポイントとなると考える。

国際協働学習 iEARN レポート
2021 年 6 月 1 日発行
出版元 NPO 法人 JEARN
https://jearn.jp/iearn-report/index.html
ISSN 2434-0049